
IS ～漆黒の守護者～

加那 翔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS ～漆黒の守護者～

【Nコード】

N6111U

【作者名】

加那 翔

【あらすじ】

通り魔に殺されそうになった妹を庇って死んでしまった主人公、上条 優哉。
だが、それは神様のミスだった。
それを償うために神様は上条 優哉をISの世界に転生させる。

――転生した優哉は、
前世では掴めなかった幸せをこの世界で掴むことが出来るのか。

プロローグ（前書き）

初めましてのかたは、初めまして

二度目ましてのかたは、二度目まして？ ショウです

相変わらずの駄文ですが、

楽しんでいただけると嬉しく思います。

では、どうぞ

プロローグ

俺、なんか悪いことでもしたか？

目の前で起こっている不思議な光景を見ながら、
俺、上条 優哉かみじょう ゆうやは思う。

不思議な光景というのは、スーパーで売ってるような包丁を腹を刺されて殺された

俺の死体が目の前に転がっているんだよね。

……なんか、目の前に自分の死体があるって気味が悪いな。
それにしても、なんで俺は腹を刺されたんだ？

何故こうなったのか、俺は記憶を辿ってみることにした。

……1時間前……

「……はあ、今日も疲れた」

今日の授業をすべて終え、家に帰ろうと帰路を歩いている。

「あっ」

家の前まで行くと、なぜか妹が不機嫌そうな顔をして誰かを待っていた。

……まっ、俺ではないだろうな。俺とはかなり仲が悪いし。

「……はあ、やっと帰ってきましたね。どれだけ待たせるんですか」

……と思っていたのだが、妹が待っていたのは俺だったらしい。

「何のようだ？俺と違って何でもできる恵理さん」

かみじょう
えり
上条 恵理。俺の実妹。

ちなみに俺と違って成績優秀だ。

「……その事で……話をしたいんですけど」

「別にいいけど。それじゃあ公園にでも行こうか」

そういつて俺達は話をするために公園に向かうことにした。

そしてベンチに座り、恵理が話し出すのを待つ。

「……あのさ、私の守るために兄貴が……その……」

ああ、なるほどね。

あいつらから聞いたのか、その話を。

「まあ、その話は本当だぜ」

あいつら
両親は成績が悪いやつには、暴力でも何でもするからな。

リアルな話、俺の体にはかなりの傷がついてるし。

「……そうなんだ」

「それで、もういいか？」

話が終わったと思い、ベンチを立つ。

「あ、 “ 兄さん ” 」

「へっ？」

あれ、今……兄さんって。

「あ、ありがとね／＼私を庇ってくれて」

「いや、別に気にするな……っ！」

恵理から顔を背け、公園から出ようとしたのだが、

ふと恵理の後ろから怪しい男が近づいていたのに気がついた。
そしてその男は恵理を見てニヤニヤしていた。
……こいつ、確実に怪しい。

俺は男に警戒はしていたのだが、
予想を遥かに超えた行動をしやがった。

……カバンのなかから包丁を取り出し、恵理に向かって走り出したのだ。

「兄さん？」

まずい！！恵理のやつ、男に気づいてない。

――くそつ、間に合え！！

「いたつ！！に、兄さん！？いきなり何を……っ！！」

本気で恵理を突き飛ばし、助けることは出来たのだが、俺は包丁を避けれずに心臓辺りに喰らってしまった。

犯人は俺を刺したあと、すぐに逃げていった。

……くそ、俺はあんなやつに刺されて死ぬのかよ。

そんなことを思いながら、地面に倒れる。

「……に、にい……さん？」

「え……り。わるいな……」

そんな俺の近くに座り込んで、泣きじゃくる恵理の頬に手を添え呟く。

……死ぬ前に言いたいことがあるからな。

「喋らないで。今、救急車呼ぶから」

「……もう、無駄だよ。目が霞んできたし。自分でももう死ぬってことぐらいわかってるんだ。だけど死ぬ前に言いたいことがある」

「……な、なに？」

「俺がいなくなっても幸せに暮らせよ」

そう言い終えた瞬間、目の前が真っ白になった。

……死ぬ瞬間ってこんな感じなのか。

そうだ、すべて思い出した。

「……俺、死んだのか」

「そうね。確かに死んだわね」

いきなり後ろから声をかけられ慌てて振り向くと
白いドレスに身を包んだ天使と間違ってもおかしくないぐらい綺麗な人がいた。

「……あら、綺麗だなんて。褒めても何もでないわよ」
あれ、声にだして綺麗だなんて言ってたっけ？

「言ってないわよ。心を読んだだけだからね。
私は神だからね、こんなこともできるのよ」

「……なるほど。神様だからできたのか」
俺がそういうと神様はちよつとびっくりしたようだった。

「……どうしたんですか？」

「いや、今まで私が担当した人達は全員、
信じてない様子だったから。あなたみたいなタイプが珍しくて」

まあ、確かに自分のことを神様だつていう人は痛いもんな。

〃〃10分後〃〃

「ごめんなさい!!」

「はいっ?」

あれから色々話していたのだが、神様に急に謝られた。

「えっと、どうして謝るんですか?」

「実は私のミスであなを殺してしまったんです」

はっ? 神様のミスこいつのせいで俺が死んだ?

「……話を聞かせてくれ」

「はい……」

それから話を聞いてみると、俺が死んだ理由がわかった。

なんでもこの人のミスで、本当は警察に捕まって死ぬはずだった男が警察に捕まらなかったらしい。で、男が生きていたせいで俺は死んだと。

「……なるほどな。だいたいこの事情はわかった」

そついうと神様は少し泣きそうな顔をした。

……そんな顔をされたら怒りたくても怒れないじゃんか。
もとから怒るつもりはなかったけど。

「で、俺は天国に行くことになるのか?それとも地獄か?」
俺の言葉にびっくりしたのか、神様はキョトンとしていた。
やっぱり怒られると思ったのか。

「……私のミスであなたは死んでしまったので、もう一度生き返ってもらいます」

もう一度、生き返るねえ。

「だけどさ、死んだ奴が生き返ったらかしくないか？」

「そうですね。死んだ世界では、ね。なのであなたには転生してもらいます」

転生？

「そうです。あなたにはとあるライトノベルの世界に行ってもらいます」

ライトノベルの世界か。なんか面白そうだな。

「……まあ、話はわかったけど。

どこの世界に行くことになるんだ？」

「そうですね。ISの世界にしましょうか。

理由は私が好きだからですけど」

ISか、俺はあんまり見てないんだよな。

恵理は結構、この小説が好きらしいけど。

つてか……そんな個人的な理由で人を送っていいのか。

「……良いんだよ。じゃ行つくよ」

「ちょ、ちよつと待てー!!」

まだ聞きたいことが………

「……お断りします」

神様がそついうと、俺の足元に急に黒い穴があく。

そして………

「ぶざけるなああー！！！！」

俺は黒くて不気味な穴に落ちた。

「あつ、また間違えちゃった。どうしよ！」
女神の焦ったような声を上から聞きながら。

プロローグ（後書き）

……いかがでしたでしょうか。

といってもまだプロローグなので、わからないですね。

まあ、これから頑張っていこうと思いますので
皆様、応援のほうをよろしくお願いします。

最後に1つ。

できればこれと同時に書いている小説も
見てくれたら嬉しいです

1話 状況確認（前書き）

おはこんばんちわ ショウです。

さつそくですが謝らせてもらいます。

性転換ものを書くつもりでしたが、

作者の力不足により書けなくなりました。

すみませんでした。

なので主人公で行こうと思っているのですが、
それでもいいよ。という方は

これから応援、よろしくお願いします。

1話 状況確認

「……アニメとか見て、結構デカいとは思ってたけど。こんなにデカいとは思わなかったよ」

俺こと【黒月 優哉】^{くろつき ゆうや}は今、IS学園のゲート前にいる。

……何故、女性しか使えないISの使用方法を教育する機関。IS学園のゲート前に俺がいるのかを説明するには、少し時間を遡る必要がある。……3日前まで。

あつ、でも具体的な理由を話すには1ヶ月ぐらい戻らないと駄目か。

――1ヶ月ぐらい前――

俺がISを使えることがバレたのは、

転生してから14年たったある日のことだ。

「転生してから14年たったし、ISでも作ってみるか」

とそんな思いつきでISを作って完成させたときに起こった出来事。

〳〵IS作成中〳〵

「……よし、出来た!!」

3ヶ月ぐらいかけて、装甲がほぼ真つ黒のIS【黒影】^{くろかげ}が完成した。でも、見た目的にはあれだな。

若干、ラウラのIS【シユヴァルツェア・レーゲン】に似てる気が……。
……うん、気のせいだね。こっちのほうが装甲の数かなり少ないし。

「……おお、君はISを作ること出来たのか」
「ふにやつ!？」

いきなり真後ろから声をかけられたので、
びつくりして変な声を出してしまった。

……ふにやつ、ってなんだよ。俺は猫か。
そんな自己ツッコミを心の中でしながら、振り返る。

そこには、黒髪短髪の見た目好青年の男が立っていた。

「……はあ、びつくりさせないでくださいよ。冬弥さん」

「すまんすまん。まさか君1人でISを作れるとは思ってなくてね」
まあ、そう思うような普通は……。

「で、スペックはどんな感じになってるんだい？」

さつきと話を急に変えてくるこの人は、【神崎 冬弥^{かんざき とうや}】

原作にはなかった【Black moon社】ってところの社長だ。

……この会社名でわかると思うが、神崎家と俺はかなり親しい関係だ。

俺の苗字を英語に変えて使われるぐらいの、な。

「そうですね。……まず注目すべき点は、
こいつの圧倒的なスピードですかね」
「ほう」

使い手によっては、敵をノーダメージで圧倒することが出来ますか

らね。

……使い手によって、ね。

「……そして、エネルギー系と実弾系、
両方の武器をつけていることも特徴の1つですね。
後、接近戦もできるし、遠距離戦もできるオールラウンドタイプで
す」

「……なるほど。これは素晴らしい機体だな」

「ありがとうございます。」

そういつていただければこいつも俺も嬉しいですよ」
黒影に触りながら言う俺。

そのときだった。

「へっ？」

「な、なんだとー!!」

俺が触った瞬間、勝手にIS……黒影が動いたのだ。

……嘘だろ。ってかなんで俺、触っちゃったんだよ。俺のバカ。

ってな、ことがあったんだよね。

1ヶ月前に……。

……まっ、これがIS学園に来た1つ目の理由だったな。
で、2つ目が確か……

「すまない、待たせたな」

2つ目の理由を思い出そうとしていたら、
ゲートの中から俺に近づいてくる影があった。

その人物は、鋭い吊り目に黒いスーツを着た女性、
織斑おりむら 千冬ちふゆだった。

「いえ、別にそんなに待ってませんよ」

「そうか、なら良かった」

そう言い終えると、千冬さんは……………

「……………久しぶりだな。黒月」

「そうですね。……………5年ぶりですか？」

「ああ、もうそれくらいになるな」

もう、それくらいになるのか。

ISの世界こしちに来てから時間経過が早く感じるな。

「……………詳しいことは歩きながら話そう」

時計を見て千冬さんが言う。

そっか、急がないとまずいのか。

HRの時間は決まってるからな。

1話 状況確認（後書き）

感想、待ってます（ ^ ^ ）

2話 7年振りの再開（前書き）

どうも、おはこんばんちわ。

最近、ブログを友達と一緒に初めましたショウウです。

…って、ことで

IS く黒き影の如くく第2話

ごゆっくりとご覧ください。

2話 7年振りの再開

「……私を読んだら入って来い。いいな」

「了解です」

千冬さんにそう言われ、指示通り廊下の壁にもたれながら待つ俺。

……そういえば二つ目の目的って、“あいつ”関係だったよな。

【Black moon社】の社長、かんざき神崎 冬弥ふゆやの一人娘。
そして、俺の幼馴染でもある【かんざき神崎 かな香菜】。

『……今日は転校生を紹介する。黒月、入ってこい』

おっと、考え事をしていたうちにお呼びのようだ。

「失礼します」

俺が教室に入ると、驚いた顔をしたやつが3人いた。

……まあ、わかると思うが、一夏と箒。後、護衛対象の香菜だ。

ちなみに俺が小さいころに一夏と箒と香菜とはかなり遊んでいた。

俺が8歳の時までは、ね。

「黒月 優哉ゆうざいです。趣味は料理。

まあ、これからよろしく」

満面の笑みでそういうが、教室は無音になった。

……あれっ？失敗した。

「……男？」

反応が返ってきたのはいいことだけど、
その反応はちょっと嫌だな。

「残念。髪が長いから間違いやすいけど、俺は正真正銘、男だよ。」

「なんなら見せようか？勿論、ベッドの上で……」

「「「きやあああー……っ！！」」」

若干、下ネタになったような気がするが、そんなの関係ない。……受ければ良いんだよ。受ければ。

「男子！！二人目の男子だよ！！」

「しかもまたうちのクラス！！」

「そしてかなりの美少年！！」

「私、黒月君になら抱かれない／＼」

「おいおい、男が来たからってこんなに騒ぐことか？」

……って、男がISを動かせるのは珍しいことだから仕方ないか。

そして敢えて、最後のやつには触れない。

自分から言ったような感じだけど、触れたらマズイ気がする。

「騒ぐな。今は休み時間ではないぞ」

パンッと手を叩いて、千冬さんの一声かけるだけでうるさかったクラスが一瞬で静かになる。

さすがですね。一言であれだけうるさかったのを静めるなんて。

「黒月、お前の席は一番後ろの席だ。さっさと座れ」

「はい」

俺は千冬さんに言われた通りに空いていた席に座り、連絡事項を聞いてHRは終わった。

「よつ、久しぶりだな。一夏」
昼休み。

食堂に昼食を食べに来たら一夏と箒、
それに香菜もいる席を見つけて、すぐに向かった。

……つてか、本当にこの学校の女子は行動力があるな。
まさかチームで行動して挟み撃ちとかしてくるなんて。

「おう、優哉か。本当に久しぶりだな。

今まで何をしてたんだ？急にいなくなりやがって」

「それは本当にすまん。……箒に香菜も久しぶりだな」

一夏に謝ってから、一緒に座っていた箒と香菜にも話かける。

「……そうだな。お前がいなくなってから7年ぶりか」

なんか、微妙に言葉に刺があるような気がするんだけど気のせいかな。

「ですね。一体、私達に黙って何をしてたんだか」

……箒さん、香菜さん？やっぱり言葉に刺があるような気が……。

「そ、そういえば、お前もISを操縦できるのか？」

「あ、ああ。つてか、ここについてるだろ？」

そういつて右耳を見せる。

「……専用機！？」

「ああ、【黒影^{くろかげ}】だ」

「黒影……黒影……」

ISの名前を言つと、たった一人、

香菜だけが俺のISの名前を何度も呟いていた。

……なんだ？黒影になんかあるのか。

2話 7年振りの再開（後書き）

はい、どうでしたでしょうか？

楽しんでいただけたなら幸いです。

では、またあえる日を楽しみにしています。

See you again!!（*、*）／

……決まったな（、・ω・、）

〽主人公設定〽（前書き）

7月24日

主人公の押絵追加

8月4日

主人公の補足 変更

～主人公設定～

黒月 くろつき 優哉 ゆうや

性別 男

容姿 背中ぐらゐまで伸ばしている黒髪。瞳は黒色。

普段は首の後ろくらいで髪を束ねている。

体型は一夏と同じくらい。

性格 困っている人がいると放っておけないお人好し。

料理や掃除みたいな家事全般が好き。

補足 神様によってISの世界に送られた転生者。

原作は1巻の知識と、IS関係の知識と原作キャラの知識だけ残ってる。

専用ISは【黒影】くろかげ

【黒影】くろかげ

黒月 くろつき 優哉 ゆうや が作った第4世代型IS。

人には第3世代型ISと言っている。

待機状態は右耳のイアリング。

外見はラウラのIS【シュヴァルツェア・レーゲン】に似ているが、装甲の数は圧倒的に少ない。

特徴

全体的にバランスが良いが、一番飛び抜けているのはスピード。その代わり、シールドエネルギーは白式並みに低い。

使用武器

・月光げっこう

刀身、柄。全てが黒で出来ている刀。黒影の主力武器。

・黒星くろぼし

一転集中型のビームライフル。威力はかなり高いが隙がありすぎるためあまりつかわない。

ワン・オフ・アビリティ
単一仕様能力
でんこうせつか

【電光石火】

自機のスปีド・攻撃力を圧倒的にあげる能力。

ーおまけー

主人公の見た目

> i 2 7 9 5 3 — 3 5 3 3 <

こんな感じです。

……下手ですみません。

〽主人公設定〽（後書き）

という感じになっています。

3話 IS訓練（前書き）

色々、不幸なめにあつたため、

改名して、心機一転、頑張ろうと思った。

加那翔かなしゅうです。

いやあ、不幸ってかなり近くにあるもんですね。

……上。さんの気持ちがあった気がする。

3話 IS訓練

「では、これよりISの基本的な飛行操縦を実践してもらおう。

織斑、オルコット。それから黒月、お前もだ。試しに飛んでみせろ」
千冬さんはそういった後、香菜を見た。

すると香菜はその視線に気づいたのか、首を縦に振った。

……なんだ？何かの合図か。

まあいい。今はまだ、考えないでおこう。

「……了解です」

俺は右手でイヤリングを触り、意識を集中させる。

(翔るぞ、黒影)

心の中でそう呟くと、体全体に装甲が展開される。

……0.5秒。それが俺のISの展開時間だった。

「早くしろ。熟練したIS操縦者は展開まで1秒とかからないぞ」
千冬さんが急かしてくる。

はいはい、だから展開しましたよ。

……って、これは俺に言ったんじゃないやねえな。一夏にか。

「早くしろ」

また一夏は、千冬さんに急かされてるし。

そういえば、さっき千冬さんが言ってたけど、

熟練した操縦者は1秒とかからないんだっとな。

ちゅーことは、俺は熟練した操縦者ってことになんのか。

……操縦なんてあんまりしてないんだがな。

「よし、飛べ」

おっと、考え事をしている間に一夏は展開を終えたみたいだな。
ならさつさと飛ぶか。セシリアもちゃと飛んじゃってるし。

ちなみにセシリアとは、転校してきてからだがかなり仲良くなった。

「……じゃ、お先っ」

途中でセシリアを抜き、遙か空中で止まる。

すると、ほんの少ししてからセシリアが来る。

「本当に早いですね」

「……このスピードの代わりに」

シールドエネルギーはかなり少ないけどね」

そつ、黒影のシールドエネルギーは【500】しかないのだ。

……白式びやくしきとあまり変わらないんだよな。

「ですが、当たらなければ

シールドエネルギーの少なさなんて関係ありませんわ。

現に私わたくしがあなたと戦っても、勝てる気がしませんもの」

あれっ？セシリアって、こんなんだっけ？

一夏に負けたからって、この反応はなんか違うような気がするんだ
けど。

……もしかして俺イレギュラーが入ったから、物語ストーリーが変わった？

『何をやっている。スペック上の出力では白式の方が上だぞ』

……まあな、俺の黒影の出力より白式のほうが上なんだよな。でも、俺のほうが早いと、どういうことでしょうね。

なんとなく予想はつくけど。

「一夏さん」、イメージは所詮イメージ。

自分がやりやすい方法を模索するほうが建設的ですよ」

「そういわれてもな。大体、空を飛ぶ感覚自体がまだあやふやなんだよ。

なんで浮いてるんだ、これ」

一夏は背中に付いている翼状の二対の突起を見ながら言う。

……どう考えても、それはないよな。

「……説明しても構いませんが、長いですわよ？

反重力力翼と流動波干渉の話になりますもの」

「わかった。説明はしてくれなくていい」

まあ、確かに断るわな。

そんなクソ長い話、聞いてられないし。

「俺もいらないぞ。一応わかってるし」

セシリアは一夏を見たあと、俺を見てきたので即座に断る。

「……そう、残念ですわ。ふふっ」

そんな俺達を見て、楽しそうに微笑むセシリア。

……でもな、楽しそうに微笑みながら、

残念っていうても説得力ないよな。

「一夏さん、よろしければまた放課後に指導してさしあげますわ。そのときは二人きりで……」

「一夏っ！……いつまでそんなところにいる……！」

早く降りてこい!!」

箒の怒鳴り声が通信回路から聞こえてきた。

ハイパーセンサーを使って下を見てみると、

山田先生がインカムを箒に取られてあたふたしていた。

『織斑、オルコット、黒月、急下降と完全停止をやって見せろ。

目標は地表から10センチだ』

10センチか。楽勝だな。

「了解です。……なら先に行かせてもらっぜ？」

答えは聞いてないけど」

そう言っただけ俺は二人を差し置いて、

かなりの勢いで急降下をする。

……自分でやっててなんだけど、かなり早すぎる。

………ここだ!!

そう思い、完全停止をする。

結果………

「黒月、0.5センチだ」

『おおーーーーー』

すげえ、適当にやったんだけど。

地表から0.5センチってかなりいいな。

俺の後、セシリアも急降下し危なげもなく完全停止をする。

「オルコット、1・1センチ」

「ふう、まあまあですわね」

結果を千冬さんから聞いた後、

こちらに歩いてきた。

「まあ、あなたには勝てないですけど」

「……ははは。まあ、俺は本当に感覚で動かしてるからな」

今の急降下と完全停止で言つと、

こう、『ヒュン』ときて、地面につきそうな時にブレーキをかける
と。

あれ、俺はわかってるはずなのに。

俺の説明聞いてると、わからなくなってきた。

ってか、俺って説明能力ねえな。

ズドオオオオオオオン！！！！！！

「……はいっ！？」

考え事をしていて何も気付かなかったんだが、

目の前に大きな穴が空いていた。その中心に白式を纏った一夏。

ああ、そうか。

セシリアが変わったから無いと思ってたけど、これはあるんだな。さすが、期待を裏切らない男。一夏だ。

その後、一夏は一人でグラウンドの掃除などを押し付けられたとき。

3話 IS訓練（後書き）

ちなみに不幸な出来事とは、

- ・財布、落とした。
- ・事故にあいそうになり運転手に注意された。
- ・足を怪我した。

……ホント、辛い。

4話 代表決定、記念パーティー！

「おお、やつぱこつからの景色は絶景かな」

俺は屋上から、IS学園全体を見る。

……ホント、高いところって最高だよな。景色は綺麗で気持ちいいし。

そんな呑気なことを考えてたときのことだ。

『それがわからないって言ってーおい、待てって、第！』
いきなり一夏の声が聞こえてきた。

見ればIS訓練施設から出てくるところだった。

……おつ、第も一緒だな。

つーことは、どっかその辺りを見たら“あいつ”もいるのかな？
周りを見渡してみるが、いなかった。

……おつかしいな、絶対にいるはずなんだけど。

「まあ、いいや。後で会えるだろ」

手に持っていた缶ジュースをすべて飲み終え、屋上を後にする。

「というわけで、織斑くんクラス代表決定おめでとう！」
「おめでと〜〜！」

ぱん、ぱんぱーん。とクラッカーが乱射される。

その途中、わざとではないんだが、

『おめでとさん』

『いてっ、優哉。』

直接、クラッカーで顔を狙うのはやめてくれ』

……みたいなやり取りもあったが、気にしないで楽しむようにする。

「いやー、これでクラス対抗戦が盛り上がるね」

「ほんとほんと」

「あ、でも、黒月君でも良かったけどね」

「確かに、そうだよな。黒月君、しっかりしてるし」

悪い、それはお断りだ。

ってか、俺がここに転校してきたときには、決まってたし。しっかりしてるって褒めてもらうのは、嬉しいですけど。

ふと周りを見てみると、明らかにうちのクラスのやつだけじゃなかった。

だってさ、普通に30人越してるんだぜ？

さすがに、これは超鈍感な一夏でも気づくわな。

…… ああ、でも一夏の鈍感^{こいつ}って恋愛関係だけか。

「一夏さん、人気者ですね」

「……いや、これは俺だけじゃなくて優哉も入ってると思うぞ」
俺も入ってるのか？ いや、一夏だけだろ。

「まあ、そうね。……一夏に続いて、ISを使える男だから」

ああ、確かにそうだな。

「はいはい、2年生新聞部副部長の黛

^{まゆすみ}
薫子。^{かおるこ}

今日は話題の新生、織斑 一夏君と

話題の転校生、黒月 優哉君に特別インタビューしにきました〜！
それを聞いた皆は、オーと声をあげる。
……ってか、インタビューって俺もなのか？

「ではずばり織斑君！クラス代表になった感想を、どうぞ！」

「え、えーと」

ボイスレコーダーを向けられ、戸惑ってる一夏。

「まあ、がんばります」

「えー。もつといいコメントちょうだいよ〜。俺に触るとやけどするぜ、とか！」

確かに普通すぎるコメントだな。

……何か予想出来るんだけど、

俺にも来るよなこの質問。考えておこつと。

「自分、不器用ですから」

まあ、不器用っちゃあ不器用だな。女心に関してだけ。

「……じゃあまあ、適当に捏造しておくからいいとして。

次は、黒月君もお願い」

やっぱきたよ、俺にも。

でも、ノリの良いコメントのほうがいいよな。

………ならこれが良いかも。

自己紹介の時のコメントで

肉食男子的なレットルを貼られてる気がするし。

「へっ！？／／／／」

俺は近くにいた女の子を抱きしめ、耳元で囁く。

「……俺に不用心に近づくと、喰い尽くすよ」と。

そういうと、周りの女の子達は『きゃあああ』と言い。

抱きしめていた女の子は、顔を赤くして気絶した。

……あら、幸せそうな顔して気絶しちゃったよ。

ってか俺の予想と違うんだだけ。俺的には殴られると思ってた。

「いいね。そのコメント、捏造なしでも良さそうだよ」

「ちょ………」

「セシリアちゃんもコメントちょうだい」

……そこは捏造してほしかったんだけどな。

「わたくし、こういったものはあまり好きではありませんが、仕方ないですわね」

嘘だっ！……！

結構、近くで待機してただろ。

「と思ったけど、長そうだしいや。写真だけちょうだい」

「さ、最後まで話を……」

「いいよ、適当に捏造しておくから。よし、織斑君に惚れたからってことにしよう」

「なっ、な、ななっ……！？」

顔を真っ赤にするセシリア。

そんな反応してたら、一夏以外なら絶対に気づくぜ。

4話 代表決定、記念パーティー〜1〜（後書き）

評価、よろしくお願いします。

出来れば高評価でw w w w

最後に一つ、作者は

オリジナル純愛小説も作っているので、
そっちも見てくださいと嬉しいです。

5話 代表決定、記念パーティー〜2〜（前書き）

ストックしないで、後編も一気に投稿

5話 代表決定、記念パーティー〜2〜

「……優哉^{ゆうざ}、こっちに好物のチョコレートケーキがあるけど」
「っ!？」

その言葉を聞いた俺は、
イグニッション・フースト
瞬時加速並みの速度で香菜のところへ走っていく。

この反応でわかると思うが、俺の好物はデザートなのだ。
……好物と髪型のせいで、どれだけ女みたいと言われたか。

「へえ、黒月君の好物って甘いものなんだ」
「そうなのよ。昔、店のケーキ全種類制覇とか普通にしたことあるもんね」

「黒月君にも意外と可愛い一面もあるんだね」
「……男が甘いもの好きで悪いかよ」
若干、ふてくされながら言う。

「……っ／＼別にいいと思うよ」
「だよ、私もいいと思うし」
「ところで黒月君の好きなケーキって何？」
好きなケーキか。なんだろう？
「……やっぱりチョコレートケーキかな。生チョコだとなお良し」
「チョコレートケーキか」。確かに美味しいもんね
「……そうなんだよね。」
しかも生チョコになると味もかなり変わるし。

「……織斑君達、何してんだろ？」

ケーキをずっと食べていると、俺の周りにいる女の子が不意に言う。見てみると、一夏の周りにうちのクラスメイトのほとんどがいた。

……ああ、あれか。

セシリアとの記念撮影で、女の子達が乱入してきたってやつね。

「……アンタらは参加しなくていいわけ？」

近くにずっといる女の子達に言う。

……せっかく一夏と一緒にいれるのに、なんでこっちにいるんだか。俺は一夏みたいにカッコ良くなってるのに。

「別に、織斑君に興味ないだけだし」

「まあ、そうよね。織斑君が駄目ってわけではないけど」

……なるほどね。

やっぱり好きな人は、人によって変わるってことか。

「……さーてと、そろそろ部屋に帰ろうかな。」

ケーキも食い終えたし」

あつ、ちなみに俺は部屋を一人で使っている。

……なんでも空いてる部屋がそこしかなかったんだとき。

「あつ、ちよつと待って」

寮に帰ろうとしたら、後ろから新聞部副部長、黛さんに声をかけられ止まる。

「はいっ？なんですか」

「……帰る前に写真を撮らせてくれない？」

そこにいる神崎 香菜さんと一緒に」

「俺は別に良いですけど」

なんで香菜と……？」

「私も良いよ。写真でしょ？」

「ええ、本当はインタビューのほうが良いけど。断るでしょ？」

「……良くわかりましたね。」

どうしてそう思ったんですか？」

「記者の勘ってやつかな」

ってか、記者でそんなに勘がいいのはアンタぐらいだけだと思う。

「……とにかく写真、撮るよ。」

さあさあ、手を握って並んで」

黛さんが俺の手を持ち、香菜の手を握らせて撮りやすい位置に行く。

……早っ！！動きが読めなかったよ。

「……そういつて置きながら、

何、勝手に握らせてんですか」

「ごめんごめん。でも、さつさと済ますにはこれくらい無理矢理しないと駄目なんだよ」

まあ、言ってることは合ってるけど。

……なんか納得いかないな。

そう思い、顔をしかめていると……。

「……私じゃ駄目なの？」

「へっ？」

香菜の声がしたので、香菜のほうを見ると、軽く涙目で上目遣いをしていた。

「……あっ、えっと。それは、その／＼／／／」

やばっ、可愛すぎる。

「ねえ、どうなの？」

もう、やめてくれー！！

俺の理性が崩壊寸前なんだよ。

「ププツ……何、その反応。」

あゝ、おもしろっ」

願いが通じたのか、香菜は手を話してくれた。

……その代わり、笑いをこらえているけど。

ってか、人をからかうんじゃないねえ。

「じゃ、写真も撮れたと思うから帰るね」

そういつて香菜はさっさと食堂を出ていく。

「……先輩？何時、写真を撮ったんですか」

「ついさっき。黒月君つてばいきなりのことには弱いんだね」

……やばい。あんな写真を流されたら、

こっちの対処が大変なことになる。色んな意味で。

「……返せや。こらあああー！！」

それから写真の奪い合いに発展したのは
言わなくても予想できるだろう。

5話 代表決定、記念パーティー〜2〜（後書き）

いかがでしたでしょうか？

オリジナルもほどよくいれて、
作者的にはばっちりだと思っています。

以上、作者からでした。

6話 試合の約束（前書き）

おはこんばんちわ。

一昨日、友だちとカラオケ行つて
声が枯れてしまった加那^{かな}翔^{しょう}です。

いやあ、高い声とか出しすぎましたね。ははっ。
まあ、それは置いておいて本編へどうぞ

6話 試合の約束

「織斑君、黒月君、おはよー」
おりむら くろつき

「おう、おはよう」

朝、一夏と一緒に教室に入り、
いちか
席につくとさっそく声をかけられた。

「ねえ、転校生の噂聞いた？」

「転校生？今の時期に？」

……おい、お前が言う今の時期に
転校してきたやつがお前の隣にいるんだけど。

「そう、中国の代表候補生なんだってさ」

「ふーん」

まっ、十中八九、鈴……【鳳 鈴音】ファン・リンインだろうな。

……それにしても代表候補生ねえ。

「あら、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら？」
いつの前にか俺の隣にイギリス代表候補生。セシリア・オルコット
が立っていた。

で、相変わらず腰に手を当てるポーズをしてるな。

「このクラスに転入してくる訳でもないのだろう？
なら、騒ぐほどのことでもあるまい」

自分の席に鞆を置きに行った篤が一夏の側にいた。

……やっぱ篤も女子ってことだな。噂は気になるみたいだし。

「どんなやつなんだろうな？」

「お前より弱かったらいいよな」

冗談を笑いながら言う。

…… まっ、絶対ないと思うけど。

「それはないでしょ。一応、代表候補生よ」

…… ですよねー。

いつの間にか話に混ぜてきた香菜に正論を言われる。

でも、戦い方次第ではいけんじゃね？

鈴の【甲龍】には接近戦の武器が…… あったな。

…… 悪い。やっぱりお前に勝ち目はない。

操作技術が高ければいけるかも知れないけど。

一夏がどうしてもって言ったら…… 俺が実践形式で特訓してやるか。

「一応って、どういうことですか!? 香菜さん」

「だって私はその代表候補生に勝ったんだし」

「うっ、それは…… そうですけど」

へえ、香菜ってばセシリアに勝ったんだ。

「…… あれは、わたくしの体調が悪かったから」

「そんなこと言うんだったら私も言うけど、

あのときは私のISに不具合があったのよ。

そのせいで今、調整に出してるし」

ああ、今の会話ですべて把握出来た。

まずクラス代表を決める試合で、一夏が負ける。

その後、セシリアと香菜が戦った時、セシリアが負けたと。

で、そのときの香菜のISは不具合があったわけね。

ここからは補足だけど

俺に冬弥さんからきたISのデータは香菜のだったってわけか。

「なら、今度決着をつけましょうか。

セシリアと私、どっちが強いか」

「いいですよ。今度こそ私が勝ちますから」

……あれ、なんか会話が脱線してるような気がするんだが。

「ふふん、勝てるもんなら勝ってみなさい。

まっ、セシリアの前に戦いたい人がいるけどね」

へえ、香菜の戦いたい相手ね。誰だろう？

「あら、それは誰ですの？」

「……優哉、あなたよ」

そういつて俺を指さす香菜。……はあ、やっぱり俺なのか。

「別に良いけど、一夏じゃなくていいのか？」

「いいわよ。一夏君、弱いもん」

「うぐっ」

香菜の言葉に沈む一夏。……哀れ、一夏。

そして香菜さん少し毒舌すぎやありませんか？

「……まあ、別にいいぜ」

「なら、明日に試合しない。

今日の夕方に調整が終了するから」

「……まっ、俺はいつでもいいぜ。

勝つ自信はかなりあるからさ」

俺に護衛ごゑいを頼むってことは、ある程度は弱いつてことだろ。
って考えると楽勝だな。

「へえ、なら賭けをしない」

「賭け？」

「……負けたほうが勝ったほうの言うことを一つ聞くこと
いいね、そういうの。」

「いいぜ。やってやろうじゃねえか」

「……そう、言ったわね」

「おう、男に二言はねえよ」

その瞬間、香菜が若干黒い笑みをしたことに俺は気づいていなかった。

7話 鳳 鈴音（ファン・リンイン）

「来月にはクラス対抗戦があるけど、
いちか一夏君、大丈夫なの？」

俺との勝負をすることが決まった香菜は、
まだ凹んでいるままの一夏に言う。

「まあ、大丈夫だよな。だって専用機持ちは
1組と4組だけなんだよ？優勝、間違いなしだよ」

「……なら大丈夫なのかな」
クラスの誰かの言葉を聞いて、
少し安心した様子の一夏であった。
……そろそろかな。

「……その情報、古いよ」
突然、教室の入口から声が聞こえる。

「2組も専用機持ちがクラス代表になったの。
そう簡単には優勝できないから」

見てみると、腕を組みドアにもたれていた女の子がいた。
まあ、ぶつちやけ……

「鈴……？お前、鈴か？」

「そうよ。中国代表候補生、ファン・リンイン鳳鈴音。

今日は戦線布告に来たってわけ」

一夏の方を見て、ふつと笑みを見せた鈴。

「何、格好付けてるんだ？すげえ似合わないぞ」

……アホか、お前は。

余計なことを言うなよな、面倒なことになるだろ。

「んなつ……！？ 何てこと言うのよ、アンタは！」
ほら、やっぱり面倒なことに。

……あっ！！

「おい」

「なによ！？」

あらら、やっちゃった。

バシンッ！

鬼教官……もとい織斑先生の鋭い一撃。

……先生にタメ口で言ったんだから、叩かれても仕方ないよな。

「もうSHRの時間だ。教室に戻れ」

「ち、千冬さん……」

「織斑先生と呼べ。さっさと戻れ、そして入り口を塞ぐな。邪魔だ」

「す、すみません……」

うわあ、織斑先生に鈴もタジタジだね。

……確か昔から鈴は織斑先生のことを苦手だったんだっけ。
なぜかは知らないけど。

「また後で来るからね！ 逃げないでよ、一夏！」

そんな捨て台詞みたいな言葉を言って教室に戻る鈴。

「……っていうかあいつ、IS操縦者だったのか……。初めて知った

……」

「一夏、それは……」

ああ、言っちゃった。どうなっても知らねえぜ。

まあ、被害を受けるのは周りの女子だと思っけ……。

「……一夏、今のは誰だ？ 知り合いか？ えらく親しそうだったな？」

「い、一夏さん！？ あの子とはどういう関係で……」

バシンッ、バシンッ、バシンッ、バシンッ！

「席に着け馬鹿ども」

あらら、織斑先生……もとい鬼教官の出席簿を喰らった女子が多数。
…… 本当に可哀想に。

バシンッ

「いてっ！！」

織斑先生、なんで俺まで」

「なんとなくだ」

…… そうですか。

なんとなくで叩くって本当にあなたは鬼教官ですね。
そう思った瞬間、頭にもう一発衝撃がきたのは余談である。

授業中、箒とセシリアが出席簿を喰らっていた。

箒は、鈴と一夏のことを考えていて、

授業を受けるのを途中から放棄してたと。

…… ごめんなさい。

寒かったし、これはネタにはいけないことだったね。
で、セシリアは一夏と鈴のことを…… 以下省略。

8話 転生者

「おいおい、一夏。そんなもんか……？
そんなだつたら鳳ファンに勝てねえぜ」

俺は今、第2アリーナで一夏と試合をしている。
と言ってもかなり一方的な試合ワンサイドゲームだけだね。

「……はあ、はあ。これはお前が強すぎるだけだろ」
「そうか？ 普通だろ。」

つてか、これくらい強くないと誰も守れないぜ」
そう言つた瞬間、一夏の表情が変わつた。

……そっか、こいつは仲間を守るために力が欲しいんだつたな。

「……誰も守れない」

「お前は守りたいんだろ？ みんなを」

「ああ」

「なら、頑張つて強くなんないとな。」

そのためなら俺はお前に全力で協力するぜ」

「……ああ、よろしく」

そう言つといてなんだけど……。

「まっ、今回は疲れたからそろそろ終わるけどな」
「へっ？」

呆然としていた一夏に向かって、
全力全壊のフルパワーでレーザーライフル……黒星くろぼしを撃つ。

「……優哉。あれはないだろ」

ISを待機状態に戻した俺の近くに来て文句を言う一夏。

……でも、仕方ねえじゃん。

「悪い、先客がきたみたいでな」

そういつて俺はアリーナの入口を見る。

……そこにはISスーツを身にまとった香菜がいた。

「ああ、もうそんな時間か。」

ありがとな、修行に手伝ってくれて」

「気にすんな。……お前には強くなってもらわないとな」

……俺イレギュラーがいるから、何が起こるかわからないしな。

原作通りにはいかないと思うし。何かしらがあるはずなんだよ。そんなときのために一夏には強くなってもらっておかないと。

「……さてと、始めますか」

「そうだね。さっそく始めよっか」

（翔るぞ、黒影）

そう心の中で呟き、黒影を起動させる。

そして起動し終わった後、

香菜を見ると既に起動し終わったみたいだった。早いな。

『――戦闘待機状態のISを確認。操縦者 神崎香菜。』

ISネーム【不死鳥^{フェニックス}】。戦闘タイプ中距離射撃型、特殊装備あり』

……といっても俺が手をつけたせいで、

近距離にもある程度、特化してると考えて良いだろうな。

ホント、なんでこんなにチートなISを作っちゃったんだろうな。

調整しただけだけど。

「本当に賭け試合でいいんだな？」

「うん、いいよ。」

まあ、私が負けることはないしね」

勝利宣言されて若干、ムカついてきた。

……ふざけんなよ、何が負けることないだ。絶対に勝ってやる。

「……油断してると」

（こうなったら、一瞬で決めてやる）

イグニッション・ブースト
瞬時加速を何回も使って、香菜の後ろに回り込む。

「怪我すんぜ！！」

そして一閃するが、

「甘い甘い、そんなだったら……」

簡単に避けられる。

……まあ、それを狙ったんだけどな。

「避けられるんだろ？」

「そんなのわかってるよ！！」

「しまった！？」

俺は右側に避けた不死鳥の真後ろに移動し、

そのまま切りかかる。……よし、確実に当たったな。当てた感触があつたし。

俺の攻撃を喰らった不死鳥……香菜はよろめきながら体制を変える。

「……やっぱり一夏より強いね」

そりゃそうだろう。俺は若干、チートの存在だし。心の中でそんなことを思いながらも警戒は解かない。

……一瞬でも気を抜いたら負けだからな。

「でも、私のほうが強いね」

「っ!？」

いきなり真後ろから声が聞こえ、急いで回避するが間に合わなかった。

「うつ……」

やばい、黒影からすると超痛い。

一撃でほとんどのシールドエネルギーがなくなったしよ。

うつそ、不死鳥あいつの攻撃、どんなに重いんだよ。

……次、喰らうとマズイな。

「ねえ、本気でやってよ。」

あなたの力はそんなものじゃないでしょ?」

「当たり前だつての。」

お前がそういうなら手加減無しで行くぞ」

「ええ」

もうアレを使うしかねえよな。

こいつ ワンオフ・アビリティー でんこうせつか
黒影の単一仕様能力。【電光石火】を。

「……行くぞ、黒影」

呟いた瞬間、目の前にモニターが出現し、『電光石火、使用可能』と表示される。

それと同時に俺の体を纏うように金色のエネルギーが出現する。

「へえ、なるほどね。……なんか、白式ひやくしきみたいね」

「……全然、違うぜ。」

まずこいつのワンオフ・アビリティーには、デメリットが無いんだよ。

それに対して【零落れいらく白夜ひやくや】にはデメリットがあるだろ?」

シールドエネルギーを攻撃に使うっていうデメリットが……。

まあ、当たればバリアを無効化して攻撃できるからメリットもあるけどね。

「まつ、そのほかに根本的な違いがあるけどな」

「根本的な違い……?」

色とか性能とか、そんな問題じゃなくてもっと根本的な違いが。

「……黒影は“欠陥機”じゃない」

「っ!?! な、なんでそれを……」

俺の言葉を聞いてから、動揺する香菜。

……本当なら狙うべきだけど、今はそんな気分じゃないしな。
しかもめんどくさくなっただし、もういいや。

「香菜」

「っ、何?」

「もう、終わろうぜ。」

お互い、一人で考えたいことぐらいあるだろ?」

地表から10cmぐらいまで降りてから、ISを解除しプライベートル・チャンネルで言う。

……意外にも香菜が強かったから疲れた。

「……わかった。じゃあ終わろう」

俺がISを解除するのを見てから、香菜もISを解除する。

……そして香菜はアリーナを出ていく。

「あいつは何を考え込んでいたんだ？」

勝負の途中、何故か知らないけど

俺はあいつが何かを考え込んでいたのに気づいた。

だから勝負をやめたわけだけど、なんかスッキリしないな。

「一夏……っ！！もう一回、俺と全力で勝負しろ」

『ああ、いいぜ。』

俺もお前らの勝負を見て、もう一回戦いたくなつたからな
『プライベート・チャンネルで一夏に話しかける。』

……多少のイライラを一夏にぶつけることにしよう。

香菜 side

優哉との試合を終えた後、

私は部屋のシャワーを使って汗を流すことにした。

「……………」

さっき戦った時、浮かび上がった疑問。

……何故、このとき一夏しか知らないはずの事実を優哉は知ってるの？

一夏が教えた？……違う、そんな感じはしなかった。

「……もしかして、優哉は私と同じ転生者？」

ってことは、

「……………まさか、ね」

神様が言った言葉を思い出しながら呟く。

『君のほかの転生者は、君の知ってるひとだから』

9話 クラス対抗戦

リーグマッチ
ークラス対抗戦当日ー

クラス対抗戦の試合場所の第二アリーナに行くと、
もちろん言うまでもないと思うが満席になっていた。

そして会場に入ることが出来なかった生徒や関係者は、
別室や廊下に付けられているリアルタイムモニターで鑑賞するほど
だ。

……いやあ、これは本当にすごいな。

各国の大統領辺りの偉い人達まで来てるんだから。
っていうか、ぶっちゃけここまで注目する気持ちがわからないんだ
が。

「……まあ、俺はここで見るけどな」

会場に入って壁際にもたれる俺。

ここなら何かあったとき、対処できるし。

一夏達がやばかったら俺が倒してもいいしな。“アレ”を。

「それまでは普通に一夏の戦いを見ますか」

一人で呟いていたら、まず【甲龍】^{シエンロン}を展開した鈴がピットからフィールドに出現し、

それから少し遅れて【白式】^{びやくしき}を展開した一夏が出てくる。

『それでは両者、規定の位置まで移動してください』

「……………」

空中で一夏と鈴が5メートルほどの距離を取り向かい合った。

「一夏、今謝るなら少しくらい痛めつけるレベルを下げてあげるわよ」

「雀の涙くらいだろ。そんなのいらねえよ。全力で来い」

ISの機能を展開しているため、

一夏と鈴のオープン・チャンネルでの会話が聞こえている。

……確かに雀の涙くらいだけど、

今のお前からするともらつといたほうが良いと思うけどな。俺なら貰わないけど。

「一応言っておくけど、ISの絶対防御も完璧じゃないのよ。

“シールドエネルギーを突破する攻撃力”があれば、本体にダメージを貫通させられる」

まあ、これは本当の話だね。

噂では、その直接ダメージを与える“ためだけ”の武装も存在するらしい。

……使ったら違反だけだね。

簡単に言つと、つまりは……

『殺さない程度にいたぶることは可能である』

と言つことだ。しかも鈴など代表候補生レベルなら造作ぞうさもないことだ。

『それでは両者、試合を開始してください』

ピーッと鳴り響くブザー、それが切れた瞬間、二人は動き出した。

ガギインッ！！

瞬時に展開した白式唯一の武装『雪片式型』ゆきひらにがたが物理的衝撃波に弾かれる。

まあ、普通に考えて鈴の衝撃砲だろうな。

そして一夏はクロス・グリッド・ターン三次元躍動旋回を使い、鈴を正面に捕らえることに成功する。

「ふうん。初撃を防ぐなんてやるじゃない。けど——」

鈴が手にしている双天牙月という両端に刃の付いた、そうてんそうが

というより刃に持ち手が付いているという表現の方が正しいようなそれを、

鈴はバトンのように回し縦、横、斜めと角度を変えながら一夏に斬り込む。

「——甘いつ——！」

一夏が隙を突いて距離を取ろうとした瞬間、肩アーマーがスライドして開き、

中心の球体が光った瞬間に一夏は吹き飛ばされていた。

「今のはジャブだからね」

にやりと不適な笑みを浮かべた鈴の肩アーマーの球体がまた光る。

そして………

ドンッ！！

「ぐあっ！」

一夏は吹き飛ばされ地面に叩きつけられた。

……さすがだな。あの衝撃砲は。

名前、なんだったっけ？

「よくかわすじゃない。衝撃砲『龍砲』は砲身も砲弾も目に見えないのが特徴なのに」

ああ、龍砲だ。しかしこの龍砲はすごいよな。

砲身も砲弾も見えないってさ、まあ、俺には見えただけ。

……って、普通は見えない砲弾が見えるってどんだけチートなんだよ俺。

「鈴」

「なによ？」

「本気で行くからな」

「な、なによ……そんなこと当たり前じゃない……。とっ、とにかく、格の違いつてのを見せてあげるわよ」

鈴は双天牙月を一回転させて構えなおし、

一夏は加速体制に入った『瞬間加速』イグニッション・ブーストを使っつもりだろうな。

「……そろそろくるか」

『所属不明機の反応がアリーナ上空に出現』

不意に黒影から警告が出る。……来たか。

ズドオオオオンッ！！！！

突然大きな衝撃がアリーナ全体に走った。

その音源からはもくもくと煙が上がっている。

今の衝撃は『所属不明機^{アンノウン}』がアリーナの遮断シールドを貫通して入ってきた衝撃だった。

……その衝撃を受けた瞬間、観客席のシャッターが締まる。

やばっ、飛び降りたりしておけば良かった。これじゃあ一夏達を助けにいけないじゃねえか。

「くそ、遠回りになるけど、一回観客席から出るか」

独り言のように呟いてから、観客席から急いで出る。

俺がこんなに急いでる理由は、一つ。

もしかしたら原作と違う展開があるかもしれないからだ。

……俺がたどり着くまで死ぬなよ、一夏。

9 話 クラス対抗戦（後書き）

一応、次の更新予定日は7月31日を
予定してますので、お楽しみに（ ^ ^ ） /

〰〰オリヒロイン設定〰〰（前書き）

主人公設定の後書きに少しだけ書いていた、
【神崎香菜】ちゃんの設定を
まとめましたのでご覧ください。

ちなみに本編の続きは、
予告してた通り、31日に更新します。

〰〰オリヒロイン設定〰〰

かんざきかな
神崎香菜

性別 女

容姿 黒髪セミロング。七三分けにしてヘアピンで止めている。
体つきは良いとは言えない。良くいってスレンダー。
悪くいうと貧ny……………。

性格 優哉とは正反对で、家事全般がダメダメなズボラ。

補足 神様に送られた転生者。

原作情報は6巻ぐらいまで知ってる設定。

専用ISは【不死鳥】

フェニックス
【不死鳥】

神崎香菜が作った第3世代型IS。

待機状態は

外見は【不死鳥】の名の通り、ほとんど真っ赤に染まっている。
装甲の数は多くもなく少なくもなく標準的。

そして背中に翼みたいなのが、2枚ずつ対になっている。

背中だいたいの翼は少し橙だいだいがかつてる。

特徴

黒月 優哉が手をつけるまでは遠距離特化型だったのだが、手をつけてからは近距離もいけるようになった。つまりは万能型。

使用武器

・紅くれない

血で染まっているのかと疑ってもおかしくないぐらい全てが真っ赤な刀剣。

・緋龍ひりゅう

ロングレンジのビームライフル。

外見は、『GEB』ゴッドイーターバーストのステラスウームを赤くした感じ。

・流星群りゅうせいぐん

実弾式のマシンガン。

色は赤で、黒のラインが入ってる。

ワンオフ・アビリティ 単一使用能力

……後ほど公開。予定では原作3巻辺りかな。

〓オリヒロイン設定〓 (後書き)

はい、ということで香菜さんの設定は以上になります。

「ここはこうしたほうがいいよ？」

「……これ、別の小説であつたよ」

などありましたら言ってください。

無理矢理、設定を変えます。

最後に、記念企画につきましては、
作者の活動報告をご覧ください。

…… 大半の方は理由がわかると思いますけどね。

10話 VSアンノウンPart? (前書き)

今のところ後2話ぐらいはストックしてるんだけど、
連続で投稿したほうがいいのかな？

誰か教えてくださいな (^ ^)

10話 VSアンノウンPart?

香菜side

いつものメンバー（一夏と優哉を除いた）は、ピットで一夏君と鈴ちゃんの試合を見ていた。

そして一夏君が瞬間加速イケンニッシュン・ブーストをしようとした時、

大きな衝撃がアリーナ全体に走る。……来たね。

「何、何がありましたの！」

「い、一夏……」

それにセシリアは混乱し、箒は一夏君の身を心配する。

「今のビーム兵器？しかも遮断シールドを破るほどの威力の」

アリーナに広がる爆炎が収まると、

得体の知れない【全身装甲フル・スキン】のISの姿が確認出来た。

「織斑君！鳳さん！おりむら ファン」

今すぐアリーナから脱出してください！すぐに先生たちがISで制圧に行きます！」

いきなりの襲撃者に、呆然としていた山田先生だったが、直ぐに切り替え、安全に終わらせる作戦をいつもより威厳のある声で言う。

『ーいや、先生達が来るまで俺たちで食い止めます。いいな、鈴』
『だ、誰に言ってるのよ。』

そ、それよりも離しなさいってば！動けないじゃない！！」

『ああ、悪い』

「織斑君！？だ、ダメですよ！！」

生徒さんにもしものことがあつたらー」

山田先生が必死で一夏達を止めようとするが、

「もしもし！？織斑君聞いています！？凰さんも！聞いてますー！？」

一夏達は無視をする。……ってか、山田先生。

プライベート・チャネルなんだから声に出す必要は無いんじゃない。

「本人たちがやると言っているのだから、やらせてみてもいいだろう」

「お、お、織斑先生！なにのんきなことを言ってるんですか！？」

「落ち着け。コーヒーでも飲め。糖分が足りないからイライラするんだ」

……うん、まあいい案だけどね。

「……あの、先生。それ塩ですけど……」

それを飲んだら、糖分じゃなくて塩分が取れると思う。

「……………」

ぴたりとコーヒーに運んでいたスプーンを止め、織斑先生は白い粒子を容器に戻す。

「なぜ塩があるんだ」

「さ、さあ……？ あっ！ やっぱり弟さんのことが心配なんです
ね！？ だからそんなミスを——」

「……………」

イヤな沈黙。山田先生は話を逸らそうと試みた。なんだか無駄な抵

抗な気もするけど。

「あ、あのですね——」

「山田先生、コーヒーをどうぞ」

「へ？ あ、あの、それ塩が入ってるやつじゃ……」

「どうぞ」

「い、いただきます……」

「熱いので一気に飲むといい」

悪魔だ！！

「先生！ わたくしにIS使用許可を！ すぐに出撃できますわ！」

一夏君のピンチにいても経ってもいられなかったのか、セシリアが大声で言う。

「そうしたいところだが、遮断シールドがレベル4に設定。扉がすべてロックされている」

「そ、それって——あのISの仕業ですよ！？」

「そのようだ。しかし、三年の精鋭がシステムクラックに実行中だ。」

遮断シールドを解除できれば、すぐに部隊を突入させる」

『それよりもてつとりばやい作戦があるぜ』

不意に届いた男の声、それと同時にモニターにある少年が映し出される。

「優哉……？」

そう、何故かここにいなかった優哉だった。

「……あなた、今、どこに」

とセシリアが問う。まあ、気になるよね。

いつも一緒にいる人がいなかったら。

『ん？ああ、観客席から全速力でアリーナ外壁に向かっていているところ』

良く見れば後ろの景色がかなり早いスピードで、動いているのかわかる。

「……………で、黒月。良い作戦とはなんだ？」

『良い作戦とは言っていないんだけどな。……………まあ、いいや。』

織斑先生、俺にISの使用許可をください。それで万事OKです』
「なに……………」

いきなり言ってきた言葉は、IS使用許可だった。

『……………実はですね。俺の黒影にはある細工さいくがしてあるんですよ』

「細工だと？」

『ええ、それこそ天災てんさい“篠ノ之束”しののたばねと同等の、ね』

優哉の言葉に驚く一同。

……………なんで優哉は束さんと同等の技術を持っているの？
皆が驚いている間、私はそんなことを思っていた。

————— side out

優哉 side

『それは信じていいのか？』

目的地のアリーナ外壁についたと同時に、千冬さんからそんなことを聞かれる。

「はい、どこぞの天災よりはマトモですよ」
まあ、使うかどうかは知らないけどな。

……ってか俺的には、使いたくはない。

『……わかった。ならIS使用を許可しよう』

「ありがとうございます」

返事をするだけして、直ぐにオープン・チャンネルを切る。

「よし、ならいつちやるか」

――翔るぞ、黒影。

心の中でそう呟くと、

右耳から近いところから黒影が展開される。

「よし、感度良好。さっそくやりますか」

アリーナの真上まで飛び、黒星を呼び出す。

「……今回の俺は全力全壊ぜんりょくぜんかいでいくぜ」

ほとんどすべてのシールドエネルギーを黒星に集中させ、
狙いを遮断シールドの中アンソウンにいる『所属不明機』に定める。

l l s i d e o u t

一夏 s i d e

「くっ……!!」

一撃当たれば確実に決められる間合い。

だけど、俺の斬撃はするりとかわされる。

……これで合計四度目のチャンスを逃したことになる。

「一夏つ、馬鹿！ちゃんと狙いなさいよ！！」

「狙ってるっつーの！！」

（参ったな……）

シールドエネルギー残量が残り60%をきっていた。

バリアー無効化攻撃を出せるのは、よくて後1回だ。

「一夏つ、離脱！」

「お、おうっ！」

敵は攻撃を避けた後、いつも反撃に転じてくる。

だが、その方法が無茶苦茶だ。デタラメに長い腕を振り回して接近してくる。

しかも、その高速回転状態からビーム砲撃まで行われるから手に負えない。

……だけど、なんだろうかこの違和感。何か重要なことを逃してるような気が。

「ああもうつ、めんどくさいわねコイツっ！」

敵の無茶苦茶な動きにムカついてきたのだろう、

鈴は衝撃砲を展開し、砲撃を行う。

……が、しかし敵の腕はその見えない衝撃を叩き落とす。

ともあれ、俺は鈴の支援のおかげで敵の射程距離から抜け出すことに成功した。

「……鈴、あとエネルギーはどれぐらい残ってる？」

「180つてところね」

180か。……俺に比べたらまだマシといえるけど、このままだとジリ貧だな。どうするか……。

『警告、シールド外から高エネルギー反応あり……』

「っ!？」

どうするべきか次の手を考えていたら、いきなり白式が警告をしてくる。

「一夏っ!!!」

「わかつてる!!」

俺たちが敵からできる限り離れる。

……爆風に巻き込まれる可能性が無いともいえないからだ。

ドオオオオーーン!!

という音と同時に、敵を中心として爆発する。

「なに……今の」

「……苦戦してるな、助けが必要か」

いきなりの展開に鈴が驚いた瞬間、聞いたことのある男の声が聞こえた。

（この声は、まさか……）

声が出たほうを見ると、見たことのある漆黒のISがゆっくりと降りてきた。

「一夏、^{ファン}凰」

それは黒影^{くろかげ}を展開させ、黒星^{くろぼし}を構えた状態の優哉だった。

「優哉か!」

「おう。二人とも、無事か?」

「ああ、なんとかな」

そついうと優哉は安心したように、ほっ、っと一息つく。

「凰、お前も無事か？」

「ええ、大丈夫だけど……。あんだ、誰？」

鈴の問いに優哉は……………。

「黒月優哉。『世界で2番目にISを使った男』ってところかな」

I s i d e o u t

10話 VS アンノウン Part ？ (後書き)

次の更新予定日は、8月3日です。

11話 VSアンノウンPart? (前書き)

次の更新予定日は、8月3日です。

後書きに書いてもよかったのですが、
こっちの方が良いかなと思ったので、
今回からこっちに更新予定日を書きます。

11話 VSアンノウンPart?

優哉side

「黒月優哉……?」

「まっ、2番目つつても、一夏より俺のほうが強いがな」

「……悔しいけど、その通りだから言い返せねえ」

俺の言葉に凹みながら言う一夏。

……これから強くなれば大丈夫、だからそんなに気にすんな。そう言ってもよかったが、

これ以上、無駄話は避けたいところだからやめておく。

「一夏、凰、お前ら、エネルギーはどれくらいある?」

敵を警戒しながら2人に聞く。

「……俺は60ぐらい」

「私は180つてとこね」

一夏が60で鈴が180か、原作通りっちゃあ、原作通りだけど、できる限り安全策でいきたいな。

「一夏」

「なんだ」

「……俺が時間を稼ぐ、その間に作戦を考えて俺に伝える。お前が描く作戦通りに動いてやる」

と言いながら、黒星を直し月光を展開する。

「つてことは……」

「そう、お前の作戦によって勝敗が変わるっていうことだ」

「……マジか」

……別に、俺が考えてもいいんだけど、

一夏が考えたほうがいいいな。経験は力なりってな。

「ああ、大マジだ。頼むぞ」

そついつて俺は月光を構えながら、敵ISに突っ込み一閃する。

「っ！！」

が、バカなげえ腕を振り回して反撃してくる。

……それを余裕をもってよける。

「これならいけるかな」

今、いけるかなと言ったのはかなりの接近戦を仕掛けることだ。

……かなり賭けだけど、やってみる価値はあるかな。

時間稼ぎもかなり出来るし、接近戦に持ち込めば一夏達に流れ弾も
いかねえし。

「……一か八か、やってやる！！」

月光を深く強く握り直し、イグニッション・ブースト瞬時加速を使って敵近くまで移動する。

そして……

「おらっ、喰らいやがれ」

深く切りつけるが、何事もなかったかのように
反撃してくるのに驚きながらも回避する。

「……おいおい、反応ぐらいしやがれよ」

『優哉っ！！』

敵ISの反応に呆れていると、一夏からオープン・チャンネルで声
をかけられる。

「どうだ？作戦が決まったか」

言いながらも敵に攻撃するのはやめない。

『ああ、俺らの予想では敵は無人機だ』

……だよな。つてか原作知らなかつてもそう思ってたぜ。

反応が呆れるほどなさすぎるし。

「無人機だつて？……ああ、なるほどね。

だから反応がなさすぎるのか」

『で、俺が考えた作戦の内容は優哉が敵を翻弄する。

その間に鈴が全力、俺のバリアー無効化攻撃で決めるっていう作戦だ』

まあ、妥当な作戦だな。

「了解。なら………」

さつさとやるうぜ。と言おうとしたが、出来なかった。

なぜなら……

『一夏っ！！』

アリーナに設置されているスピーカーから大音量で箒の声が響いたからだ。

俺達はそれぞれISのハイパーセンサーで中継室の方を見た。見ればそこには箒の姿があつた。

……しまった。これを忘れてた！！

（くそっ、間に合えよ！！）

そう思いながら全力で、箒のもとまでイグニッション・ブーストで向かう。

『男なら……男なら、それくらいの敵に勝てなくてなんとする！』
息を切らしながらも、一夏に向けて喝を入れる。

「……………」
それを敵ISは無言で見ながら、あの長い腕を箒に向けて構えていた。

そして腕に着いている砲身にエネルギーを溜め始める。

「マズイ!! 鈴、やれ!!」

「わ、わかったわよ!」

状況がマズイことに一夏は気づき、鈴に命令する。

…… 会話だけ聞きながらも、俺は全力で箒に向かおう。
何が起るかわからないからな。

『ちよつ、ちよつと馬鹿! 何してんのよ!? どきなさいよ!』

『いいから撃て!!』

『ああもうつ! どうなっても知らないわよ!』

命令されるがままに鈴は、一夏目がけて撃っただろうな。

『……おおおつ!!!!』

この瞬間、俺は箒の傍までくることが出来る。

そして衝撃に耐えられる体制を取るが、無駄だろうな。

一夏の必殺の一撃は、敵ISが箒に向けて突き出していた右腕を切断した。

だが、その反撃で左拳をモロに受ける。

それと同時に光が観客席のほうで反射した。

それが気になってハイパーセンサーを使って、観客席を見る。

……俺の目には蒼い機体が写った。

「……なるほどな」

それが誰なのかは聞かずともわかった。

「『……狙いは(どうだ)?』」

『完璧ですわ!!』

蒼い機体からの通信と同時に複数のビームが無人機を撃ち抜く。

そしてボンッ!!という爆発音とともに、無人機の行動が止まる。

まあ、口調と機体からしてわかと思うが、

観客席からセシリアがブルー・ティアーズで狙撃したっていうことだ。

『ギリギリのタイミングでしたわ』

『セシリアならやれると思っていたさ』

『そ、そうです…。とっ当然ですわね！

なにせわたくしはセシリア・オルコット。イギリス代表候補生なのですから！』

『ふう。何にしてもこれで終わ——』

そこで一夏の言葉が途切れる。

……理由は、敵ISが残った左腕を一夏に向けて

エネルギーをチャージし始めたからだ。

『しまった！！』

『一夏っ（さんっ）！！』

「……バーカ、油断すんなっつーの」

ワンオフ・アビリティ
俺は単一使用能力【疾風迅雷】を使って

無人機の真後ろまで向かい、二度と動かなくなるぐらいまで深く一閃する。

「優哉……」

「……大丈夫か、一夏」

一夏の近くまで移動し、話す。

「ああ、だいじょう——」

刹那、白式を解除した一夏が俺のほうへ倒れかける。

……それを俺は黒影を解除してから、受け止める。

「……お疲れさん、一夏」

その会話を最後に、『無人機事件』は終わった。

「ふうう、疲れた」

一夏を保健室に連れていった後、

俺は自分の部屋でコーヒーを飲みながら休んでいる。

ちなみに一夏が倒れた理由は、疲れたそうさ。

……まあ、男が原作と違って増えたとはいえ、たった二人だからな。そつちでも疲れて今日の試合＋無人機事件だからな、そりゃあ疲れるだろう。

ふと、扉のところに気配を感じた。

「……で、お前は何をしにきたんだ」

そう言つと扉から誰かが入ってきた。

……見てみると護衛対象であつた女だつた。

ちなみに頼んできた人は、こいつの父親ね。

「どうしたんだ？ 香菜」

「……あのさ、突然だと思っただけだ。

なんで今日の試合、行動が早かつたの？」

やばっ、やっぱりあの対応の速さは怪しいかつたか。

「……そりゃあ俺はお前の護衛してんだぜ？」

それくらい順応性を高めておかないと……」

「じゃあなんで一夏君のISが“欠陥機”ってことを知ってたの？」

「っー！？」

あつ、そつちやそんなこと言っちゃったな。

……これはさすがに誤魔化せないかな。

「……もしかして優哉って“私と同じ”転生者？」
「はっ？」

私と同じ……ってどういうこと？

「違っかったら、『なにいつてんの、こいつ？』」

って思うかも知れないけど、静かに聞いてね。

私の前の名前は“上条恵理^{かみじょうえり}”っていうのよ」

……嘘^{うそ}だろ。

前世の名前が上条恵理って、どういうことだよ。

「……1つ質問に答えてくれ。

答えてくれたら俺もすべて話してやる」

「わかった」

この答えによって、すべてがわかる。

……こいつが本当に上条恵理なのか、が。

「お前に兄がいたか？」

「……いたよ。」

でも、通り魔に殺されそうになった私を庇って死んだよ」

……マジかよ。ここまで完璧に答えられたら信じるしかねえじゃん。

「……そっか、教えてくれてありがとう。

そして約束は守らないとな。俺の前の名前は“上条優哉”」

「嘘でしょ。だって、兄さんは……」

半泣き状態になりながら、話す恵理。

「……残念、あれこそが神様のミスなんだとさ。

だからここにいるのは、正真正銘、お前の兄の上条優Y……」

最後まで言おうとしたのだが、急に恵理が抱きついてきたので言えなかった。

「うう……ごめん、私。」

「……兄さんが、いないと……生きていけなかった」

「恵理……」

泣きじゃくりながら話す恵理を、抱き止める。

「だから……私、死ぬんだ、って思った瞬間……喜んだんだ」

「バカだろ。お前……『俺が死んでも幸せに暮らせよ』って言ったのよ」

半泣きになりながら怒鳴る。

「ごめん、でもやっと分かちあえたのに」

「……一生、会えないなんて、考えられなかったの」

「でも、ありがとう。……こんなにも俺のことを思ってたくれて」
そういつて深く強く、抱きしめる。

「……今までは護衛対象だったし、幼馴染だから守ろうと思ってたけど、
これからそんなの関係無しで、絶対に守ってやる。」

I I s i d e o u t

香菜 s i d e

もう会えないと思っていた兄さんとの再開で、
10分間ぐらい泣き続けた後、私は兄さんの部屋で話していた。
その会話の途中に思ったことだったのだけど、
この世界では、兄さんと結婚してもいいんだよね。と思っていた。
……だって、この世界では血は繋がってないしね。

そうと決まれば、さっそく行動しないと。

この世界ではISを動かせる男の子ってだけで、絶対にモテるのは
確かなんだから。

「……兄さん」

「どうしたんだ？恵理」

兄さんと呼ぶと、兄さんは前の私の名前を言うてくる。

そう呼ばれると前の兄妹のときみたいで、なんか嫌なんだよね。

「……香菜」

「えっ？」

「香菜って呼んでよ。」

今の私は“香菜”で、今の私達は兄妹じゃないんだから」

「ああ、わかった。だけど、お前も兄さんって言っるのはやめろよ」

人差し指で私を指さしながら言う兄さん……じゃなくて優哉。

「……わかった。じゃ、これからは兄妹じゃなくて、

普通に幼馴染として扱うこと。オッケー？」

「了解」

優哉から心良い返事が貰えたので、さっさと自分の部屋に戻ることにする。

「じゃあね、優哉」

「……ああ、また明日な」
私はそういつてから優哉の部屋から出る。

11話 VSアンノウンPart? (後書き)

加那 翔です。

今回は、ネタバラシ回でしたね。

……神崎香菜が実は優哉の前世の妹だった。

まあ、これは初めから考えていた設定でした。

12話 遠い日の記憶（前書き）

最近、梅茶漬がうまいと感じる加那 翔です。

いやあ、お茶漬美味しいよね。

・次回の更新日は、8月5日です。

12話 遠い日の記憶

現在、6月の頭。曜日は日曜日。俺はある場所に来ていた。

……こつちの世界での俺の家族の墓だ。

何でも両親の知り合いが言うには、外国で事故にあつたらしい。

……それで当時、親戚に預けられていた俺だけが生き残つたと。

そして、その事故から何年か過ぎたころ、俺と親戚の人でその国に行き、

何年も探したが、見つからなかった。

これが一夏達と離れてた7年間の真実だ。

で、帰ってきてすぐに冬弥さんに頼み込んで、お墓を作ってもらつたというわけだ。

まあ、そのかわりに香菜の護衛を頼まれたのだが。

「……ホント、なんで死んだんだよ。」

つてか、俺が引き止めたらこんなことにならなかったのかな」

……関係ないか。どっちにしろ仕事関係もあつたしな。

そう、俺の両親は外国にISを作りに行ったのだ。

なんでもうちの両親はかなりの技術があつたんだとさ。

で、適正がない男の俺だけ連れていかないことにして、

適正があると思われる美夏^{みか}だけ連れていくことにしたと。

「なあ、ドジじゃない神様……」。

教えてくれよ。そんなに俺のことが嫌いか？」

頬を伝つて落ちてくる涙に気づかないで、首を横にふる。

……もう、考えるのはやめよう。

墓の前に美夏が好きだった百合の花を花瓶に入れて供える。

「……それじゃあな、また来るよ」

涙を拭いながら言い、その場を去る。

「ねえ、聞いた？」

「聞いた聞いた！」

「え？何の話？」

「だから、あの織斑君と黒月君の話よ」

「いい話？悪い話？」

「最上級にいい話」

「聞く！」

「まあまあ落ち着きなさい。いい？絶対これは女子にしか教えちゃダメよ？」

女の子だけの話なんだから。実はね、今月の学年別のトーナメントで――」

食堂に着くとスクラムを組んでいる一団を見つけたが、

関わってはいけないと直感で思い、見なかったことにする。

ってか、毎回思うけど、思春期女子で埋めつくされた食堂はうるさいな。

……前世ではこんななかったけどな。

「はい、お待ちどうさま。チョコレートパフェだよ」

「ありがとうございます」

そんなことを思い出しながら、

食堂のおばちゃんから頼んだ品物を受け取る。

「でも、本当にこれだけでいいのかい？」

もう一人の男の子はかなり頼んでたけど」

もう一人の男の子っていうのは、一夏のことだろうな。

「……ええ、いいですよ。」

今日は何故か、食欲がないんで」

「そうかい。でも、健康には気をつけなよ」

おばちゃんの言葉にはい、と返事をして一夏を探す。

さつき、おばちゃんが言ったからにはいると思うんだけど……って、
いた。

…… 鈴と一緒になんだな。

「よっ、一夏に鈴」

「優哉か。まあ、座れよ」

言いながら隣の席を指さす。

あつ、ちなみに鈴って呼んでるのは、勝手に呼んでるわけじゃなく。

あの無人機の事件が終わったあと、鈴本人が、

私のことは鈴って呼んで、って言ったからだ。

「……サンキュー」

軽く返事をしてから座る。

そしてパフェを机に置いたとき、二人の表情が変わる。

「……アンタ、これだけでいいの？」

「んん？……まあな、今日はちよつと食欲がなくてな」
「やつは墓なんて行くんじゃなかったな。」

「……優哉、何かあったのか？」

そんな俺の様子を見て、一夏がそんなことを言ってくる。

……お前は鈍感じゃなかったのか。ってそれは恋愛感情に関してだけか。

「いや、別に大したことはなかったぜ」
と、微笑みながら言う。

「お前だけで解決しない問題だったら、協力してやるから、絶対に相談しろよ。いいな」

「……おう。そうだったら頼らせてもらうな」

俺がそういうと一夏は納得したのか、よし、と言って自分の夕食を食べる。

「……なあ、さっきからあそこの会話の中に俺と優哉の名前が出る気がするんだが」

「ランプでもやってんじやないの？それか占いとかさ」

「それにしてもいつもより騒がしくないか……」

後、いつもより熱気も増している気がするし。

「えゝ！？　そ、それマジで！？」

「マジで！」

「マジなの！？　キャー、どうしよう！」
ってか、本当にそんなに騒がれると、かなり気になるんだけど。

「あーっ！っ！！　織斑君と黒月君だ！」

「えっ、うそっ！？　どこ！？」

俺と一夏と一緒に飯を食っているところを見つけた、女の子達が一斉にこっちに来る。

「ねえねえあの噂ってほん——もがっ！？」

「ばかつ、言っただけから！」

噂？　なんだったかな。

こんな感じの話は忘れてるんだよね。

「噂って？」

一夏が噂について聞き出そうとする。

「う、うん？　なんのことかな……あははははは」

「……あははははは」

皆一緒に笑い出したけど、逆に怪しいぞ。

「もしかして、隠し事かな？」

「あるわけっ——」

「ないよ！？」

俺が探ろうとしたら、女の子達が全力で言ってきた。

……なんかそんなの聞いてたら、いじめたくなってくるじゃんか。

「ふーん、まあいいけど」

そういうと、女の子達は「はははは」と笑いながら、退散していく。
まっ、噂ならいつかは聞くことになるだろう。

「じゃ、俺はこれで。また明日な、鈴、一夏」

それから食器を返して、俺も部屋に戻ることにした。

「え〜っと。それではS H Rを始めます。ショートホームルーム
その前に転校生を紹介します！ しかも二人です！」
翌日の朝、S H Rの時間の時のことだ。
教室に来てすぐに山田先生が言った言葉に、教室ないの全員が驚く。
そして女子達が騒ぎ出す前に扉が開き、転校生と思われる二人が教室に入ってきた。

「失礼します」

「……」

二人のうちの一人。

先に入ってきた人を見た瞬間、全員の動きが止まった。
その理由は……………。

「え？」

「なっ!？」

「そんな!？」

上から順に一夏、箒、セシリアだ。

ちなみに俺と香菜は知っていたため、驚きはしない。

まあ、皆が驚く理由は………

転校生の一人が男子だからだろうな。

12話 遠い日の記憶（後書き）

ついに次回、あのキャラ達が出てきますよ。
まあ、わかると思いますけど。

この小説、ヒロインである、
金髪美少年？と銀髪眼帯美少女が。

13話 転校生は金髪美少年！？（前書き）

やばい、タイトルの付け方がハンパなく雑だ
orz
ってか、これにするぐらいなら普通に

『ボーイ・ミーツ・ボーイ』で良かったかも。

13話 転校生は金髪美少年!?

「フランスから来たシャルル・デュノアです。この国では不慣れが
ことが多くて、

ご迷惑をお掛けするかもしれませんが、皆さんよろしく願いしま
す」

転入生の片方、金髪の美男子、シャルル・デュノアはにこやかに笑
いながら一礼する。

皆、啞然^{あぜん}としている。何時も通りなのは事情を知ってる俺と香菜ぐ
らいだ。

……といっても、ここから俺が知ってるのは原作キャラだけなんだ
よね。

本当に転生^{こんせい}が起こるならもつと原作を買って勉強するべきだったな。

「お、男……?」

クラスの誰かがそう呟いた。

「はい。こちらに僕と似た境遇の人が2人いると聞いて本国から―

ー」

ああ、俺と一夏ね。

というか、やつぱり凄い美形だよな。……じゃなくて美女っていつ
たほつが良いかな?

「きゃ……」

「はい?」

あ、このパターンは……。

「「「「「きゃあああああああああ!」「」「」「」

女子たちの黄色い歓声が教室を覆う。

というか、少しは声を抑えてくれ。……耳を抑えていても耳が痛い。
……あつ、一夏と篤が机に突っ伏した。

「男子！3人目の男子！」

「しかもこのクラス！」

「2人と違って守ってあげなくなる！」

……ああ、やっぱり俺と一夏は守ってあげなくなる男じゃないんだな。

まあ、俺は守りたい派だから別にいいけど。

「あー、騒ぐな。まだ自己紹介は終わっていないだろうが」

心底面倒そうに千冬さんがぼやく。

山田先生ではなく千冬さんからの言葉なので、皆はぴたりと騒ぐのを止める。

そして、もう1人の転入生、女子を見た。

「……………」

左眼に黒の眼帯を付けた、銀髪の美少女は腕を組んだまま黙っている。

さっきまで下らなさそうに女子を見ていた視線は今や千冬さんに向いていた。

「……ボーデヴィツヒ、あいさつをしろ」

それを見てか、千冬さんが言う。

「はっ、教官」

いきなり居住まいを正して千冬さんに敬礼する銀髪の女。
敬礼をされた千冬さんはまた面倒そうな表情のため息を吐く。

「ここで教官は止める。ここでは私は教師、そしてお前は生徒だ」
「了解しました。」

ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

それだけ言って、後はさつきと同じように終始無言だ。

「あ、あの、それだけですか？」

「これ以外に言うべきことなど無い」

ラウラの冷淡な即答に山田先生は涙目。

即刻、教室を抜け出したいくらいいたくない空気の中、不意に一夏とラウラの視線が交差する。

……これは、止めたほうがいいか。

「っ！……貴様が」

「？」

そして一夏の方へ歩いていき、手を振り上げる。

パシッ！！

「……やめといたほうがいいぜ。ラウラ・ボーデヴィツヒ。」

お前の敬愛する、織斑千冬教官に嫌われたくはないだろ？」

一夏を叩こうとした腕を掴み、殺気を出しながらラウラに言う。

そしておまけにISでいつでも攻撃できるように待機させておく。

……これにより、ずっとラウラのISは警告をだしてはらずだ。

「っ！？……チッ」

舌打ちすると勢い良く腕を振り、俺の腕を振りほどく。

その瞬間に戦闘態勢にしていたのを解除する。

そして俺に向けていた視線を一夏に戻して。

「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか」

そういい残して、一夏の前から立ち去るラウラ。

空いている席に座ると腕を組み目を閉じる。

「あー……これでHRを終了する！各人、急いで着替えて第二グラウンドに集合！

今日は2組との合同IS模擬戦闘だ、遅れるなよ！」

この号令により凍り付いてた空気が崩れ、はっ、として皆動き始める。

「黒月、織斑。お前等がデュノアの面倒を見てやれ」

「あ、はい……」

「了解です」

まだ、こいつは切り替えてないのかよ。

そう思い、俺は一夏の頭を叩いてから、シャルルのところに向かう。

「君が黒月君と織斑君？初めまして、僕はー」

「あー、それは後、後。一夏」

「おう」

挨拶をしようとするシャルルを俺が引っ張り、その後に一夏がついてくる。

「教室では女子が着替えることになってるから、

俺たち男はさつさとアリーナの更衣室に向かわないといけないんだ。

これから世話になるんだから、早めになれるよ」

「う、うん……」

と言っが、シャルルは落ち着きが無い。

視線はちらちらと自分の手を握った俺の手を見ている。

…… あっ、そうだった。

見た目が美形だったから忘れかけるけど、こいつは女なんだったな。ああ、でもここで離すと逆に怪しまれるし、このまま行くしかないか。

「ああっ！ 転入生発見！」

「しかも黒月君達と一緒に！」

教室から5分ぐらい歩いた時、女子達が群がっていた場所に来てしまった。

…… マズイ。HRが終わってしまったので、他のクラスの女子が来たのだ。

しかも今回は、シャルルの噂を聞いてるはずだから、かなり多いはずだ。

「一夏っ！！」

「おう」

俺が呼んだと同時に、一夏は女子達のほうに走り出す。

「え！？いきなりな……」

一夏のいきなりの行動に驚くシャルルだが、

俺はそんなの関係ない！！ってな感じで一番近くの窓を開ける。

…… 後は、別にアレをしたらいいと思うんだけど、

シャルルに悲鳴をあげられたら困るな。

「……シャルル。ちよつとごめん」

「えっ、なに……ふぐっ!!」

シャルルに一言、謝ってから口に手をあてる。
後、もう一言、言っておかないと。

「シャルル、出来るだけ目をつむっておけ」

「？」

俺の言ったことに戸惑いを覚えながら、言ったことを実行する。

……これで準備OK。行きますか!!

勢い良く窓際に立ち……

「……I can fry!!」

そういつて窓から、俺はシャルルをお姫様抱っこしながら飛ぶ。
そして地面に当たる瞬間、一瞬だけISを起動させる。

……勿論、足の部分だけだ。

「はい、着地成功」

「……はあ、何をするかぐらいいつてよ。びつくりした」
黒影を解除してから、抱っこしてるシャルルを降ろす。

「ああ、悪い悪い」

「おい、そっちは大丈夫だったか」

そんなことをしていたら、一夏が来た。

「おう、バッチリだぜ。」

……マジで急ごうか。後、20分で授業始まんぞ」
俺がそういうと二人も走り出す。

「つと、俺は織斑一夏。一夏って呼んでくれ」

「で、俺が黒月優哉。優哉でいいぜ」

「よろしく2人とも、僕もシャルルでいいよ」

「まあ、俺はもうそう呼んでただけだな」

走ってる最中に軽く自己紹介をしていた。
そんな感じに自己紹介をしていたから、時間には間にあう予定だったんだけど。

「遅い！」

バシンッ！バシンッ！

……結果はこれだよ。

「くだらんことを考えている暇があったらとつと列に並べ！」

いや、くだらないことは考えてないけど、と心の中で愚痴りながら並ぶ。

「ずいぶんとゆっくりでしたわね」

と俺と一夏に話しかけたのはセシリアだった。

「スーツを着るだけでどうしてこんなに時間が掛かるのかしら？」

そりゃ……男子ですからね。

と言うのでは、わからない人がいるかも知れないので説明します。

ISスーツは、当前だが女性物が普通なので、

見た目はワンピース水着やレオタードに近く、部分的に動きやすいようにと肌が露出している。

だが男が着るISスーツは違う。

具体的に言えばスキューバダイビングの水着みたいで露出しているのは頭、手、足だけ。

そのせいで女子より着替えるのが遅くなるのは必然だ。

……まあ、俺はヘソ辺りも露出してるとな。これは黒影の装甲的

な問題だからです。

「道が混んでいたんだよ」

「嘘おっしゃい。いつも間に合うくせに」

なんかセシリアの一夏に対する言葉に棘があるな…ああ、なるほどね。

「ええ、ええ。一夏さんはさぞかし女性の方と縁が多いようですか
ら？」

そうでないと2月続けて女性からはたかれたりしませんよね」

「なに？アンタまたなんかやったの？」

さらに何故か、一夏の後ろから話しかけたのは鈴まで話に入ってくる。

そして話を続けるが……俺は無視する。

――何故なら

「安心しろ。バカは私の目の前に二人も居る」

今は千冬さんの授業だからな。

バシーン！

青空に出席簿アタックの音がいつもより響く。

ああ、空が青いな。

13話 転校生は金髪美少年！？（後書き）

ところで一つ気になったんですけど、

『シャルル・デュノア』って言いにくくありません？

舌つ足らずの僕が言ってみると、

色んなところで噛んでしまうんですね。

……まあ、それだけですけど。

14話 教師の実力（前書き）

自分で前話を読んでみて思ったことなのですが、
長すぎると読みにくいと思ったので、2話に分割しました。

なので、この話は前話の途中からですので、
見たことのある方は戻ることをオススメします。

14話 教師の実力

「では、本日から格闘および射撃を含む実戦訓練を開始する」

「はい！」

1、2組合同ということもあるが、
担当が千冬さんということもあって、みんないつも以上に気合が入っている。

「くうっ……なにかというとすぐにポンポンと人の頭を……」

「一夏のせい、一夏のせい、一夏のせい……」

ちなみにさつき頭を叩かれた2人は、頭を抑えながら涙目でブツブツ言っている。

……まあ、千冬さんの前で無駄話をしたからだ。

「今日は戦闘を実演してもらおう。

ちょうど活力が溢れんばかりの10代女子も居ることだな。――

凰！オルコット！」

「な、なぜわたくしまで!？」

セシリアからすると残念だな。完全に、とぼっちりだけど。

千冬さんの言うことに逆らったらどうなるか知らねえぞ。

「専用機持ちはすぐに始められるからだ。いいから前に出ろ」

「めんどいなあ、なんで私が」

「こういうのは見世物のようで気に入りませんわね」

ぼやきながら、前に歩いていく2人。

たしか山田先生と戦ったんだよ。ってか、ぼやくぐらいなら俺と代わってくれ。

……試験でも戦ってないから、戦いたいんだよ。

「――」

千冬さんが、やる気のない2人に何か話している。
すると2人は……

「やはりここは、イギリス代表候補生、わたくしの出番ですわね！」
「私の実力を見せるいい機会よね！専用気持ちの」

いきなりやる気になる。……さすがですね千冬さん。
授業のためなら自分の弟も使うと。

「それで、相手はどちらに？わたくしは鈴さんとの勝負でも構いませんが？」

「ふふん。それはこっちのセリフ。あんたを倒して実力を示してやるわ」

「慌てるなバカども。対戦相手は――」

『キイーン……』

あれっ、この音ってなんだったつけ？
えっと、確か……

「あああーっ！ど、どいてくださいー！」

遙か上空から聞こえるある人の声で、思い出す。
あっ、そうだ。……山田先生が落ちてくるんだよな。

……助けるべきだよな。黒影！！

イグニッション・ブースト

一瞬でISを展開し、瞬時加速で近くまで行く。
そしてキャッチする。……つもりだったのだが、

「……なっ、しまった」

うまくキャッチしきれず、ただ少し速度が落ちただけで
そのまま山田先生は落ちていく。……一夏の方に。

あつ、やつちつた。

ドガ——ン!!!

山田先生の突進を受け、一夏は数メートルぐらい吹っ飛ばされた。

「おい、一夏。大丈夫か」

そんな一夏にオープン・チャンネルで話しかける。

「おう、大丈夫だ。白式の展開がギリギリ間に合ったからな。しかし一体何事——う？」

その瞬間、一気に静かになる。

……あつ、やつちやつたな。

俺は地面スレスレの位置まで降りてきて、黒影を戻す。

「あ、あのう、織村くん……ひゃんっ！」

おそろおそろ一夏は手の先に視線をやる。

「そ、その、ですね。困ります……こんな場所で……」

いえ！場所だけじゃなくてですね！私

と織村君は仮にも教師と生徒ですね！……ああでも、

このまま行けば織村先生がお義姉さんってことで、それはそれで魅力的な——」

……おいおい、暴走してないか？

あまりの衝撃的な発言に俺はビックリする。

「——ハッ!？」

やっと状況が理解出来たのか、即座に山田先生から体を離す。

刹那、一夏の目の前をレーザー光が貫いた。

レーザーが飛んできた方向を見ると、

セシリアがブルー・ティアーズを起動させており、一夏めがけてラ
イフルを構えていた。

「ホホホホホ……残念です。外してしましたわ……………」

ドス黒いオーラを見に纏いながら言うセシリア。

……怖いよ！言ってることが。当たらなくて残念ってどういうこと。

「……………」

さらには、鈴が何も言わず 双天牙月 を合わせて、

一夏めがけて何の躊躇い（ためらい）も無く、投げた。

「うおおおっ!？」

それを間一髪で避けるが 双天牙月 の形状はブーメランに似てい
て、

ブーメランと同じく投げたら手元に返ってくる。しかも、生身で今
の体勢じゃ絶対に避けない。

……間違いなく死んだな、ご愁傷様。

「はっ!」

ドンッドンッ!

不意に2発の銃声音が響く。

放たれた弾丸は 双天牙月 の両端を叩き、軌道を大きくずらした。
すぐに銃声音をしたほうを見ると、そこには倒れた体勢のまま上体
だけを起こして、

射撃体勢になっている山田先生がいた。……さすが教師つてことですね。

「……………」
俺と香菜以外の全員が驚いている。

「山田先生はああ見えて元代表候補生だからな。今くらいの射撃は造作もない」

「む、昔のことですよ。それに代表候補生止まりでしたし……………」
雰囲気をもっと同じように戻した山田先生は、
くるんと体を回して起き上がると肩部武装コンテナに銃を預ける。

「さて小娘どもいつまで惚けている。さっさと始めるぞ」

「え？あの、2対1ですか…………？」

「いや、さすがにそれは……………」

「安心しろ。今のお前たちならすぐ負ける」

負ける、と言われたのが気にさわったのか、

2人の瞳には闘志をたえぎらせた。特にセシリアが、だな。

こいつの場合、1回勝ってるからな。……手加減された山田先生に。

「では、はじめ！」

号令と同時にまず2人が飛翔、それを確認し山田先生が後を追う。

「手加減しませんわ！」

「さっきのは本気じゃなかったしね」

「い、行きます！」

いつもと同じ言葉とは裏腹に山田先生の目は鋭く冷静なものに変わる。

まず最初にセシリアと鈴が先制攻撃を仕掛けるが、山田先生はそれを簡単に回避した。

「さて、今の間に……そうだな、ちょうどいい。

デュノア、山田先生が使っているISの解説を試みせる」

「あつ、はい」

空中での戦闘を見ながら、シャルルがしっかりとした声で説明を始める。

「山田先生の使用されているISはデュノア社製『ラファール・リヴァイヴ』です。

第2世代開発最後期の機体ですが、そのスペックは初期第3世代型のも劣らないもので、

安定した性能と高い汎用性、豊富な後付武装が特徴の機体です。

現在配備されている量産型ISの中では最後発でありながら世界第3位のシェアを持ち、

7カ国でライセンス生産、12カ国で制式採用されています。

特筆すべきはその操縦の簡易性で、それによって操縦者を選らばないことと、

多様性役割切り替え（マルチロール・チェンジ）を両立しています。装備によって格闘・射撃・防御といった全タイプに切り替えが可能です、

参加サードパーティーが多いことで知られています」

「ああ、そこまでいい……終わるぞ」

ある程度、説明し終えたところで、千冬さんがシャルルの説明を止

める。

模擬戦では、山田先生がセシリアと鈴を誘導し、ぶつかったところでグレネードを投擲。

爆発が起こって、煙の中から2人が地面に落下する。

「くっ、うっ……まさかこのわたくしが……」

「あ、アンタねえ……何面白いように回避先読まれてんのよ……」
「り、鈴さんこそ！無駄にばかすかと衝撃砲を撃つからいけないのですわ！」

「こっちの台詞よ！なんですぐにビットを出すのよ！しかもエネルギ―切れるの早いし！」

「ぐぐぐぐっ……………！」

「ぎぎぎぎっ……………！」

まっ、この中の悪さは一夏あいつ関係だから仕方ないかな。

「さすが、元代表候補生ってことですか」

「そういうことだ。これで諸君にもIS学園教員の实力は理解できただろう。」

以後は敬意を持って接するように」

手を叩きながら言うので、皆の意識が切り替わる。

「専用機持ちは織斑、黒月、オルコット、デュノア、ボーデヴィツヒ、凰、神崎だな。」

6人グループになって実習を行う。

各グループリーダーは専用機持ちがやれ。いいな？では分かれろ」

14話 教師の実力（後書き）

明日、続きを投稿します。

具体的に時間をいうと、6時です。

15話 グループ実習（前書き）

おはこんばんちわ。

最近、新しい小説を書こうとしてる加那 翔です。

えっ？まともに更新できるようにしてからやれ？

ー無理です。だってこれが俺だもの。

15話 グループ実習

「専用機持ちは織斑、黒月、オルコット、デュノア、ボーデヴィツヒ、凰、神崎だな。」

6人グループになって実習を行う。

各グループリーダーは専用機持ちがやること。いいな？では分かれる」

千冬さんのこの号令で1、2組全員が動くが……………。

「織斑君、一緒にがんばろう！」

「わからないところ教えて」

「デュノア君の操縦技術を見たいなあ」

「ね、ね、私もいいよね？同じグループにいられて！」

「黒月君！ISの操縦を手とり足取り教えて！」

「私はベッドの上でゆっくりと教えて欲しいかな……………／／／／」

一気に一夏、シャルル、俺——まあ、簡単に言えば男に押し寄せてきた。

一夏、シャルルは完全にどうしていいのかわからずただ立ちつくすだけだった。

……………つか、最後のやつ。ごめんなさい。

謝るからこれからそういうことをいうのはやめて。

後ろから、人を殺せそうなぐらいの殺気を浴びてるから。

「この馬鹿者どもめ……出席番号順に1人ずつ各グループに入れ！
順番はさっき言った通り。次にもたつくようなら今日はISを背負
ってグラント百周させるからな！」

千冬さんの一声によって群がっていた女子たちはすぐに整列しなお
した。

……IS背負ってグラント百周すか。かなりキツイってか出来る
人いるの？

「最初からそうしろ馬鹿者どもが……」

ため息を漏らしながら千冬さんは愚痴る。

実習の時間が始まると、俺の班になった女子達が集まってきた。

「ええと、いいですかー皆さん。これから訓練機を一班一体取りに
きてください。」

数は『打鉄』が3機、『リヴァイヴ』が4機。

好きな方を班で決めてくださいね。あ、早い者勝ちですよー」

さっきの模擬戦で自信を取り戻したのか山田先生は堂々としていた。

「さてと、どのISが良い？」

俺がそう聞くと、皆して悩み出す。

「うーん、私は打鉄がいいかな」

「……でも、リヴァイヴも捨てがたいよ」

「いつそのこと、黒月君に任せようよ。私達、どっちでもいいし」

「ナイスアイデア。じゃあ黒月君にすべて任せた」

おいおい、そんなので良いのか？

……まあいいや。早く決まったから。

「山田先生、打鉄をお願いします」

「あつ、黒月君。はい、どうぞ」

「ありがとうございます」

黒影の腕を部分展開して、打鉄を乗せている専用カートを押す。

「さて、とりあえず起動、装着、歩行までするぞ。
順番は出席番号順、だよな。一番最初は……」

「はいはい、出席番号2番、相沢優子！よろしく」

そついつて握手待ちの手を出してきた。

「ああ、抜け駆け！」

「私も、私も！」

「初めて見たときから決めました！」

班の女子全員が横一列になって同じように手を並べた。

「……お願いしますっ！！」「」「」

ふと後ろからそんな声が聞こえ、

見てみると一夏やシャルルの班も俺と同じようになっていた。

「あのなあ、そんなことしてると……」

「……いったああっ！！」「」「」

軽く説教じみたことをしようとしたとき、悲鳴？が聞こえた。

見なくてもわかるけど、鬼教官の仕業だろうな。

「……あんなことになるぞ」

俺が指さしたシャルル班の惨状を見て、俺の班と織斑班女子達は流れるように列を解散する。

「……気を取りなおして始めますか。相沢さんは何回かISに乗ったことある？」

「あ、うん。授業で何回か、だけど」

まあ、それだけできてたら大丈夫だな。

「じゃあ大丈夫だな。とりあえず装着して起動しよう」

「オッケー、わかった」

そして装着、起動、歩行が問題なく進んでいった。

——のだが、ここで問題発生する。

訓練機を立ったまま装着解除をしてしまったのだ。

専用機持ちだったらこんなことにならないので、

忘れてしまっていたのだがこれでは立ったままの状態になり、装着することが出来ない。

「どうしました？」

おお、ついさっき自信を取り戻した山田先生の登場だ。

「実はこうなってしまったんですよ」

訓練機を見上げながら言う。

「あー、コックピットが高い位置で固定されてしまった状態ですね。

それじゃあ仕方がないので黒月君が乗せてあげてください」

「はいっ!？」

「ええ〜っ、超ラッキー!!」

上から俺、二番目の女子の順番だ。

……ってか、これって俺がしないといけないのかよ。

「はあ、仕方ねえな。じゃあしっかり掴まってるよ」

「うわぁっ!?!」

てっとり早くこんな恥ずかしいイベントは終わらしたかったので、
かなり強引に右腕で女子の胴体、左腕で頭を支える。……簡単にい
うとお姫様抱っこです。

「……………// // // //」

そして打鉄のコックピット近くまでむかう。

……なんか顔が赤い気がするけど、気のせいかな。

うん、後ろからもの凄い殺気があるけど気のせいだ。そう信じたい。

「……………こっから届くか?」

限界ギリギリまでコックピットに近づいて言う。

「だいっじょうぶ。いける」

「ホントに大丈夫か? 気をつけるよ」

黒影の腕に立っていかうとするが、それは無理だろうと思う。

「うん、って……………うわぁっ!?!」

「おっと」

ほら、言ったそばから落ちそうになりやがって。

「ごめん、足が「ああ、別に謝らなくていいから。さっさと渡れ」……うん、わかった」

俺に返事だけすると、せっせと打鉄のコックピットに移る。

……もう大丈夫そうかな。

「よっと」

空中で黒影を収納し、地面に着地する。

うん、空中で収納してカッコ良く着地するってのもいいな。

そして装着、起動、歩行とテンポ良く言ったのだが……

「じゃあ、ISから降りてくれ」

「……はいはい」

またしても立って降りてしまったのだ。

「あつ、お前な……」

「あはは、ごめんなさい（他の女子達の視線が……）」

一つ言わせてもらつと、女子全員をコックピットまで運ぶことになった。

……もう、こん実習はしたくない。

「では午前の実習はここまでだ。

午後は今日使った訓練機の整備を行うので、各人格納庫で班別に集合すること。

専用機持ちは訓練機と自機の両方を見るように。では解散！」

「あー……あんなに重いとは……」

疲れた顔を愚痴ってくる。

訓練機は専用のカートを使って運ぶ。が、カートを動かすには人力

しかないので、

俺や一夏の班は無論、男メインで運んでいた。

まあ、シャルルの班は例外な。

あいつがやる前に「デュノア君にそんなことさせられない！」

と言って数人の運動部女子が訓練機を持っていたから。

ちなみに俺はISを起動して………って。

「つーか、ISを使うっていう発想はなかったのな」

「……あ。た、たしかにそうだな………」

「はあ、少しはここを使えよ」

頭を指先でつつきながら言う。

「あ、ああ。……優哉、シャルル着替えに行こうぜ。」

俺たちはまたアリーナの更衣室まで行かないといけねえし」

無理やり話を変えて、俺とシャルルに振るとシャルルは少し困った顔をしていた。

「え、ええっと……僕はちょっと機体の微調整をしてからいくから、先に行つて着替えてよ。時間かかるかもしれないから、待つてなくていいからね」

ああ、そういうことね。

「そうなのか？なら調整が終わるまで待つてるけど……って、痛い痛いっ！！」

シャルルが渋る理由がわかってしまったので、

どうしても待つという一夏の首付近を掴む。

「了解。一夏、シャルルがこう言ってるんだから、俺らは先に行くぞ」

それから俺はずっと一夏を更衣室まで引きずっていった。

「げほっ、げほげほっ……優哉、テメエ、俺を殺す気か!？」

「あの状況だと、お前が人の着替えを覗くために待とうとしていた、
としか思えなかったんだよ。それとも何か? そんな噂を俺に流して
欲しかったか？」

……確実に変態のレッテルが貼られるけども。

「うっ……それはいやだな」

「だろ。……ってか、さっさと着替えな。時間がなくなるぜ」

「あっ! そうだった。ヤベエ、急がないと!」

一夏は慌てて着替えている。

まあ、急いでる理由は箒と昼食の約束をしてるからだ。

「それで優哉。お前も一緒に来るか? 屋上で食べるんだけど」

「俺は良い。シャルルと食堂で昼食を食べた後に学園を案内しようと思っていたからな」

ちなみにこの話は適當だ。……後で話にいかねえとな。

「そうか、分かった。それじゃ俺は先に行くから。それじゃ」

それだけ言つて、さつさと更衣室を出て行つた。

「このままいても意味がないし、俺も出ていきますか」

――これでうまく行くはずだったんだけどさ。

昼休み、俺達は屋上にいた。

「……ホント、なんです」

15話 グループ実習（後書き）

書き方を変えてみたのですが、
こっちのほうが見やすいですかね？

出来れば書き方の感想をくださると嬉しく思います。
あつ、後…誤字脱字の報告も受け付けていますので、
ドシドシ送ってください。

16話 屋上で昼食

「……ホント、なんでさ」

「んんっ？優哉。どうしたの」

急に呟いた俺に向かって言う香菜。

こうなった理由を言うと、まずシャルルを探す、で、見つける。

そして要件を話そうとした時、何故か来た一夏。

……で、昼食と一緒に食べることになったと。

こういうことなんだけど、納得できない。

なんで一夏はシャルルを誘うんだよ！！学園を案内するって言っただろ。

「いや、別になんでもないけど」

内心、かなり怒りながらも顔には出さないでおく。

「……どういうことだ？」

それは俺が聞きたい、って箒か。

「天气が良いから屋上で食べるって話だっただろ？」

「そうではなくてだな……！」

うん、確かにそうではないな。

箒からすると、一夏と2人、屋上で食べたかったんだから。

「せっかくの昼飯だし、大勢で食ったほうがうまいだろ？」

それにシャルルは転校してきたばかりで右も左もわからないだろうし」

「そ、それはそうだが……」

口ではそういつてるが、納得できてはいないらしい。

……手を強く握り締めてる。

その篝の手にはお弁当が握られていた。

IS学園はお弁当を持参したい生徒のために、

早朝にキッチンが使えるようになっていた。まあ、そのキッチンがかなり凄いんだよね。

今日も弁当を作ってきたけど。……つか、俺もおかしかったよな。弁当作ってきてるのに、食堂行くなって。

「はい一夏。アンタの分」

と、言いながらタッパーを開ける鈴。

「おお、酢豚だ！」

「今朝作ったのよ。アンタ前に食べたいって言ってたでしょ」

見てみると、かなり旨そうだった。普通に店で売ってるような見た目の良さだった。

……だけど、ご飯も用意するとかあったら良かったんじゃないかな？

「コホンコホン。——一夏さん、

私も今朝はたまたま偶然何かの因果が早く目が覚めまして、

こういうのも用意してみましたの。よければお一つどうぞ?」

鈴の隣でバスケットを開けるセシリア。

そこにはサンドイッチがきれいに並んでいた。

見た目は旨そうだな。……味はやバイと思うけど。

「お、おう。後でもらうよ」

そういつて一夏は逃げやがった。

まあ、アレはかなり酷そうだな。

——味的な意味で。逃げるのは仕方のないことだよな。

「ええと、本当に僕が同席してもよかったのかな?」

一夏の隣にいるシャルルがそんなことを言う。

でもそんなことを言ったら、俺と香菜も良かったのか？

「いやいや、同じ男子同士仲良くしようぜ。」

色々不便もあるだろうが、まあ協力していこう。

わからないことがあつたらなんでも聞いてくれーIS以外で。

IS関係なら優哉に聞いてくれ」

ISは無理なのかよ！！と言おうと思つたが、言つのをやめた。

一夏は入学がいきなりだったしな。ー仕方ないか。

というか、IS関係は俺に任せるのかよ。

「アンタはもうちょっと勉強しなさいよ」

「してるって。多すぎるんだよ。覚えることが。」

お前らは入学前から勉強してるから予習してるからわかるだけだろ」

「いや、俺は一切、勉強してないけどわかるぞ」

まあ、これは神様の加護だと思っけどな。
チート

「それは優哉が天才なだけだと思うよ」

いやあ、別にそんなの褒めても何も出ませんよ。香菜さん。

「ありがとう。二人とも優しいね」

ドキッ。

いきなり無防備な笑顔と一緒に言われたので、つい照れてしまった。

ーそうだ、今のシャルル（こいつ）は男だ。

照れてしまったたらダメだ。そっち系だと思われる。

「い、いや、まあ、これからルームメイトになるだろうし………ついでだよ、ついで」

「一夏さん、部屋割りがもう決まったのかしら？」

「いや、普通に考えたら俺の部屋だろ。男だし。優哉の部屋は一人部屋だしな」

「なんでも部屋が少し狭いらしいぜ」

一人部屋なら広いほうだけど、相部屋だとせまく感じるからね。

「そっか。まあ、普通に考えてそうよね」

こんな話をしながらも昼食は進む。

一夏と鈴は酢豚、シャルルは購買のパン、

セシリアも自分の分は購買で買ってきてたようで、

サンドイッチは一夏が全部食べることになりそうだな。

そして俺と香菜は俺が作った弁当を食べていた。

「……………」

「どうした？腹でも痛いのか？」

鈴から貰った酢豚を食べ終えた一夏は、

隣で箸を動かしていないどころか、

弁当の包みすら開けていない筈を心配して言う。

……のは良いけど、女子に腹が痛いのか？

って聞くのはどうかと思うんだけど、それは俺だけか？

「違う……」

「そうか。ところで第、

そろそろ俺の分の弁当をくれるとありがたいんだがー」

「……………」

無言で弁当を差し出され、返事に困る一夏。

「じゃあ、さっそく……おお!!」

弁当の中身は鮭の塩焼きに鶏の唐揚げ、こんにゃくとゴボウの唐辛子炒め、

ほうれん草のゴマ和えというバランスの取れた献立だった。

「これはすごいな!どれも手が込んでそうだ」

「ついでだついで。あくまで私が自分で食べるために時間をかけただけだ」

そんなこと言っても、

照れ隠しだと俺にはわかるけどね。唐変木の一夏と違って。

「そつだとしても嬉しいぜ。ありがとつ、箒」

「ふ、ふん……」

そのくせきちんとフラグだけは建てれるんだからな、羨ましいよな。

「でも、この弁当量が多くねえか？」

「……それはだな。一応、優哉の分もあつたのだが……」

「へっ？俺の分？」

驚いたな。一夏の分しか作ってないかと思つたよ。

「ああ、でもいらないみたいだな」

「いや、貰つよ。

せつかく箒が作ってくれたんだ。全部、食べるさ」

「そ、そうか……。なら良かった」

微笑みながら箒に向かってそういうと、箒は少し照れたような感じ
で言った。

「箒、なんでそつちに唐揚げがないんだ？」

「！こ、これは、だな。ええと……」

「……うまくできたのがそれだけなのだから仕方ないだろう」

「え？」

なるほど。失敗したやつを一夏に見せたくないっていう乙女心ね。だから、一夏と俺の弁当のところしか無いと。

「わ、私はダイエット中なのだ！ だから、一品減らしたのだ。文句があるか？」

「文句はないが……別に太ってないだろ」

ああ、言っちゃった。

「あー、男って何でダイエット＝太っているのが構図なのかしらね」

「まったくですわ。デリカシーに欠けますわ」

一夏の言葉に鈴とセシリアの猛攻撃が始まった。のはいいんだけど。

「ちょっと待て。俺は別にダイエット〃太っているとは思ってないんだが」

少なくとも俺はダイエット〃太っているとは思わないんだけど。

「コホン。昼食に戻ろう。いつまでも談笑していられるほど昼休みは長くない」

もうこれ関係の話をされたくないのかわからないが、話を終わらせようとする筈。

「それは同感だな」

「じゃあまあ、いただきます……おお、うまい！」

唐揚げを食べた一夏が声をあげる。

「マジで！なら、俺もいただきます」

そういつて俺も口に唐揚げを頬張る。……うん、これはかなりうまいな。

「うまい！これはかなり手間がかかってるな」

「これって結構仕込みに時間かかってないか？

ええと、混ぜてるのはシヨウガと醤油と……んぐんぐ。

なんだろうな。絶対食べたことのある味なんだけど」

……これは多分。

「ニンニクか？」

あまり自信はなかったから独り言のように呟く。

「おう、そうだ。良くわかったな。」

おろしニンニクを、コショウを少しだけ混ぜてある。隠し味には大根おろしが適量だな」

「へえ！ それはいいな。今度やってみよう」

まあ、一夏はもともと一人暮らしだったからな。

料理は環境ができるようにしてくれたんだろうな。……俺も似たようなものだけど。

そのため美味しい物のレシピは覚えていく必要があるしな。

「いやでも、本当にうまいな。箸、食べなくていいのか？」

「……失敗した分は全部自分で食べたからな……」

「ん？」

「あ、ああ、いや、大丈夫だ。まあ、その、なんだ……。おいしかったのなら、いい」

「本当にうまいから箸も食べてみろよ。ほら」

そう言つて一夏は唐揚げを一口サイズに切つて、箸で持ち上げる。

そして空いたほうの手で唐揚げが落ちないように添えながら。

「な、なに？」

「ほら。食ってみろつて」

「い、いや、その、だな……」

これが一級フラグ建築士の実力だよな。意識せずにこんなことが出来るなんて。

「ほら。箸、食べてみろつて」

「い、いや、その……だな。ううむ……ごほんごほん」

「あ、これつてもしかして日本ではカップルがするっていう

『はい、あーん』っていうやつなのかな？仲睦まじいね」

そんな金髪貴公子の言葉で一変、虎仙人と戦乙女のように変容する
鈴とセシリア。

「だ、誰がつ！　なんでこいつらが仲いいのよ！？」

「そつ、そうですわ！　やり直しを要求します！」

シャルルに食ってかかる二人。だが、貴公子さんはずっと笑顔だった。

「それならこうしよう。みんな、一つずつおかずを交換しようよ。

食べさせあいっこならいいでしょう？」

「ん？　まあ、俺はいいぞ」

「ま、まあ、一夏がいいって言うんならね。付き合っただけでもいいけど」

「わたくしは本来ならば

そのようなテーブルマナーを損ねるような行為は良しとはいたしません、

今日は平日でここは日本、『郷に入っては郷に従え』ですわね」

ホント、なんでES学園には素直じゃないやつばかりいるんだろ
うな。

二人の言葉を聞きながら思う俺。

「じゃ、早速もーらいつ！」

鈴がそう言つて、一夏の箸から唐揚げを奪う。

「あ、こらー！」

「もぐもぐ……。う！ な、なかなかやるわね。なかなか」

「ふつ。和の伝統を重んじればこそだ」

「あー……。わりい箸。今ので唐揚げ、俺が口つけたのしかなかったわ」

「そ、そうなのか？」

「ああ。いくらなんでも男が口をつけた食べ物っていやだろ？」

つて、でもそうすると他出せるおかずないんだよな。唐揚げ以外は

「一緒だし」

「べ、別に、口がついていてもいいぞ。私は気にしない」

「うん？ そうなのか。じゃ、はい、あーん」

「あ、あーん」

よく『はい、あーん』なんて普通に言えるよな。

俺だったら絶対、言えないわ。

「い、いいものだな……」

「だろ？ うまいよな。この唐揚げ」

「唐揚げではないが……うむ。いいものだ」

箸が頬を赤くしてうつむく。

一夏、お前は本当に……。

「一夏！ はい、酢豚食べなさいよ酢豚！」

「一夏さん！ サンドイッチもどつぞ！ 一つと言わずどつぞ全部！」

「「さあ！」「」

「ま、待て。待ってくれ。」

まず酢豚はもう自分の分食べたし、

サンドイッチは食べ合わせの関係で最後にいただき——」

「「……………」」

「い、いただきます……………」

そんな光景を見ながらシャルルは購買で買ったパン。

俺と香菜は俺が作った弁当を食べていたのだが……。

「優哉」

「ん？なんだ」

「はい、あーん」

俺を呼ぶ声が聞こえたので、

見てみると香菜が卵焼きを俺の口付近まで持ってきていた。

……えっと、これは俺に食えと？

「……早く食べてよ」

「あ、あーん／＼／／」

恥ずかしがりながらも俺は口を開ける。

そして次の瞬間、口の中に卵焼きを入れられる。

……ああ、恥ずかしい。

「おいしい？」

「……ああ、そうだな」

俺が作った卵焼きだしな。美味しさに決まってる。

「仲いいんだね、みんな」

そんな光景を見ていたシャルルがそんなことを言う。

「まあ、そうだな。一夏に関しては、尻に敷かれてるだけだけどな」

「そうかな？ 僕には仲よさそうに見えるけど」

「まあ、一夏が女子に対して優しいのは事実だな。あれだからモテるんだよ」

本当に羨ましいよな。かなりモテるところがさ。

「……君も女子に対して優しいと思うけどな」

「ん？ 何か言ったか？」

「いや、なんでもないよ」

……なんか言ったと思うんだけどな、気のせいかな。

「一夏つてもしかして実習で毎回スーツ脱いでんの？」

俺とシャルルが話していた短い時間の間に何があった？

なんでISスーツの話になってんの。……ああ、午後の実習か。

「え？ 脱がないとダメだろ？」

「女子は半分くらいの子が着たままよ？ だって面倒じゃん」

「ていうことは」

そう言つて一夏が三人をじっと見る。

……お前は変態か。一夏。

「じよ、女子の体をジロジロ見ないでよ！」

「紳士的ではないですわよ！」

「女の体を凝視するとは、不埒だぞ！」

「……………」

「どうしたの、一夏？」

女子三人に散々言われ、一夏が俺たちの方を見る。

わかんと思うが、最後に一夏を心配したのはシャルルだぞ。

俺はこいつの心配なんかしないからな。

「男同士っていいなと改めて思ってたな」

「そ、そう？ よくわからないけど、一夏がいいなら良かったよ」

「……アホか、お前ら」

いきなり爆弾発言をする一夏と、

訳がわかっていないのに返事をするシャルルに呆れる。

「……男同士がいろいろって何よ……」

「……不健全ですわ……」

「……灯台下暗しに気づかぬ愚か者め……」

女子三人に小さな声が言われる一夏だが、それに気づかないのが一夏だ。

ちなみに最後まで一夏達は白い目で見られた。

……俺も巻き添えを喰らったがな！！

17話 隠し事

あれから午後の実習を普通に終え、自室でゆっくりしていたのだが、急に一夏が部屋に来て、いきなり一夏達の部屋に連れてこられたのだ。

なので、髪の毛を纏めることもできなかった。

「で、俺はなんで連れてこられたんだ？」

「いや、いろいろとあつて男子三人だけでゆっくり集まれてなかったろ？」

「まあ、そりゃそうだけどさ」

ふと気になり、シャルルのほうを見てみるが、苦笑いが返ってきた。

「で？髪の毛を纏める時間もくれないで、いきなり連れてきた理由はなに？」

「……いや、まあ、じっくり自己紹介とかしてないから、今から改めてしようかなと思ったんだだけどさ」

……それはいいアイデアだけどさ。

もう少し時間をくれても良かったんじゃないの？

「うん、僕はいいよ」

「まあ、別にいいけどさ」

「じゃあ俺から……俺は織斑一夏、一夏って呼んでくれ。改めてよろしくな」

「うん、よろしく。一夏」

そういつて握手をする一夏とシャルル。

「俺は黒月優哉、優哉でいいから。よろしく」

「優哉、よろしくね」

「ああ、よろしくな」

そういつてシャルルと握手する。が、やっぱり手が柔らかすぎる。男装するなら、こういうところにも気をつかうべきじゃねえの？

「じゃあ、最後は僕だね。…シャルル・デュノアです、シャルルって呼んでね」

「おう、よろしくな。シャルル」

「シャルル、よろしく」

「よろしく」

改めて俺と一夏は、シャルルと握手をする。

……どうしようかな。今、仕掛けるか。

まあ、それから色々、話して決まったことがある。

まず明日から一夏の特訓にシャルルが参加してくれる。

そして次に、俺とシャルルが明日、試合をすること。

いやあ、久しぶりに試合だな。本当に楽しみだ。

「……そういえば、優哉って髪の毛を降ろしたら女みたいだな」
「うるさい。だから髪の毛を纏める時間が欲しかったんじゃねえかよ」

試合の約束とかしたあと、何故か知らないが俺の髪型の話になった。

「でも、なんでそんなに伸ばすんだ？邪魔じゃないのか」

「……邪魔だけどさ、切れないんだよ」

髪の毛の一部を指で弄りながら言う俺。

「なんでだ？」

「……今は亡くなった妹がさ、好きだったんだよ。俺のこの真っ黒の髪の毛がさ」

俺がそういうと、二人の表情が曇る。

「……ああ、悪い」

「ごめん、僕達が聞いていい話じゃなかったね」

「なんでお前らが謝ってるんだよ。もう過ぎたことだ。気にしてないよ。」

でも、妹が好きだったこの髪だけは伸ばしたいんだ」

つと、こんな暗い話はこの辺で終わって、そろそろ本題にいきますか。

「そつえば、一夏。」

俺の今の髪型、女みたいだって言ったよな」

「……ああ、言ったな」

「お前に連れ去られた時、クラスの女子が

『織斑君が知らない女の子を連れ込もうとしてる。

織斑先生に言わないと』とか言ってたけど」

そついうと一夏の顔色がドンドン悪くなっていく。

「悪い、急用ができた！！」

かなり慌てながら走り出す一夏。……よし、作戦成功。

「あはは、やっぱり大変みたいだね一夏は」

「そうか？……俺は一夏よりお前のほうが大変だと思うんだけどな」

「それって、どういう意味？」

「いや、ただ男の振りはキツイんじゃないかな？っと思っただけさ」

「あ、あはは。何言ってるのかな優哉。僕は歴とした男の子だよ？」
なるほどね。恍けることにしたか。

「……どこがだ。まず女子達が追ってきた時、

自分が男の振りをしてることを忘れてたし、

その次に、俺達が着替えたときも動揺してた。

自分が男なら動揺することもないのに」

「……っ！？」

言い切ったと同時にシャルルは目を見開く。

まあ、一夏は騙せてたしな、びっくりはしただろうな。

「とまあ、俺はお前が女だってわかったけど。何もするつもりはねえぜ」

「へっ？」

「だって、お前が男装したのにも理由があるかもしれないだろ？
だから何も言わないよ。クラスに広める気もない。勿論、一夏に言ったりもしない」

俺がそういうと、シャルルは安心したのかホッつと息を吐く。

「最後に一つ……俺は、どんなことがあってもお前の味方だぜ。

ああ、それを言ったら一夏もだな。それをお忘れなく」

それだけ言っただけ、俺は部屋を出る。

さあゝて、これでどうなるかな。

シャルルが相談してくれたらいいんだけどな。……一夏が俺に。

俺的には、一夏にしてほしいけどな。

「ええとね、一夏がオルコットさんや

鳳さんに勝てないのは射撃武器の特性を把握してないからだよ」

それは同感だな。一夏はそんなの考えないで敵に突っ込んでるからな。

「そ、そうなのか？一応、理解してるつもりではいるんだが」

土曜の午後、俺達は第四アリーナで訓練をしていた。

土曜の午後は完全に自由時間になるため、他の生徒の姿もチラホラ、と言っよりも三人の男子目当てでかなりの人数が見られる。

ちなみに俺とシャルルの試合はすでに終わっている。俺の勝ちでね。

……そのとき、プライベート・チャンネルで色々と話した結果、

今晚、何故俺がシャルルの正体がわかったのか、話し合いをするこ
とになった。

「うーん、知識として知ってるだけって感じかな。

さつき僕と戦ったときもほとんど間合いを詰められなかったよね？」

「うつ……、確かに。^{イグニッション・ブースト}瞬時加速も読まれてたしな……」

「一夏のISは近接格闘オンリーだから。」

より深く射撃武器の特性を把握しないと対戦じゃ勝てないよ。

特に一夏の瞬時加速は直線的だから反応できなくても、軌道予測で攻撃できちゃうからね」

「直線的か……うーん」

「あ、でも瞬時加速中はあんまり無理に軌道を変えたりしない方がいいよ。」

空気抵抗とか圧力とかの関係で機体に負荷がかかると、最悪の場合骨折したりするからね」

「……なるほど。ーでもさ、優哉は途中で軌道を変えてなかったっけ？」

「うーん、あれだけは僕にもわからないんだよね。」

優哉、アレはどうやってやったの？」

それで俺に振りますか、シャルルさん。

まあ、あんな芸当できるのは確かに俺ぐらいだろうけどさ。

「そうだな……、一言で説明すると黒影の能力だ」

「優哉のISの？」

「ああ、あいつはスピードに特化してるだろ？」

そんなあいつだからこそ出来る芸当なんだよ」

だから間違っても他の人がやると骨折とかするな。

「そっか……。サンキュー、二人の教え方は分かり易いな。他の皆はちよつと……」

「安心しろよ一夏。俺もあんな説明では理解できないわ」

箒の場合。

『こつずばーっ、とやってからがきんっ、どかんっ、と言った感じだ』

鈴の場合。

『何となく分かるでしょ？ 感覚よ感覚……何で分かんないのよ、バカ！！』

セシリアの場合。

『防御の時は右半身を斜め上前方へ五度傾けて、回避の時は後方へ二十度反転ですわ』

うん、これはわからないよな。

箒は擬音しかないし、鈴は鈴で感覚とか言われてもわからないし。

セシリアは超絶実践主義のためある意味三人よりも分かり易い、

ある意味三人よりも難しい、と二拍子揃って尚更質が悪い。

「それは一夏が私の説明をちゃんと聞いていないのが悪いんだ！」

いや、それは関係無い。あれはちゃんと聞いててもわからない。

「そうよ！こっちは丁寧の説明してやってんのにその馬鹿は！」

お前の台詞のどこに丁寧さがあるんだよ！？丁寧差で言ったらセシリアのほうがあるわ。

「私の理路整然とした説明のどこがいけないと言っんですか！」

だからといって、あんな難しい説明をされて一夏がわかると思うか！！俺はわかったけどな。

「お前等、それ本気で言ってんのか？」

額に青筋を浮かべながら言う俺。

あんなんでわかったら逆にすげえよ。俺でもわかんないんだから。

「まあまあ、落ち着いて。」

……それじゃあ一夏の特訓はシャルル君と優哉に任せて、私達は向こうで特訓しようか」

香菜の提案に乗ったセシリア達はアリーナの端っこ辺りで特訓にいった。

「一夏の白式イコライザって後付武装がないんだよね？」

「ああ。何回か調べてもらったんだけど、
バズスロット拡張領域が空いてないらしい。だから量子変換は無理だって言われた」

今まで勉強していたからか、一夏はスラスラ答える。

まあ、拡張領域が空いてないのは白式だけでなく、黒影もだけどな

「たぶんだけど、それって単一仕様能力ワンオフ・アビリティーの方に容量を使っているからだよ」

「ワンオフ・アビリティーっていうと……えーと、なんだっけ？」
一夏が首をかしげる。まあ、馴染みのない単語かもしれないな。

「単一仕様能力。漢字の通り、唯一仕様の特特殊才能だよ。」

各ISが操縦者と最高状態の相性になったときに自然発生する能力のことだ。

普通は第二形態から発現するんだよ。

まあ、それでも発現しない機体の方が圧倒的に多いから、

それ以外の特殊能力を複数の人間が使えるようにしたのが第三世代型IS。

セシリアのビット——《ブルー・ティアーズ》や鈴の《龍咆》がそ

うだな」

「なるほど。それで、白式の唯一仕様ってやっぱり『零落白夜』なのか？」

零落白夜……自身のシールドエネルギーを

犠牲にして敵のエネルギー性質の物なら全て消せる技。

これが唯一仕様じゃなかったら、かなりチートだよな。……デメリツトもあるが。

「白式は第一形態なのにアビリティー

があるっていうだけでもすごい異常事態だよ。前例がまったくいからね。

しかも、その能力って織斑先生の

——初代『ブリュンヒルデ』が使っていたISと同じだよな？」

「まあ、姉弟だからとか、そんなもんじゃないのか？」

「ううん。姉弟だからってだけじゃ理由にならないと思う。

さっきも言っただけど、ISと操縦者の相性が重要だから、

いくら再現しようとしても意図的にできるものじゃないんだよ」

そうだな。……意図的に出来るものじゃねえよな。

……作った本人なら出来るかも知れないけどな。それも超天才なら。

「そっか。でもまあ、

今は考えても仕方ないだろうし、そのことは置いておこうぜ」

「あ、うん。それもそうだね。

じゃあ、次は射撃武器の練習をしてみようか。はい、これ
そう言つてシャルルは一夏に銃を手渡す、
さっきの模擬戦で使つていた五五口径アサルトライフル《ヴェント
》だ。

「え？ 他のやつアンロックの装備つて使えないんじゃないのか？」

「普通はね。でも所有者が使用許諾すれば、

登録してある人全員が使えるんだよ。

今、一夏と白式に使用許諾を発行したから、試しに使つてみて」

「お、おう」

シャルルから銃を受け取り、撃つ姿勢を作る一夏。

しかし、射撃武器を使つたことがない一夏の様子はぎこちない。

「か、構えはこうでいいのか？」

「脇を締めて。それと左腕はこっち。わかる？」

超初心者の一夏のサポートにシャルルが入る。

「火薬銃だから瞬間的に大きな反動が来るけど、

ほとんどはISが自動で相殺するから心配しなくてもいいよ。セン
サー・リンクは出来てる？」

「銃器を使うときのやつだよな？ さっきから探してるんだけど見当
たらない」

「うーん、格闘専用の機体でも普通は入っているんだけど……」

「欠陥機らしいからな。これ」

「百パーセント格闘オンリーなんだね。」

じゃあ、しょうがないから目測でやるしかないね」

「大丈夫か、一夏？」

「大丈夫だ。問題ない」

（リアルに心配したのにネタで返してくるな）

射撃練習用のターゲットに狙いを定めて引き金を引く。

小さな爆発音が響いた直後、ターゲットの端に弾丸が命中する。

「うおっ！？」

「どう？」

「お、おう。なんか、アレだな。とりあえず『速い』という感想だ」

「そう。速いんだよ。一夏の瞬時加速も早いけど、弾丸はその面積が小さい分より速い。」

だから、軌道予測さえあっていれば簡単に命中させられるし、

外れても牽制になる。一夏は特攻するときに集中しているけど、

それでも心のどこかではブレーキがかかるんだよ」

「だから、簡単に間合いが開くし、続けて攻撃されるのか……」

「うん」

「だから、セシリアや鈴と戦うと一方的な展開になることがあるのもそのせいだな」

……俺はそんなことないけどな。

「そういうことか。あの三人の説明はわかりづらすぎてな」

それはあの三人の説明が独特すぎるだけだから気にするな。

「ねえ、ちょっとアレ……」

「ウソっ、ドイツの第三世代型だ」

「まだ本国でのトライアル段階だって聞いてたけど……」

急にアリーナ内がざわめき始める。ードイツの第三世代型ISつて言ったら。

目線を向けると、そこには漆黒のISをまとう転校生

——ラウラ・ボーデヴィツヒがいた。

「『シュヴァルツェア・レーゲン』……」

俺のISと色だけはおんなじだけど、入ってる武器とかは完璧に違うんだよな。

「おい」

「……なんだよ」

ボーデヴィツヒの呼びかけに一夏が応える。

それと同時にいつでも黒影を展開できるようにしておく。

「貴様も専用機持ちだそうだな。ならば話は早い。私と戦え」

「イヤだ。理由がねえよ」

「貴様にはなくても私にはある」

「また今度な」

「ふん。ならば——戦わざるを得ないようにしてやる！」

シュヴァルツェア・レーゲンを戦闘状態にシフト。

左肩に装備された大型の実弾砲が火を噴いた。

「……………」

その銃弾を俺は無言で切り裂く。ちなみにISは起動済みだ。ついさっき撃たれる直前に起動させた。

「……なんなんですかあ？」

いきなりぶっぱなしてくるなんて、ドイツの候補生はバカなんですかねえ」

「ふん、そんな挑発に乗ると思うのか……」

……別に挑発のつもりじゃなかったんだけどな。

まあ、お前が確実に乗ってくる挑発ならあるけどな。

「で、なんでお前は一夏と戦いたいんだよ？……いや、理由は一つしかないな」

よかったよ。

前に香菜と会ったときにラウラが一夏に殺意を持っている理由を聞いておいてて。

「……ラウラ・ボーデヴィツヒ、一つお前に良いことを教えといてやる。

千冬さんがモンド・グロツソ2連覇できなかった理由に、

一夏よりも俺のほうが深く関わってたんだ」

「……」

刹那、シュヴァルツエア・レーゲン両腕の手刀で切りかかってくる。難なく、俺は月光でそれを受け止める。

「貴様が、教官の……」

『その生徒、何をしている！！学年とクラス、出席番号を言え！』

「……ふん、今日は引こう」

担当の先生が来たからか、ラウラはそういつていなくなった。

で、ラウラが言おうとした続きは、大会二連覇という偉業を邪魔したのか。だろうな。

まあ、ぶっちゃけアレは嘘なんだけどね。

18話 アクシデント（前書き）

累計PV100000を超えました。加那 翔です。
これも皆様のおかげです。
本当にありがとうございます。

そしてこれを使うのも何回目かわかりませんが、
「これからよろしく願います」

18話 アクシデント

「それにしても風呂に入りてえな」

「俺は別にそんなに思わないんだが……、一夏って風呂が好きだったっけ」

「まあな。なんか風呂に浸かっていると一日の疲れが全てとれた気がするだろ」

実習を終えた後、俺達は更衣室で着替えを済まし、雑談をしていた。

「ーってか一夏、お前はどこぞのお爺ちゃんか！ーそうツツコミたくなるような言葉だった。」

のだが、ほとんど女子の中でいたらそういう言葉も出てくるな。口には出してないけど俺もかなり疲れてるし。

「あのー、織斑君とデュノア君はいますかー？」

「ー山田先生の声だな。なんか用事でもあったんだろうか。」

「はい？えーと、織斑は居ます」

「入っても大丈夫ですかー？まだ着替え中だったりますかー？」
念入りに言う山田先生。

これは俺達が男だから聞くだけで、女子の場合は確認したりしないのかな？

まあ、それはさておき、俺ら男子になんのようかな。ってか、一夏とシャルルにか。

「大丈夫です、終わってますよ」

「そうですかー。それじゃあ失礼しますねー」

バシユツという音と同時に扉が開き、山田先生が入ってくる。

「あつ、黒月君も一緒だったんですね……」

「ええっと、俺がいたらマズイ話ですか？」

「いえ、そうではなくてですね。」

男子全員に言っておかないといけないことがあつてですね。

黒月君もいるなら、ちょうどいいなと思ひまして」

ああ、そういうことか。一括で話せるからちょうどいいなと思ったと。

「でも、デユノア君は一緒じゃないんですか？織斑君達と実習中だつて聞きましたけど」

「まだアリーナに居ますよ。」

もうピットまで来てると思いますが、用があるなら呼んできますけど？」

「ああ、いえ、伝えておいてもらえれば十分です。」

ええとですね、今月下旬から大浴場が使えるようになります。

結局時間帯別にするという問題が起きそうなので、男子は週二日の使用日を設けることになりました」

「本当ですか！」

一夏がそれに大声で反応する。

そういうばさつきも風呂に入りたいって言つてたしな。

仕方ないっちゃあ仕方ないけど、うるさい。

「嬉しいです。助かります。ありがとうございます、山田先生！」

「い、いえ、仕事ですから……」

と、山田先生も困りながら言っていた。

何故なら、一夏が山田先生の手を強く握りながら言っていたからだ。まあ、嬉しいのはわかるけど。ーやりすぎだと思う。

篤達にバレるとお前、へたしたら死ぬぞ。

「……………優哉、一夏？何してるの？」

あつ、シャルルが戻ってきたみたいだな。

……………って、俺は何もしてないのになんで俺も言われないといけないんだ。

「二人とも、先に戻っててって言ったよね」

「悪い、山田先生から連絡事項があったから聞いてたんだ」

「喜ベシャルル。今月下旬から大浴場が使えるらしいぞ！」

と、現在テンションがおかしなことになってる一夏の言葉。

「そう」

シャルルはその一夏を横目で見ながら、タオルで頭を拭き始める……………

……………なんかいつもと違うな。

「ああ、そういえば織斑君と黒月君の二人には別件で用事があるので、職員室まで来ていただいていいですか？」

俺に用事……………？なんだろうか。

「わかりました。ーじゃあシャルル、なんか長くなりそうだから今日は先にシャワーを使っててくれよ」

「うん。わかった」

「それじゃあ山田先生、行きましようか」

「……………。はあっ……………」

ドアを閉め、寮の自室に自分一人になったところでシャルルははき出すようにため息を漏らした。

それまで我慢していたせいだろうか、無意識に出たそれは思ったより深く、シャルル自身も驚くぐらいだ。

（何をイライラしているんだか…………）

さっきの更衣室での自分の態度が今になって恥ずかしい。

きつと優哉や一夏も面食らっていたに違うと考えると、ますます落ち込んでくる。

（…………。シャワーでもして気分を変えよう）

シャルルはクローゼットから自分の着替えを一式取り出して、シャルームに入っていく。

「ありがとうございます」

……予想通りだったけど呼ばれた理由が黒影に関することとはね。まあ仕方ないか。自分で作ったんだし。

「優哉ーっ！ー！」

お礼を言って職員室から出ようとしたとき、一夏に呼び止められる。

「なんだ？一夏」

「悪いけど、自分の部屋に戻る前にシャルルにボディークリームを渡してくれないか？」

「それぐらい別にいいけど……………」

「そうか、なら頼んだ」

それだけ言っと、一夏は職員室の中に戻っていく。

……ってか、それぐらいシャルルが勝手に取るだろう。

ああ、でも一夏しか場所しらないってこともあるよな。

「仕方ない、渡しに行くか」

このとき、自分で言ってたことなのに、俺は完璧に忘れていた。

シャルルが実は女だってことを……。

「シャルル。一夏に頼まれてボディークリームを持ってきたんだけど…… っていないな」

一夏とシャルルの部屋に来たのだが、誰もいなかった。

「どこにいったんだろうか……？」

そう思っていたのもつかの間、シャワールームから響く水音が聞こえる。

「ああ、シャワー中なのか……」

まあ、別に中まで入らなくても近くに置いておけばいいよな。

そう思い、洗面所に入る。

ガチャ。

ーガチャ？

今さっき、ドアを開けて入ってきたんだからその音が聞こえるのはおかしいよな。

一夏が帰ってきたにしても、早すぎるしな。ああ、確かシャワールーム

ームにもドアはあるよな。

で、現在、シャワールームに入ってるのはシャルルだよな。

「えっ、優哉!?!」

「へっ……?!」

それなのにシャワールームから出てきたのは金髪碧眼の女子だった。

あれ、今、シャワールームに入ってるのってシャルルだったんじゃない。

ーって、シャルルが女だったじゃん!!

なんでそんな大切なことを忘れてしまってたんだよ!!

「あ、え、えーと………」

「きゃあっ!?!」

ガチャ!

ハッ和我に返ったシャルルが慌ててシャワールームに逃げ込む。

その大きな音で俺も我に返る。

「……ごめん、シャルル」

「………」

ドアの向こうから返事はないけれど、聞こえてると信じて謝る。

「俺、お前のこと女だって知ってたのに………」

ホント、なんで俺ってばこんなことしてたんだよ。

もっとちゃっちゃとボディーソープだけ置いて戻れば良かったじゃないか。

「……ボディーソープ、ここに置いてくな」

「う、うん………」

その場にボディーソープのボトルを置き、俺は脱衣所を出る。

18話 アクシデント（後書き）

作者の一言

累計PV100000突破企画、やったほうが良いのかな……。

19話 真相

シャルルがシャワールームから出てきたとき、

一夏も同時に帰ってきてしまったので、今までのあらすじを話した。

「……ってことは、簡単に言ったらシャルルが実は女だったってことだよな？」

「まあ、ザックリ言ったらそういうことだな」

「でも、なんで男のフリなんかしてたんだ？」

「それは、その……実家のほうからそうしろと言われて、
実家のほうからっていうと、デュノア社か。」

「うん?? 実家っていうと、デュノア社のー」

「そう。僕の父がその社長。その人から直接の命令なんだよ」

…… やっぱりなんか事情があるな。

シャルルの表情が実家の話をしだしてから曇ってるし。

「命令って……親だろう?なんでそんなー」

「僕はね、愛人の子なんだよ」

――これはかなり暗い話だよな。いいのかな、俺達が聞いてても。

「引き取られたのが二年前。ちょうどお母さんが亡くなったときに

ね、父の部下がやってきたの。

それで色々と検査をする過程でIS適応が高いことがわかって、非公式ではあったけれどデュノア社のテストパイロットをやることになってね」

シャルルは、おそらく言いたくないだろう話をそれでも健気に喋ってくれた。

その思いに答えるためにも、俺達は黙って聞くぐらいしか出来なかった。

「父にあったのは二回くらい。会話は数回くらいかな。

普段は別邸で生活をしているんだけど、一度だけ本邸に呼ばれてね。あのときはひどかったなあ。

本妻の人に殴られたよ。『泥棒猫の娘が！』ってね。参るよね。母さんもちょっとくらい教えてくれてたら、あんなに戸惑わなかったのにな」

あはは、と愛想笑いを繋げるシャルルだったが、その声は乾いていてちっとも笑ってはいなかった。

でも、俺達には愛想笑いもできなかった。何故なら、かなりムカついているからだ。

ーシャルルのお母さんにじゃなくて、デュノア社にだけど。

ふと一夏を見ると、シャルルにはバレないように手を強く握り締めていた。

「それから少し経って、デュノア社は経営危機に陥ったの」

「え？　だってデュノア社って量産機ISのシェアが世界三位だろ？」

「そうだけど、結局リヴァイヴは第二世代型なんだよ。ISの開発っていうのはものすごくお金がかかるんだ。ほとんどの企業は国からの支援があってやっと成り立っているところばかりだよ。」

それで、フランスは欧州連合の統合防衛計画『イグニッション・プラン』から除名されているからね。

第三世代型の開発は急務なの。国防のためもあるけど、資本力で負ける国が最初のアドバンテージを取れないと悲惨なことになるんだよ」

イグニッション・プラン……確か、

現在、第三次イグニッション・プランの次期主戦力機の選定中で、トライアルに参加しているのはイギリスのティアーズ型、ドイツのレーゲン型、

イタリアのテンペスタ？型。全てが第三世代型ISだ。

なので、第二世代までしか開発できていないデュノア社はトライアルに参加すらできない。

「……で、補足だけど実用化では今はイギリスがリードしてるんだっただけかな。」

でも、まだ難しい問題だからセシリアがIS学園に送られたと。

……ってことは、ラウラもコレ関係かな。

「話を戻すね。それでデュノア社でも第三世代型を開発していたんだけど、」

元々遅れに遅れての第二世代型最後発だからね。

圧倒的にデータも時間も不足していて、なかなか形にならなかったんだよ。

それで、政府からの通達で予算を大幅にカットされたの。

そして、次のトライアルで選ばれなかった場合は援助を全面カット、その上でIS開発許可も剥奪するって流れになったの」

「なんとなく話はわかったが、それがどうして男装に繋がるんだ？」
「簡単だよ。注目を浴びるための広告塔。それに——」

シャルルは俺達から視線を逸らす。

……やっぱり、そういう目的もあるんだな。デュノア社には。

「男なら俺達、日本で生まれた特異ケースと接触しやすい。

で、可能であれば、俺の黒影と一夏の白式のデータを取ることかな？」

シャルルの言葉を遮って俺の考えを言う。

「それは、つまり——」

「そう、優哉が言った通り、

黒影と白式のデータを盗んでこいって言われてるんだよ。僕は、あの人にね」

——ああ、もう限界かも。なんか、ぶちギレしそうだ。

というか、いっそのこと束さんに頼んで、デュノア社、潰してもらおうかな？

いや、潰すときは俺が潰すか……。

「とまあ、だいたいそんなところかな。でも二人にバレちゃったし、きっと僕は本国に呼び戻されるだろうね。」

デュノア社は、まあ……潰れるか他企業の傘下に入るか、

どのみち今までのようにはいかないだろうけど、僕にはどうでもいいことかな」

「……」

「ああ、なんだか話したら楽になったよ。聞いてくれてありがとう。それと、今までウソをついていてゴメン」

「ーなんで、こいつが謝らないといけないんだよ！！悪いのは全てデュノア社じゃねえか。」

深々と頭を下げるシャルルを、俺が動く前に一夏が肩を掴んで顔を上げさせた。

「いいのか、それで」

「え……？」

「それでいいのか？いいはずないだろ。親が何だつていうんだ。どうして親だからってだけで子供の自由を奪う権利がある。おかしいだろう、そんなものは！」

「い、一夏……？」

「……今回も、になるけど一夏の言う通りだとおもっぜ」

「ゆ、優哉……？」

シャルルが困惑してるけど、俺も話に入る。もう我慢なんてできるか！！

「親がいなけりゃ子供は生まれない。そりゃそうだろうね。」

だからってな、親が子供に何をしても許されるなんて、そんな馬鹿

なことがあるか！

生き方を選ぶ権利は誰にでもあるはずだ。親なんか邪魔をされる理由なんて無いだろ！！」

いつもと違って俺とは、印象がかなり違うであろう大声で言う。

ーああ、そっか。

なんで急に俺がキレたのか、ようやくわかった気がする。

前世で道具のように使われるのも、

俺なりの生き方を邪魔されたのも、一足先に俺が経験したからだな。

「ど、どうしたの？一夏、優哉、なんか変だよ？」

「あ、ああ……悪い。つい熱くなってしまっ」

「まあ、俺も熱くなりすぎたな……」

「いいけど……本当にどうしたの？」

「俺は――俺と千冬姉は両親に捨てられたから」

「あ……」

おそらく資料が何かで知っていたであろう一夏の『両親不在』の意味を理解したらしく、

シャルルは申し訳なさそうに顔を伏せる。

「その……ゴメン」

「気にしないでいい。俺の家族は千冬姉だけだから、

別に親になんて今さら会いたいとも思わない。それより、シャルル

「はこれからどうするんだよ？」

「どうって……時間の問題じゃないかな。」

フランス政府もことの真相を知ったら黙っていないだろうし、僕は代表候補生をおろされて、よくて牢屋とかじゃないかな」

「それでいいのか？」

「良いも悪いもないよ。僕には選ぶ権利がないから、仕方がないよ」

「……だったら、ここにいろよ」

「え？」

俺がそういうと、シャルルはびっくりしたような声をだした。

「なあ、一夏？」

「ああ、そうだな。特記事項第二一、
本学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。

本人の同意がない場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとする」

話を振ると一夏はスラスラとテキストの文章を言っていく。

おお、さすが勉強してた甲斐があったな。

「——つまり、この学園にいれば、少なくとも三年間は大丈夫だろう？」

それだけ時間があれば、なんとかなる方法だって見つけられる。別に急ぐ必要だってないだろ」

いざとなったら俺が直接、デュノア社を潰してもいいしな。

「一夏」

「ん？ なんだ？」

「よく覚えられたね。特記事項って五十五個もあるのに」

「……勤勉なんだよ、俺は」

「そうだね。ふふっ」

一夏のギヤグ？で笑うシャルル。

その表情には屈託が無くて、他のクラスメイトたちと同じ、十五歳の女子そのものだった。

「まあ、とにかく決めるのはシャルルなんだから考えてみてくれ」

「うん。そうするよ」

これならもうシャルルの心配はしなくていいかな。

シャルルもこれから一夏を頼ることにするだろう。

19話 真相（後書き）

活動報告のほうに書いたのですが、

PV10万突破記念のほうはもうしばらくお待ちください。

ちなみにこの話のメイン人物は、シャルロットです。

シャルロットの方々、お楽しみに〜〜♪

……自分の文章能力だと、

楽しめないかも知れませんがね。

PV100000突破記念（前書き）

予告していた通り、
ヒロインはシャルでお送りします。

時間軸がかなり狂っていますので、
見るときはご注意くださいよう。お願い申し上げます。
そしてキャラ崩壊もしてるかもしれませんが……、

それでも良いんですか？

見て後悔はしないですね？

では、さようなら。

PV100000突破記念

「……はあああああ!!」

「よつと、あつぶねえな。シャルロット」

「だから、シャルって呼んでっついてるでしょ」

とある日の朝、俺は第3アリーナでシャルと試合をしていた。

「悪い、悪い。俺って、かなり記憶力がないからさ(ニコッ)」

満面の笑みをシャルにしながら言う。

「……っ!?!?!その笑顔は反則だよ、優哉」

「ーん、シャルはなんて言っただんだ？」

「まあ、いいや。そろそろ終わろうぜ。かなり時間もたったしさ」

「そうだね。……でも、もうちょつとだけお願い」

「……ああ、わかったよ。だけど、無理だけはするなよ。」

無理したっていいことなんてないんだから」

俺はISを解除しようとしたけど、シャルの熱意に負けて解除するのはやめた。

「うん、わかったよ。」

「……じゃあ行くよ。優哉」

「来い!!」

シャルが近接ブレード ブレッド・スライサー を呼び出したので、
それにあわせて俺も近接ブレード 月光 を呼び出す。

「……はっ、やっ」

「くっ……どうした？こんなんじや俺は倒せねえぞ」

シャルが振ってきた近接ブレードを受け止めながら言う。

……うん、やっぱり接近格闘はまだまだだな。シャルは。

「なら、これはどう!!」

今まで使っていた近接ブレードから、ショットガンとマシンガンを呼び出す。

「ちょ!!この距離でそれは……」

やばすぎるだろ!!、と言いながらも難なく、銃弾を避ける。

「……あつぶねえ。」

ホント、お前の高速切替は^{フレット・スイッチ}シャレになんねえな」

一瞬でも気を抜いたら、即墮とされるな。

「……そうかな？」

僕としては、あの距離で銃弾を避けることの出来る優哉のほうが凄
いと思うけど」

「いや、俺は凄くねえさ。こいつの性能が凄いだけだ」

手に持っている月光を見ながら呟く俺。

「……ううん、違うよ。優哉」

「えっ？」

「黒影のスペックが高いのはわかってるけど、
その力を最大限に引き出せる優哉が凄いんじゃないのかな」

「シャル……」

そういつてもらえとありがたいな。

そんなことを思いながら、月光を強く握りしめる。

「……それじゃ、そろそろ終わろっぜ
見物客も増えてきちゃってるし」

「あ、あはは……」

俺の言葉にシャルが周りを見ると、軽く苦笑いをしていた。
まあ、それもそうだろうな。

かなりの生徒が見物に来てるしな、しかも一夏達も一緒に見てるし。

空中でISを解除し、カッコ良く着地してみる。

『『『きゃあああー！！黒月君、カッコイイ！！』』』

「ーふう。シャル、訓練終わったし、

そろそろ着替えに行こうぜ……って、シャルさん？なんでそんな怖い顔をしてるんでしょうか？」

ふとシャルの顔を見ると、『私、かなり不機嫌ですよ』って言うような顔だった。

……あつ、でもシャルは私なんて言わないよな。言ったら可愛いと思うのに。

「……別に、何でもないけど」

「あつ、そう。なら着替えに行こうぜ」

それだけ言つて、俺はシャルの腕を引っ張る。

「あ、ちよつと……、優哉／＼」

腕を引っ張つてアリーナを出ようとすると、シャルが顔を真っ赤にそめていた。

あれ、怒らしちゃったかな？

でも、そりゃあ怒るよね。いきなり腕を引っ張られたら。

「ああ、わるっ……」

シャルに謝ろうとしたとき、目の前をレーザー光2本が通る。

「えっ？」

レーザー光の発射地点を見てみると、なぜか笑顔な香菜さんがいた。

でも、なぜかその笑顔が俺には一番、怖かった。

「あはは、香菜サン？」

なんでISを起動してライフルをこちらに向けてるんでしょうか？」

「……優哉、ちよつとO・H A・N A・S H Iしうか？」

お話じゃなくてO・H A・N A・S H Iなんですか……。

そんなことを思いながら、俺はISを起動させる。

そして……、

「全力で逃げる!!」

「待ちなさい、優哉——っ!!」

遙か上空に逃げると、修羅の如く殺気を放ちながら香菜が追いかけてきた。

……冬弥さんが面白がって追加したミサイルポット計10個を展開しながら。

「ちよつと!？それは無理……」

俺はそういつて訴えようとするが、時既に遅し。

香菜はミサイルを発射させていた。

——あつ、これ終わったな。

ミサイルを喰らって墮ちるかも知れないのに、俺はそんなことを思っていた。

「ーああ、死ぬかと思った」

香菜の特訓……もとい拷問を請け負えた後、

俺はまるでゾンビのようにヨロヨロしながら更衣室まで戻ってきており、

現在は、着替えを済まし椅子の上に寝転がっていた。

「ってか、アレはリアルに死んだと思ったな」

「……あはは、あれは本当にびっくりするよね」

独り言のように呟いていたと思っていたが、いつの間にか隣にシャルがいた。

「おお、シャルか。さっきぶりだな」

友達が隣にいるのだから、みつともない姿を見せ続けるのはやめておいたほうがいいと思ったので、俺は上体を起こし普通に座る。

「うん、そうだね。あ、はい……これ」

シャルの手には、スポーツドリンクとタオルが握られていて、差し出されている。

という点から、俺のために用意してもらったと思っていいだろう。

「サンキュー、助かったよ。」

喉が乾きすぎて死にそうだったぜ」

俺はそうやってスポーツドリンクを飲む。

……うん、うまい。

やっぱり運動後のスポーツドリンクは格別だな。

「あのさ、ちょっとお願いがあるんだけど」

「お願い？」

シャルのお願い……？なんか珍しいな。

でも、本当に珍しいからこそ、叶えてやりたいよな。

「うん、実はさ……」

PV100000突破記念（後書き）

続きはWebで……！！

というのは、冗談でまだ続きが来ていません。

なので、続きは出来しだい更新したいと思います。

皆様のご感想が多ければ多いほど早くなるかも……
WWW

20話 親の遺産

「そ、それは本当ですよ!？」

「う、ウソついてないでしょうね!？」

月曜の朝。いつもの時間に教室に向かっていた

俺達は廊下にまで聞こえる声に目をしばたさせた。

「なんだ？」

「さあ？」

「さっぱり、わかんねえ」

隣にいるのは一夏と一夏のルームメイトのシャルル（男装Ver）だ。

「本当だつてば!この噂、学園中で持ちきりなのよ？」

月末の学年別トーナメントで優勝したら織斑君か黒月君と――」

「……なあ、俺達がどうしたんだ？」

「「「きゃああああ!？」」」

ただ単に声をかけただけなのに、この反応は酷くねえ？

――いきなり声をかけたのも間違ってるけどさ。

「で、なんの話だったんだ？俺と優哉の名前が出てたみたいけど」

「う、うん？そうだったけ？」

「さ、さあ、どうだったかしら？」

鈴とセシリアはあはは、うふふと笑いながら話を逸らすとする。

なんか、見た感じ何か隠してます雰囲気マックスなんだけど……
まあ、いいや。

本人達が隠したいんだったら知らない振りをしておこう。

「じ、じゃあ私はクラスに戻るから」

「わ、わたくしも自分の席につきませんと」

そんな言葉を言いながら行動に移す二人。

それに乗っかって周りの女の子達も自分のクラスや席に戻っていく。

「……なんなんだ？」

「「さあ……？」」

一夏の質問に俺とシャルルはそう答えるしかなかった。

「……………」

放課後、俺は屋上で冬弥さんからきた手紙を見ていた。

冬弥さんからの手紙の内容はVTシステムのことだった。

VTシステム……Valkyrie Trase System、
ヴァルキリー・トレース・システム

このシステムだけど、かなりやばいシステムだという説明が書かれ

ていた。

そしてこのシステムに生前、ウチの両親が関係していたらしい。

（……ウチの親がVTシステムをねえ）

そのVTシステムが危ないシステムだとするなら。――俺のやることは一つだな。

（そのシステムを見つけたら、全て壊してやる！！）

そう決心した直後――

ドカーンッ！！

「っ！？」

突然、爆発音が聞こえた。

（……場所はどこからだ）

そう思い、探してみるとアリーナのほうからだった。

それを聞いた瞬間、何故か嫌な予感がしたのでかなり急いでアリーナに向かう。

アリーナに到着すると、俺は直ぐに観客席に行く。

理由を簡単に説明すると、こっちの方が状況を見るだけなら圧倒的に早いからだ。

「……なんだよ、この状況」
一言でいうと、何がおこったのかわからない状況だった。
シャルルと香菜の後ろに、ボロボロになっている鈴とセシリアがいて、

そして全員を護るように一夏がラウラに向かっているのだが、さっきから少しも動いていない。

（もしかしてアレがISの動きを止めることができるAICか……）
「な、なんだ！？くそっ、体がつ……！」

そして、零落白夜のエネルギー刃が次第に小さくなっていく。

（……マズイ！！黒影）

咄嗟に俺はISを起動し以前、

シールドに穴を開けることができた黒星をラウラに向かって構える。
「やはり敵ではないな。この私とシュヴァルツェア・レーゲンの前では、

貴様も有象無象の1つでしかない——消えろ」

「……喰らえ！！」
トリガー

そして引き金を引く。

「な、なにっ!？」

すると、月光から放たれたレーザーは引き寄せられるかのようにラウラに直撃した。

「……チッ、掠ったか」

……ように見えたのだが、実際は掠っただけのようだった。

「残念だったな。ラウラ・ボーデヴィツヒ。
一夏を倒すことが出来なくて」

「……やっと出てきたか。黒月優哉!!」

あれ、この言葉を聞くだけだと俺が出てくるのを待ってたっぽい？
ってことは、原作と比べると一夏への復讐心は薄いのかな。

まあ、俺の『千冬さんのモンド・グロツソ2連覇を潰したのは俺だ』
って発言の効果だと思っがな。

「お前の狙いは俺か。……なら一夏、お前は引いてあいつらを護れ」

「そう言うけど、お前一人じゃ……」

「頼む、ここは俺に任せてくれ」

「優哉……。ああ、わかつたぜ」

真剣な表情で言うで一夏は、少し渋ったが俺の言うとおりに引いてくれた。

その様子を見届けてから俺は黒星を手放し、月光を展開する。

「行くぜ。覚悟しなよ、ラウラ・ボーデヴィツヒ」

俺がラウラに飛び出そうとした瞬間、俺達の間影が割り混んできた。

ガギンッ！

金属同士が激しくぶつかり合う音が響いて、
イグニッション・ブースト
俺は瞬時加速を中断させられた。

「……やれやれ、これだからガキの相手は疲れる」

「千冬さん!？」

その俺とラウラの間に入ってきた人物は、
普段と同じスーツ姿でISどころかISスーツすら着用していない
織斑千冬だった。

だけど手に持っているのはIS用近接ブレードで、
170センチはある長大なブレードをISの補佐なしで軽々と扱っ
ている。

その上、自慢じゃないけど

俺のイグニッション・ブーストも止められるんだから、
常人離れしているとかのレベルじゃないな。

「模擬戦をやるのは構わん。」

——が、アリーナのバリアまで

破壊する事態になられては教師として黙認しかねる。

この戦いの決着は学年別トーナメントでつけてもらおうか」

「教官がそう仰るなら」

素直に頷いて、ラウラはISの装着状態を解除する。

「織斑、デユノア、黒月もそれでいいな？」

「あ、ああ……」

「教師には『はい』と答える。馬鹿者」

「は、はい!」

「僕もそれで構いません」

「俺も良いですよ」

返事をし直す一夏に続き、俺とシャルルも返事をする。

俺達のその言葉を聞いて、

千冬さんは改めてアリーナ内すべての生徒に向けて言った。

「では、学年別トーナメントまでの私闘の一切を禁止する。解散！
パンツ！と千冬さんが強く手を叩く。

あゝあ、良いって返事はしちゃったけど、
これのせいで試合が出来なくなっただな。……最悪。

20話 親の遺産（後書き）

最初の目標、PV10万突破の時はシャルをヒロインにしたので、次の目標、PV20〜30万突破の時は誰をヒロインにしようかな？と、作者が迷いに迷ってしまったのでアンケートを取ります！！

？ …… セシリア・オルコット

？ …… 凰・鈴音

？ …… 篠ノ之 箒

？ …… ラウラ・ボーデヴィツヒ

？ …… 神崎 香菜

？ …… 一夏（TS）

さあー若干、「冗談で書いたものも
ありますが、あなたは誰を推しますか？

と、いうわけでドシドシ送ってきてください。お待ちしております。

21話 仕様変更（前書き）

加那 翔です。

アンケートはまだまだ続行中ですので、ドシドシ送ってくださいね。

21話 仕様変更

「……………」

「……………」

場所は保健室、時間は第三アリーナの一件から一時間が経過していた。

ベッドの上では打撲の治療を受けて包帯を巻かれた鈴とセシリアがむっすーとした顔で視線をあらぬ方向に向けていた。

「別に助けてくれなくてよかったのに」

「あのまま続けていれば勝っていましたわ」

素直に感謝すると思ったのに、これだからな。

まったく……一夏もバカだが、こいつらも色んな意味でバカだよな。

素直に感謝してたら一夏の気を少しぐらい引くことは出来るのに。

まっ、感謝されたくて助けたわけではないけどね。

「お前らなあ……。はあ、でもまあ、怪我は大したことなくて安心したぜ」

いや、全身打撲は酷い怪我だと思っるのは俺だけなのだろうか？

「こんなの怪我のうちに入ら——いたたたっ！」

「そもそもこうやって横になっていること自体が無意味——つつうつ！」

「お前らバカだろ……………」

そう呆れながら俺が言つと……、

「バカって何よバカって！ バカ！」

「一夏さんこそ大バカですわ！」

なぜか一夏にバカと言い出す鈴とセシリア。

なんでお前らは一夏にバカって言うてんだよ。言ったのは俺だろう？
まあ、俺はバカじゃないから良いけどさ。

「好きな人に格好悪いところを見られたから、恥ずかしいんだよ」

「ん？」

「やっぱシャルルはわかってんのか。さすがだな」

シャルルが飲み物を買って戻ってきた。

部屋に入ったときの言葉は俺には聞こえたが、一夏には聞こえていなかったみたいだ。

鈴とセシリアもすっかりと聞いていたらしく、かあぁと顔を真っ赤にして怒り始める。

「ななな何を言ってるのか、全っ然わかんないわね！」

こここここれだから欧州人^{ヨーロッパ}って困るのよねえっ！」

「べべっ、別にわたくしはっ！そ、そういう邪推をされるといささか気分を害しますわねっ！」

二人ともまくしたてながらさらに顔を赤くしていく。

なんでこんなわかりやすい態度をとってるのに一夏はわからないのかな。

「はい、ウーロン茶と紅茶。とりあえず飲んで落ち着いて、ね？」
「ふ、ふんっ！」

「不本意ですがいただきましたましようっ！」
鈴とセシリアは渡された飲み物をひったるように受け取って、ペットボトルの口をあけるなりごくごくと飲み干す。

ドンドンドンドンドン……！

「な、なんだ？何の音だ？」

地鳴りのように響く、その音は廊下から聞こえていた。
しかもドンドン近づいてきているような気がするのには気のせいだろうか？

ドカーンッ！！

一夏が呟いた瞬間、保健室のドアが吹き飛ぶ。
でも、ドアってリアルに吹き飛ぶことってあるんだな。初めて知ったよ。

「織斑君！」

「黒月君！」

「デュノア君！」

入ってきたー！というか、雪崩れ込んできたのは、数十名の女子だった。

「な、な、なんだなんだ!？」

「ど、どうしたの、みんな……ちょ、ちょっと落ち着いて」

「……これ!」「……」

バンッ!という効果音がつきそうなぐらいの勢いで女子一同が出てきたのは、

学内の緊急告知文が書かれた申込書だった。

「な、なにになに……?」

「『今月開催する学年別トーナメントでは、より実践的な模擬戦闘を行うため、二人組みでの参加を必須とする。なお、ペアが出来なかった者は抽選により選ばれた生徒同士で組むものとする。締め切りは』——」

「ああ、そこまでいいから! とにかくっ!」

「私と組もう、織斑君!」

「私と組んでくれませんか、黒月君!」

「私と組んで、デュノア君!」

どうやら緊急告知文によると、学年別トーナメントの仕様変更があったようだ。

そしてペア同士になることになったので、

学園内に3人しかいない男に先手必勝とばかりに頼みにきたと。

「え、えつと……」

だが、これはまずいな。

シャルルは女子だから、いつどこで正体がばれるとも限らない。

「ーそうだ、一夏と組ませればいいか。」

そう思つて行動しようとしたときには時、既に遅かった。

「そういえば優哉はシャルルと組むんだつたよな？」

一夏がそんなことを言い出したのだ。

おまえ、自分がこれ以上、疲れたくないからつて俺になすりつけるなよ。

そう思つて反論しようと思つたが、他の人と組んでもしもラウラと当たつたときのことを考える。

「ーそう考えるとやばいよな。他の女子じゃあ。

つて、ことはシャルルのほうが良いかな。そう思い、一夏の提案を受けることにする。

「ああ、そういえばそうだったな。シャルル」

「あ、うん。そうだったね」

「まあ、そういうことなら……」

「他の女子と組まれるよりはいいし……」

「男同士つていうのも絵になるしね……ごほんごほん」

俺とシャルルが組むということを知つた女子達は、俺達のことは諦めたみたいだった。

「なら、織斑君は空いてるわよね！！」

「あ、えつと……」

ある一人の女子がそう言つてきて一夏は焦る。

お前、自分のことを考えてなかったのかよ。

「……ごめんなさい。一夏君とは私が組むことになつてるのよ。」

応、幼馴染だし」

そんな一夏を救ったのは香菜だった。

「あ、ああ。そうだったな。すっかり忘れてたぜ」

あはは、と苦笑いをする一夏。

普通にその反応じゃバレるだろ。

まあ、結果を簡単に話すと、嘘とバレはしなかった。

そして俺達に組もうと言ってきた数十人の女子は去っていった。

はい、めでたしめでたし。

「一夏っ！」

「一夏さんっ！」

女子達が去っていった後、すぐに鈴とセシリアがベットから飛び出してくる。

「あ、あたしと組みなさいよ！ 幼なじみでしょうが！」

「いえ、クラスメイトとしてここはわたくしと！」

いや、お前らの台詞の意味はわかんねえから。

幼馴染っていう点ならさっきペアになることが決定した香菜でも、
筈でもいい訳だし。

クラスメイトとしてなら誰でもいいしな。クラスの人なら。

「ダメですよ」

いきなり登場した山田先生の言葉にその場にいた全員がびっくりする。

「お二人のISの状態をさつき確認しましたが、ダメージレベルがCを超えています。」

当分は修復に専念しないと、後々重大な欠陥を生じさせますよ。

ISを休ませる意味でも、トーナメント参加は許可できません」

「うつ、ぐっ……！ わ、わかりました……」

「不本意ですが……非常に、非常にっ！ 不本意ですが！ トーナメント参加は辞退します……」

鈴とセシリアは先生の言ってる言葉で納得したようだが、

一夏はなぜ二人がトーナメントに参加できないのか理解できていないようだった。

「一夏、IS基礎理論の蓄積経験についての注意事項第三だよ」

「え、えーと……」

これぐらいは基本なんだから覚えておこうぜ。一夏。

「『ISは戦闘経験を含むすべての経験を蓄積することで、より進化した状態へと自らを移行させる。』

その蓄積経験には損傷時の稼動も含まれ、

ISのダメージがレベルCを超えた状態で起動させると、

その不完全な状態での特殊エネルギーバイパスを構築してしまうため、

それらは逆に平常時での稼動に悪影響を及ぼすことがある』」

「シャルルの言う通りだ。二人のダメージレベルはCを超えている

って山田先生がさっき言ってただろ？」

「おお、それだ！ 思い出した！」

ひとまず話がまとまったところで、一夏が疑問を口にする。

「しかし、なんだってラウラとバトルすることになったんだ？」

「え、いや、それは……」

「ま、まあ、何と言いますか……女のプライドを侮辱されたから、ですわね」

「ふうん？」

まあ、一夏はわかってないと思うけど、おそらく一夏のことを侮辱でもされたのだろう。

ボーデヴィツヒは一夏のことを嫌っているからな。それ以上に嫌ってるのは俺らしいけどね。

「ああ。もしかして一夏のことを――」

「あああつ！ デュノアは一言多いわねえ！」

「そ、そうですね！ まったくです！ おほほほほ！」

感づいたシャルルを二人が取り押さえた。

二人から口を覆われて、シャルルが苦しそうにもがく。

いやいや、あんな言い方されたら誰でもわかるっつーの。

「こらこら、やめろって。シャルルが困ってるだろうが。それにさっきからケガ人のくせに体動かしすだぞ。ホレ」
一夏が二人の肩を指でつつく。

そしてそれをまともに喰らった二人は凍りつく。

「あ……すまん。そんなに痛いとは思わなかった。悪い」

「い、い、いちかあ……あんたねえ……」

「あ、あと、で……おぼえてらっしやい……」

これでシャルルは助かったが、あとで一夏が大変なことになりそうだな。

……俺には関係ないけど。

21話 仕様変更（後書き）

皆様に嬉しい？お知らせがあります。

リアル友達と一緒にやってるブログのほうに、
PV10万突破記念企画の続きを載せました。

まあ、それでも未完成なんですけどねwww

ブログはこちらです←

<http://nyann160.blog.fc2.com/>

22話 学年別トーナメント、開始！！（前書き）

まだまだアンケートは募集中なので、
ご応募、よろしく願います。（詳しくは21話へ）

並びに自分の活動報告のところに

【加那 翔】というタイトルで記事をつくろうと思います。
そこでは、作者への質問コーナーと題しまして、
色んな質問に答えて言っちゃおうかなと思っています。

なので加那 翔に聞きたいことがありましたら、
活動報告にて質問コメントしてください。

小説のことからプライベートのことまで
どんな質問にも答えますよ。

まあ、さすがに下みたいな質問には答えられませんがね。

例 ×（住所・番号・アドレス）

22話 学年別トーナメント、開始！！

六月の最終週に入り、IS学園は月曜日から学年別トーナメント一色に変わる。

そのため、俺のテンションはかなり上がっている。
だって強いやつと戦えるかも知れないんだぜ？超あがりまくりだよ。

と、話がそれたな……まあ、学年別トーナメントで忙しいため、

今、こうして一回戦が始まる直前まで、

全生徒が雑務や会場の整理、来賓らいひんの方の誘導などで大忙しってわけだ。

そしてそれらからやっと開放された生徒達は急いで各アリーナの更衣室へと走る。

なので現在、各アリーナの女子更衣室はかなり大詰めだろうな。
男子更衣室こうちはかなりガラッガラだけどな。

「しかし、すごいなこりゃ……」

観客席の状況を更衣室のモニターで見ながら呟く一夏。

（でも、確かにこれはすごいな）

そこには各国政府関係者、研究所員、企業エージェント、その他諸々の顔ぶれが一同に集結していた。

「三年にはスカウト、二年には一年間の成果の確認にそれぞれ人が来てるからね。

一年には今のところ何も関係ないみたいだけど、

それでもトーナメント上位入賞者にはさっそくチェックが入ると思うよ」

「ふーん、ご苦労なことだ」

まあ、俺はそんな大人の事情に興味ないんだよな。
それよりも今は、強いやつと戦いたい。

「一夏はボーデヴィツヒさんとの戦いだけが気になるみたいだね」

「まあ、な」

そうか、一夏もラウラと戦ってみたいのか。

そりゃそうだろうな。

いくら協力性の欠片もないセシリアと鈴とはいえ、
専用機持ち二人を同時に戦えるんだから一年の中でも最強の部類だろう。

だからこそ俺も戦ってみたい。

「……一夏、正直に言って俺もボーデヴィツヒと戦ってみたい。

だからどっちが先にあいつと当たっても怨みっこなしだぜ」

「ああ、わかってるさ」

俺達、全員着替えは既に済んでいる。

そして現在は、IS装着前の最終チェック。

そんな俺の隣では、シャルルは相変わらず男装用ISスーツを着て

いた。

「さて、こっちの準備はできたぞ」

「僕も大丈夫だよ」

「俺もOKだぜ」

「そろそろ対戦表が決まる頃だな」

「どういう理由なんだか知らないが、突然のペア対戦への変更がなされてから」

「従来まで使っていたシステムが正しく機能しなかったらしい。」

「本当なら前日にはできるはずの対戦表も、今朝から生徒たちが手作りの抽選クジで作っていた。」

「一年の部、Aブロック一回戦一組目なんて運がいいよな」

「え？どうして？」

「シャルル、一夏の性格を考えてみる。待つなんて苦手そうだから俺がそういうとシャルルは納得したかのように……ああ、という言葉を出す。」

「……別に良いだろ」

「不貞腐れたかのように言う一夏。でも、まっ、自覚はしてんだな。」

「待ち時間に色々考えなくて済むしさこういうのは勢いが肝心だ。出たとこ勝負、思い切りの良さでいきたいだろ」

「ふふっ、そうだね。」

「僕だったら一番最初に手の内を晒すことになるから、」

ちよつと考えがマイナスに入ってたかも」

まあ、なんともシャルルらしい意見だな。

一夏とは正反対だな。……そう考えると俺ってどっち派なんだろうな？

早めに戦いたいっていうのはあるんだけど、手の内を晒したくないしな。

……やべえ、俺ってどっちにも入らないかも。

「あ、対戦相手が決まったみたい」

モニターがトーナメント表に切り替わる。

それと同時に俺の顔つきも真剣になるのがわかった。

俺はそんな顔をしながら、モニターを食い入るように見る。

「……え？」

「……へえ」

出てきた文字を見て、シャルルと一夏はポカンとするが俺は冷静だった。

というのも、この結果を期待していたからだ。

俺とシャルルの一回戦の相手はラウラ、そして第のペアだった。

「一戦目で当たるとはな。待つ手間が省けたというものだ」
「こつちも同じ気持ちだぜ。お前とは戦いたかったからな」
試合開始まで5秒。4、3、2、1――開始！！

「叩きのめす――！」

俺とラウラの言葉が奇しくも同じだった。

試合開始と同時に俺は月光げっこうを呼び出し、イグニッション・ブースト瞬時加速を行う。

「おおおっ――！」

「ふん……」

ラウラが右手を突き出す。――来る――！！

こいつの慣性停止能力（A I C）を破る方法は、俺にはわからなかった。

だからこそ、俺は――――――。

「……………」

俺の特攻を読んでいたのだろう。

腕を始めとし、胴、足とA I Cの網に捕まえられる。

何をしてもまったく動かない。見えない腕に掴まれたように身動き一つ取れない。

――ホント、これはチートだろ。

「開幕直後の先制攻撃か。わかりやすいな」

「……そりゃあどうも。以心伝心で何よりだよ」

「ならば私が次にどうするかもわかるだろう」

ああ、スゲエ分かるな。

ガキンツ！と巨大なりボルバーの回転音が轟き、

『敵ISの大型レール砲カノンの安全装置解除を確認、

初弾装填――警告！ ロックオンを確認――警告――！』

と、黒影のハイパーセンサーが警告を出す。

「させないよ――！」

俺の遙か後ろから聞こえる声。

それと同時に爆破弾バーストの射撃をラウラに浴びせる。

「なっ……！！！」

その銃弾が肩のカノンに直撃したせいか、焦るラウラ。

俺にロックオンしていた砲弾は、俺に向かって放った砲弾は空を切る。

「喰らえっ――！」

動揺したためか、俺を拘束していたAICの効果が切れる。

その隙をつき、俺は月光で切りかかる。

「くっ……」

月光を体をくねらせながら避けるラウラ。

――スゲエな。これを避けれるとは思わなかったぜ。

「さすがだな。……ボーデヴィツヒ」

「……貴様もな、黒月優哉。」

私に突っ込んでくる直前、デュノアに武器を渡しておくとはな――

シャルルの持っているビームライフル……黒星くろほしを一目見てからラウラは言う。

やっぱり俺の機体情報を知っていたか、まさかあれが俺の武器だと

バレるとはね。

「シャルル（ああ、やべえ。こいつとタイマンで戦いてえ）」
「わかったよ」

名前を呼んだだけでわかったのか、シャルルは箒の方へ向かう。
「ーサンキュー、シャルル。」
おかげでこいつとの戦闘を楽しめそうだ。

「さてと、これで一対一の戦いだ。
戦いを楽しもうぜ。ラウラ・ボーデヴィツヒ」

23話 Valkyrie Trace System (前書き)

……サブタイ、ネタバレですね。

まあ、仕方ないか。これしかないし。

23話 Valkyrie Trace System

「さて、あつちはあつちで戦い初めたことだし。こっちも始めますか」

シャルルの方を見ると、二人はもう既に戦い始めていた。

「先に片方を潰す作戦か……」

その光景を見て呟くラウラ。やっぱり筈は負けると思ってるんだな。まあ、訓練機だから仕方ないけどね。

とにかく、それは一先ず置いておいて、さっきの推理は少し惜しいな。

「いや、違うぜ」

一息ついてから、月光を強く握り締める。

「これはお前が倒したがつている俺と、一騎打ちをさせるための作戦だ。

ほら、嬉しいだろ？お前のいう教官様の夢を潰した本人がここにいるんだぜ？

殺せるものなら殺して見ろよ。哀れな黒うさぎさん」

「貴様っ……！」

軽く挑発すると、簡単に乗ってくる。

（こいつ、千冬さん関係のネタで挑発するとチョロいな。

面白いぐらい、簡単に乗ってきやがる。ああ、超おもしれえ）

内心、ほくそ笑みながら、突っ込んできたラウラのプラズマ手刀を月光で受け止める。

「喰らいなっ!!」

そして空いているほうの腕に黒星を展開し、超至近距離銃撃をする。

「ぐはっ」

超至近距離のため、

避けることもできずに直撃し、ラウラは壁まで吹っ飛ぶ。

（あ、力加減すんの忘れてたな。

まあ、いつか。あいつなら大丈夫だろ）

「おい、大丈夫ですか？」

ラウラ・ボーデヴィツヒさん。こんなんで堕ちてませんよね？」

未だに止まない土煙に向かって大声で言う。

まさか、こんなんで倒れたりしないでくれよ？

そんなことを考えていたそのとき――

「っ!？」

いきなり土煙の中から、二本のワイヤーが俺に向かってきた。

（これはあいつの武器――ワイヤーブレードだよな。

ってことは、まだ気絶してないな）

「はああああっ!!」

「くっ……」

まだと敵に向かって切りかかる俺。

それをラウラは少ない動きで避けていく。

だが、連撃の前に疲れがで初め、ところどころ掠ったりしていく。

「これで終わりだ。ラウラ・ボーデヴィツヒ!!」
一息に勝負を決めるため、俺は【疾風迅雷】を使いラウラに突撃する。

月光はラウラに直撃し、シュバルツェア・レーゲンのエネルギーを
全てなくした。

俺はそう思っていた。

――だが、それをきっかけに異変が起こった。

（こんな……こんなところで負けるのか、私は……!!）
確かに相手の力量を見誤った。それは間違えようのないミスだ。

しかし、それでも――

（私は負けられない、負けるわけにはいかない……!!）
ラウラ・ボーデヴィツヒ。それが私の名前。識別上の記号。

一番最初につけられた記号は――遺伝子強化試験体C10037。
人口合成された遺伝子から作られ、鉄の子宮から生まれた。

――暗い。暗い闇の中に私はいた。

ただ戦いのために作られ、生まれ、育てられ、鍛えられた。
知っているのはいかにして人体を攻撃するかという知識。
わかっているのはどうすれば敵軍に打撃を与えられるかという戦略。

格闘を覚え、銃を習い、各種兵器の操縦方法を体得した。
私は優秀であった。性能面において、最高レベルを記録し続けた。

それがあつた時、世界最強の兵器――ISが現れたことで世界は一変した。

その適合性向上のために行われた処置、
『ヴォーダン・オージェ』によって異変が生まれたのだ。

『ヴォーダン・オージェ』――擬似ハイパーセンサーとも呼ぶべきそれは、

脳への資格信号伝達の爆発的な速度向上と、
超高速戦闘状況下における動体反射の強化を目的とした、肉眼への
ナノマシン移植処置のことを指す。

そしてまた、その処置を施した目のことを『越界の瞳』と呼ぶ。
危険性はまったくない。理論の上では、不適合も起きない――はず、
だった。

しかし、この処置によって私の左目は金色へと変質し、
常に稼働状態のままカットできない制御不能へと陥った。

この『事故』により私は部隊の中でもIS訓練において後れを取る
ことになる。

そしていつしかトップの座から転落した私を待っていたのは、
部隊員からの嘲笑と侮蔑、そして『出来損ない』の烙印だった。

世界は一変した。――私は闇から深い闇へと、止まることなく転げ
落ちていった。

そんな私が初めて見た光。それが教官との……織斑千冬との出会い
だった。

「ここ最近の成績は振るわないようだが、なに心配するな。

一ヶ月で部隊内最強の地位へと戻れるだろう。なにせ、私が教える
のだからな」

その言葉に偽りはなかった。特別私だけに訓練を課したことはなか
ったが、

あの人の教えを忠実に実行するだけで、

私はIS専門へと変わった部隊の中で再び最強の座に君臨した。

しかし、安堵はなかった。自分を疎んでいた部隊員も、もう気にな
らない。

それよりもずっと、強烈に、深く、あの人に惹かれ――そして憧れ
た。

その強さに。その凛々しさに。自らを信じる姿に、強く焦がれた。

――ああ、こうなりたい。この人のようになりたい。

そう思ってから私は、

教官が帰国するまでの半年間に時間を見つけては話にいった。

いや、話ができなくても良かった。近くに、ただ側にいるだけで、

その姿を見るだけで、

私は体の深い場所からふつふつと力が湧き上がってくるのがわかる。

それは『勇気』という感情に近いらしい。

そんな力があつたからだろうか。私はある日、教官に聞いてみた。

「どうしてそこまで強いのですか？　どうすればそんなに強くなれますか？」

そのとき――ああ、そのときだ。

鬼のような厳しさを持つ教官が、わずかに優しい笑みを浮かべた。

私は、その表情に心がチクリとしたのを覚えている。

「私には弟と、弟みたいに可愛がつているやつがいる」

「弟……ですか？」

「あいつらを見ているとな、わかるときがある。

強さとは何なのか、その先に何があるのかをな」

「……よく、わかりません」

「今はそれでいいさ。そうだな、いつか日本に来る機会があつたら会ってみるといい。」

……ああ、だが忠告しておくぞ。あいつらに――」

優しい笑顔、どこか気恥ずかしそうな表情、それは――

（それは、違う。私の憧れるあなたではない。

あなたは強く、凛々しく、堂々としているのがあなたなのに）

だから――許せない。教官にそんな顔をさせる存在が。

そんな風に教官を変えてしまう弟、それを認められない。認めるわけにはいかない。

だから――

（敗北させると決めたのだ。アレを、あの男を、私の力で、完膚なきまでに叩き伏せると！）

ならば――こんなところで負けるわけにはいかない。

あの男は、アレはまだ動いているのだ。

動かなくなるまで、徹底的に壊さなくてはならない。

そうだ、そのためには――

（力が、欲しい）

ドクン……と、私の奥底で何かがうごめく。

そして、そいつは私に向かって言った。

『願うか……？ 汝、自らの変革を望むか……？』

より強い力を欲するか……？』

言うまでもない。力があるなら、それを得られるのなら、私など――空っぽの私など、何から何までくれてやる――！

だから、力を……完膚無き最強を、唯一無二の絶対を――渡しによこせ――！

D a m a g e L e v e l …… D

M i n d C o n d i t i o n …… U p l i f t .

C e r t i f i c a t i o n …… C l e a r .

23話 Valkyrie Trace System（後書き）

今日、もう一回更新します。

既に予約しているので、言いますが12時です。

誤字・脱字がありましたら、報告してくれると嬉しく思います。

24話 決意、そして決着

「ああああああっ！！！」

突然、ラウラが身を裂かんばかりの絶叫を発する。

と、同時にラウラのIS【シュヴァルツェア・レーゲン】から激しい電撃が放たれる。

「ぐっ……いきなりなんだ！？」

それにより、俺の体が吹き飛ぶ。

……いつたい、何なんだよ。コレ。

「な、なにコレ……？」

いつの間にか第との勝負を終わらせてきたのか、

シャルルが俺の側まできて呟く。そして俺もシャルルも目を疑う。その視線の先では、ラウラが……そのISが変形していた。

（変形……？違う、そんな生易しいものじゃねえな）

シュヴァルツェア・レーゲンの装甲がぐちゃぐちゃに溶け、どろどろになってラウラの全身を包み込んでいく。

黒い、濁った闇が、ラウラを飲み込んでいった。

ISはその原則として、変形はしない。

厳密には出来ない。といった方が合っている。

ISがその形状を変えるのは【スタートアップ・フィッティング初期操縦者適合】と

フォームシフト

【形態施行】の二つだけ。

パッケージ装備による部分変化はあっても、基礎の形状が変わることはない。

だが、その“有り得ない事態”が……目の前で起こっていた。

シユヴァルツェア・レーゲンだったものは、ラウラの全身を包み込んでいき、

その場所に立っていたのは、【全身装甲^{フルスキン}】のISに似たナニカ。

しかしその形状は、先月の襲撃者とは似ても似つかない。

見た目は、少女の成りだった。

(……コレ、誰かに似てる気が)

何故か、俺は冷静にそんなことを考えていた。

そしてそいつの手を見た瞬間、疑問が確信に変わった。

「っ!?!」

考え事をしていた瞬間、やつは俺に剣を振るってきた。

「うぐっ……!!」

考えていた最中だったので、

それをマトモに喰らってしまい、地面を軽く1〜2回バウンドする。

……それにより、ISが強制解除される。

（くそっ、今のでエネルギーを全部、使っちゃったか？）
だが、これでわかったことがある。

アレは確実に……

「雪片……」

雪片——かつて千冬さんが使っていた武器だ。

でも、なんで千冬さんのマネをしているんだよ。こいつは。

『君の親が関わっているVTシステム。』

これは、過去のモンド・グロッソの部門受賞者^{ヴァルキリー}をトレースするシステムだ』

ふと冬弥さんが教えてくれた情報を思い出す。

（確か、千冬さんはモンド・グロッソで優勝していたよな。
っ！ことは、これがVTシステムだよな。

………ホント、あいつらは何を考えてこれを作ったんだよ）

これを見た誰かさんは気にするだろうなと思い、俺はオープンチャ
ンネルを展開する。

「……一夏、アレって多分」

『離せっ！！離せっ！ってんだよ！！』

『一夏さん、落ち着いてください！！』

『そうよ。今、アンタが行ってもどうしようもないでしょうが！！』
おいおい、暴れすぎだろ。てめえは。

「すー、はー。すー、落ち着けつつつてんだよ。このボケッ
！……」

「『『『つー？』『』』」

いきなり怒号を漏らした俺に、ビックリする一夏達。

「……落ち着いたか。一夏」

『あ、ああ。……悪い』

「気にすんな。で、俺の聞きたいことなんだけど、アレは千冬さん
だよな？」

『ああ、アレは絶対に千冬姉だ』

だよな。あの剣筋や、あの武器は確実に千冬さんだ。

「……そうか。悪いな、一夏」

『えっ』

「今回は俺に任せてくれ。」

アレにはウチの親が関わってんだ。頼む」

真剣な表情で一夏に向かって言う。

すると、その必死さが伝わったのか、一夏は――

『優哉……。ああ、わかった。今回はお前に任せる』

「……サンキュー」

ま、そんなことというのは良いんだけど、もうエネルギーがないんだ
よな。

「優哉。アレと戦いたい理由は何となくわかったが、
どうやって戦うつもりだ？もう黒影のエネルギーはないのだろう？」
うぐっ、これは篤さん。鋭いツツコミで……。

「無いなら他から持っていけば良いんじゃない？」

シャルルはふわりと俺達の元へ降り立つ。

「シャルル……」

「普通のISなら無理だけど、

僕のリヴァイブならコア・バイパスでエネルギーを移せると思う」

「マジか……。なら、頼む」

「だけど、約束して。絶対に勝つて」

びしつと俺に向けて指を指して言う。

その言葉はシャルルにしては珍しく、強い言葉だった。

（絶対に勝つ、か……）

「ああ、絶対に勝つさ。」

ここまで啖呵きつていくんだ。負けたら男じゃねえよ」

「それじゃあ負けたら、これから一ヶ月、女子の制服で登校してもらおうかな？」

「うつ……。ああ、わかった。負けたら着てやるさ。」

まっ、負けるつもりはさらさらねえけどな！！」

シャルルの軽いジョークのおかげで、いい意味で緊張がほぐれる。

「じゃあ、始めるよ。……リヴァイヴのコア・バイパスを開放。

エネルギーの流出を許可。――優哉、黒影のモードを一極限定にして。

それで疾風迅雷を使えるはずだから」

「ああ、わかった」

リヴァイブから伸びたケーブルが

イヤリング状態の黒影にと繋がれ、エネルギーが流れ込んでくる。

「完了。これでリヴァイブに残ってる全てのエネルギーは渡したよ」
その言葉通り、リヴァイブは光の粒子となって消えていく。

――本当に全て渡してくれたんだな。

それにあわせて、黒影は再度、俺の体に一極限定モードで再構成されていく。

「やっぱり、これだけだと武器と左腕だけだね」

「これでいいさ」

（黒影、【疾風迅雷】で行くぞ）

心の中でそう呟くと、黒影は俺の言葉をわかってくれたのか。エネルギーが全て月光に向かっていくのがわかる。

（これじゃあ本当に真剣勝負だな。

こいつが当たれば俺の勝ち、だが逆に攻撃を喰らえば俺の負け）何か嫌になってくるぜ。

そう思っているはずなのだが、顔はずっと笑っていた。

「……………」

意識を集中させるために、俺は目を瞑る。

（思い出せ。過去に千冬さんと戦ったときに使った構えを……………）

『ぐっ……!!』

『甘い!! 良いか、そんな構えでは駄目だ。』

もつと全ての攻撃に対処出来る構えをしろ!!』

『そんなこと言っただって……』

『泣き言を言うな。そんなこと言っていると、誰も護れないぞ!』
『っ!?!』

『お前は強くなりたいんだろ? だから私を頼ってきたんだろ? 剣のことになると、厳しくなる。とわかっていながら』

(……そうだったな。)

俺はこのときから誰かを護りたい。そう思っていたんだったな)――俺に関わった人、全てを護りたい。

小さいながらに俺が思った事。

(そうだ、そうだった。

なんでこんな大切なことを忘れていたんだ)

「……全てを護りたい。俺に関わった者、全てを――」

その護りたい人、全員が見ていることも忘れて俺は呟く。

「だからこそ、俺は千冬さんに教えてもらったんだ」

自分の体の中心となる位置で月光を構える。

それは随分、昔に使っていた俺にあつた俺だけの構えかた。

「力が欲しいと……。お前もそうなんだろう？」

ラウラ・ボーデヴィツヒ。だからこそ、その姿なんだろう？

お前の中で一番、強い存在……。織斑千冬。お前はずっと、強くなり
たかったんだ――」

聞いているはずのないことだが、大声で叫ぶ。

どうしても聞いて欲しいことだからだろうか？

自分でも良くわかっていないが、とにかく叫ぶ。

自分の思ったこと、感じたこと全てを――。

「だけど、その強さは偽物だ――」

他人の姿をマネしたからって強くなれるわけじゃねえ――

だから俺が今、本当の強さを見せてやる。見ておけよ、ラウラ」

叫び終えた後。俺は月光を強く構え直す。

そして――

「行くぜ、偽物野郎――」

疾風迅雷を使って偽物に突っ込んでいく。

「……………」
それに合わせて黒いISは、全力で刀を振り下ろしてくる。
千冬さんが使っていた早く、鋭い袈裟斬り。

だが、千冬さん自身が使っていた袈裟斬りよりは弱かった。
「はあああああっ！！」

振り下ろしてきた刀を月光で弾き飛ばす。

黒いISはそれにより、何も持っていない状態になる。

「これで終わりだー！！」

すぐさま、頭上で剣を構え、ためらうことなく振り下ろす。

「ぎ、ぎ……ガ……」

ジジッ……という紫電が走り、黒いISが真つ二つに割れる。

そして、気を失うまでの一瞬であろう、ラウラと俺の目が合う。

眼帯が外れ、あらわになった金色の左目と。

それはなんだか、ひどく弱っている捨てられた子犬のような眼差しに見えた。

『助けて欲しい』と言っているような感じがしたのだ。

「……………これで一件落着かな」

力を失って崩れてきたラウラを抱きかかえ、頭を撫でながら呟く俺。

抱きかかえたときに痛くないようにISは既に解除済みだ。

というか、エネルギーを使い果たしたから勝手に消えた。

「一つ忠告しておくぞ。あいつらに会うときは心を強く持て。

あいつらは未熟者のクセにどうしてか、妙に女を刺激するのだ。油断していると、直ぐに惚れてしまうぞ」

そんな風に言ってくる教官。

だが、言葉とは反対にひどく嬉しそうで、照れくさそうな感じの表情だった。

「教官も惚れているのですか？」

「姉が弟に惚れるものか、馬鹿者め」

ニヤリとした表情で言われて、ますます落ち着かなくなる。

教官にこんな顔をさせる、その男達が――羨ましい。

そして、出会ってわかった。戦って、理解した。

強さとは――何なのか。

その答えは無数にあるのだろう。

けれど、その答えの一つに出会ってしまった。

『強さ……？そりゃああれじゃないか？

心の在処、己の拠り所。自分がどう有りたいたかを常に思うことじゃねえか？』

……そう、なのか？

『まっ、これは俺の独断だけどさ、自分がどうありたいかわからないやつは、

強い弱い以前に歩き方を知らないだろう？』

……歩き、方……。。

『どこへ向かうか。どうして向いたいか、だ』

……どうして向うか……。

『ああ、そういうことだ』

――お前は何故、そこまで強いんだ？

何故、そこまで強くなるうとする？

『バーカ、俺は強くねえよ。全然、強くなんかねえ』

断言。その言葉に私はポカンとしてしまう。

あれほどまでの力をもってして、強くないと言い張る。

それが私には意味がわからなかった。

『けれど、お前が強いつていうのであれば、俺は強いのだろうな。単純な力では無く、心が――』

……心が、強い？

『ああ、人は誰でも心が強かったら、自然と力は手に入るもんなんだよ。』

それに俺は、やりたいこともあるしな』

――やりたいこと？

『そうだ。俺はさ、今まで人を護れたことがないんだよ。』

だから、俺に関わった人全員を、護りたい。

これを人は強欲と言っただろうな。

だけど、俺は全員、護りたい。いや、護るんだ』

――それは、まるで……。

『ははっ、そうだな。だから、お前も護ってやるよ。ラウラ』
笑顔で言われて、私の胸は初めての衝撃に強く揺さぶられる。

『護ってやるよ』

そう言われて私は――ああ、そうか。

これが、そうなのか。

ときめいて、しまったのだ。

そして、早鐘を打つ心臓が言っている。

こいつの前では、私は……ただの15歳なのだと。
ただの『女』なのだと。

――黒月、優哉。

ああ、これは確かに……。惚れてしまいそうだ。

24話 決意、そして決着（後書き）

作者の一言

優哉

……まあ、自分でそんなキャラにしたんですけどね。

25話 事件の後（前書き）

急遽、もう一話更新します。

理由は、加那 翔のみぞ知る。 ってねwww

25話 事件の後

『トーナメントは事故により中止となりました。ただし、今後の個人データ指標と関係するため、全ての一回戦は行います。』

場所と日時の変更は各自個人端末で確認のうえー』
ピ、と誰かが学食のテレビを消す。

その様子を俺は、きつねうどんを食べながら見ていた。

「ふーん。やっぱり、シャルルの予想通りになったな」

「そうだねえ。あ、一夏、七味取って」

「はいよ」

「ありがと」

「あ、俺にはカラシ」

「はいよ……って、きつねうどんにカラシは合わねえだろー!」

「おお、ナイスツツコミだね。一夏」

当事者とは思えないほどのんびりと食事を取る俺たち。

と、いつものさつきまで事情聴取されていたのだ。

そしてやっと晩飯を食べれるようになった時間が、

食堂が終わるギリギリのこの時間になったってわけだ。

そういえば、さつきから周りの女子の雰囲気を変だな。

テレビが消える前までは騒がしかったのに、今ではひどく落胆しているようだ。

その沈みっぷりは、さながらタイ。ニック号のようだった。

いや、見たことはないんだけどな。

「……優勝……チャンス……消え……」

「交際……無効……」

「……うわあああんっ！」

数十名が泣きながら走り去っていった。一体何があったんだろうね？俺にはさっぱりワカンナイヤ。ははは……。

「どうしたんだろうね？」

「さあ？」

「……鈍感共が」

そんな会話を交わしながらふと見ると、女子が去った後に、一人呆然と立ち尽くす箒の姿があった。

箒に気づいた一夏が、箒の側に寄っていく。

「へえ、一夏もやるな」

「うん、そうだね」

食後のお茶を飲みながら言う俺達。

いやあ、さすが一夏だな。

空気を読んで箒のところに向かうなんて。

「そついえば箒。先月の約束だが——」

一夏が箒に話しかける。

「付き合ってもいいぞ」

へえ、一夏が箒と付き合うのか。

「えっ！？」

えっ、なんで？

あの一夏が箒と付き合うだと！？

隣に座っていたシャルルもこの言葉にはビックリしたようだった。
目が見開いていた。

「な、なに!？」

「だから、付き合ってもいいって……おわっ!？」

突然、一夏が箒に絞め上げられる。

ホント、嬉しそうだな。箒。

「ほ、ほ、本当、か?本当に、本当に、本当なのだな!？」

「お、おう」

「な、なぜだ? り、理由を聞こうではないか……」

「そりゃ幼馴染の頼みだからな。付き合うさ」

「そ、そうか!」

「買い物くらい」

……ですよねー!。

うん、だろうと思った。

所詮、一夏だもんね、仕方ないよ。

「……だろうと……」

「お、おう?」

「そんなことだろうと思ったわ!」

そう叫ぶと、箒は鋭い正拳を一夏の顔面に喰らわせる。

「ぐはあっ!」

「ふん!」

追い討ちをかけるように、うめく一夏のみぞおちにつま先が刺さる。

……あ、白だ。

「ぐ、ぐ、ぐっ……」

「一夏つてさ、わざとやってるんじゃないかって思うときがあるよね」

「だよな。これはさすがに………ないわ」

筭が去ったあと、俺とシャルルは、

一夏が腹を抑えながら呻いている場所まで向かって話す。

「な、なに？ どういう意味だ、それは？」

「さあな。自分で考えろ。バーカ」

笑いながら言ってみる。

まっ、これでわかったら凄いいけどな。

「はあ……、疲れた」

ぐったりと、屋上のフェンスにもたれる。

もう、あんなに集中力を使う戦いはしたくねえ。そんなことを思いながら。

「お疲れさま、優哉」

不意にそんな声と、頬に冷たい感触が走る。

「冷たっ！！……ああ、香菜か。サンキュー」

慌てて冷たい感触を探ると、スポーツドリンクだった。

そしてそのスポーツドリンクを持っていたのは香菜で、微笑みながら俺の頬に当ててきていた。

「あーあ、せっかく私がラウラちゃんを助けようと準備してたのに、ストーリーを知らない、優哉に先を越されたな」

俺に愚痴るように、嫌味を言っている香菜。

「悪いな。俺にも事情があったんだよ」

ついさつき渡されたスポーツドリンクを開け、飲み始める。

「……VTシステムでしょ？」

が、香菜のその一言により、手を止めてしまう。

「ああ、そうだ。冬弥さんから聞いたのか？」

「うん、まあね」

「そうか……。なら、話さなくてもいいよな？」

「……うん。というか、話したくないならどんな話でも言わなくていいよ」

その言葉にジーンとする俺。

（……こいつが前世の妹だって気づいてなかったら、惚れてたかもな）

「……優哉、朗報だぞ！！」

急に屋上に来た一夏。口調は本当に嬉しそうなそれだった。

「……むー」

だが、一夏の機嫌とは裏腹に、香菜の機嫌はますます落ちていった。なんでこいつは唸っているんだ？ まっ、いつか。

「おお、一夏。どうしたんだ？」

「今日から男子の大浴場使用が解禁されるんだよ」

「へえ、それは嬉しいな」

特に今日みたいな日は。

かなり疲れが溜まっちゃってたんだよね。

「ああ、これからボイラー点検の日だけ使えるようになるらしい」

「そうか、なら早く行こうぜ」

「……悪い。俺は今から千冬姉のところに行かないといけないんだ。先に入っててくれ」

「そうか……、じゃあな、香菜。それと先に行ってるぜ、一夏」

残念だな。そう思いながら、俺は屋上を後にする。

……大浴場か。楽しみだな。

だが、またしても俺はすっかりで“とある事”を忘れていた。

「うおーーーー、これはすげえ!!」

大浴場に入っすぐ、俺が言った言葉はそれだった。

と、言うのも大浴場という言葉からしてわかんと思うが。

広い、とにかく広いのだ。

うわ、やべえ。

こりゃあ風呂好きの一夏じゃなくても、テンションあがるぞ。

それから体を洗ったり、頭を洗ったりし、30分ぐらいたったころ。
ドアのほうから人影が見えた。

おそらく一夏だろう、そう思い気にせず風呂を堪能していると、ド
アの開いた音が聴こえた。

……アレ、おかしくね？

一夏ならば、俺みたいに風呂を見た瞬間、叫ぶはず。

しかし入ってきたやつは何もいわない、と言うことは一夏ではない
だろう。

ならば誰だ？普通に考えると女子の侵入は不可。……いや、一人だ
け入れるな。

「……シャルル？」

「きゃっ……ゆ、優哉!？」

向こうも俺に気づいたらしく、ビクリして体を隠す。
って、やべえ。なんで普通に見てたんだよ。俺。

「ちょ、ちよつと待て!! お前、どうして……」

すぐさま、シャルルを見ないように後ろを向く。

この間、コンマ一秒。……うん、人間、やろうと思えばできるもんだね。

「え、えつと、一夏が用事があって、今なら入れるかな。って思ったんだけど」

ああ、なるほどね。

一夏が用事で直ぐに来れないことがわかって、

今のうちに入っちゃおうと、思ったんだが、そこには俺がいたと。

「迷惑だった?……それなら上がるけど」

「いやいや、上がるなら俺が上がるよ。結構堪能したし」

「えつと、その僕と一緒にはいや?」

俺が上がると発言したら、シャルルはそう言ってきた。

「いや、そういうわけじゃないんだけどさ」

「それにね、ちよつと大事な話もあるんだ」

「……わかった」

大切な話がある。シャルルの口から出た言葉。

それを聞いた瞬間、出ようとするのをやめる。

だが、直接見るのはやばいと思ったので、シャルルがいる反対を見
ておく。

「その……前に言ってたこと、なんだけど」

「前っていうと……学園に残るって話か？」

「そ、そう。それ。僕ね、もう少しだけここにいようと思う。」

「ここだって思う居場所を見つけてないし」

「そっか……」

ま、シャルルが前向きになれたんならいいか。

「……………」

「……………」

無言の時間、それはとても長く長い時間だった。

それが何分あっただろうか、わからないが、

急に俺の後ろの方で誰かが動く気配がした。………というか、絶対に

シャルルだけだな。

「ねえ、優哉」

いきなり俺の背中に、ぴとっ……とシャルルの手が触れてきた。

「じゃ、シャルル？いきなりー」

そのままシャルルの白く手は、俺を後ろから抱きしめる。

背中にシャルルの華奢な体の感触が伝わってくる。

「優哉や一夏が、ここにいろっって言ってくれたから決めたことなんだよ？」

「そ、そっか……」

俺にとっては何でもないことだったんだけどな。

ただ単に目の前で困っている人がいたから助けただけ。ただそれだけ。

「ねえ、優哉」

「ん、なんだ？」

「これから僕のこと、シャルロットって呼んでくれる?」
シャルロット。

「これがお前の本当の……」

「そう、僕の名前。お母さんがつけてくれた、本当の名前」

「ああ、呼んでやるさ。――シャルロット」
「ん」

嬉しそうにシャルロットは返事をした。

それはまるで子供のような無邪気で、いつものような屈託のない笑顔で。

(……護りたいな。この笑顔を――)
シャルロットの笑顔を見て、思ったこと。
それは一種の俺の夢だった。

(違う、護りたいじゃない。
絶対に護るんだ。俺がこの笑顔を)

25話 事件の後（後書き）

……もしかしたら午後6時に

もう一回更新するかもしれないです。

もうすぐ2巻の内容も終わりますし

26話 俺〃嫁!?

翌日の朝のSHR。シャルロットの姿が見当たらなかった。
まあ、同じような感じでラウラもないのだが、あいつの場合は怪我だろうな。

「一夏、シャルルはどうしたんだ？」

「さあ？先に行つてて食堂で言われたから、俺一人で来んだけど」
ああ、なるほどね。

それでシャルルが来てないと。
どうしたんだろうか？

そんなことを思っていると、教室のドアが開き、山田先生が入ってくる。

「み、みなさん。おはようございます……」

何だか元気がないような気がする。

いや、気がするじゃなくて、確実に元気はないな。

「今日はですね、転校生を紹介します。いや、転校生というか、もう自己紹介はすんでるというか……」

頭を抱える山田先生を尻目にクラスは一気に騒がしくなる。

先月には俺が転入してきて、今月も転入生が二人、既に入ってきてるんだからな。

そりゃあ騒がしくもなるよな。

(ん?……自己紹介は済んでいる?)

「それでは、入ってきてください」

「失礼します」

妙に聞き覚えのある声。

「シャルロット・デュノアです。改めてよろしくお願いします」
ぺこりと皆に頭を下げたのは女子制服を着たシャルロット。

丁寧な頭を下げられたもんだから、ポカンとしていた一同は頭を下げる。

『え? デュノア君って女?』

『おかしいと思った。男にしてはどうも線が細いと思ってたのよね』

『あれ、織斑君って同室だったんだから気付いて無いわけ……』

『ちよつと待って!! 昨日って確か、男子が大浴場使ったわよね! ?』

ザワザワザワツ!! 教室が一斉に喧騒に包まれる。

――やばっ!! 俺は本能でそう思い逃げようとする。

ふと隣を見ると一夏も逃げ出そうとしていた。

だが時既に遅し、廊下側から蹴破られたかのような勢いでドアが開かれる。

入ってきたのは……。

「一夏あつ!!!!!!」

鈴だった。しかもご丁寧にISアーマーを展開し終えている。

「死ね！！！」

両肩から放たれたフルパワーの衝撃弾。

それは一夏だけでなく、俺の目の前にもきた。

……確実に死んだな。そう思って目を閉じる。

ズドドドドドオン！！

「ふーっ、ふーっ！！！」

怒りのあまり、肩で息をしている鈴が目に入るって、
ーアレ、俺。生きているのか？

「……………」

間一髪だったのかはわからないが、
俺達と鈴の目の前に割って入ってきたのはーなんとあのラウラだった。

その体には『シュヴァルツエア・レーゲン』を纏っていた。

……のだが、両肩に装備していた大型カノンが無い。

「た、助かった……………。ありがとうな、ラウラ。

……それでも、お前のIS、もう直ったのか」

「コアが辛うじて無事だったからな、予備のパーツで組み直した」

「へえ、そいつはすげーむぐっ！？」

その先を俺は言うことが出来なかった。

何があったのか説明すると、

いきなり、本当にいきなり、ラウラが俺の胸ぐらを掴んできたのだ。

そしてそのままラウラに引き寄せられ、……そのままキスをさせられた。

（えっ！？ちょっと待って、何がどうなってるんだ？Why？）

「お、お前は私の嫁にする！！これは決定事項だ。異論は認めん！」

なにその強制的な告白。

そしてなんで俺が嫁なんだよ。婿じゃねえの？

「優哉……？」

「っ！？」

その声を聞いた瞬間、俺の体はビクッ、と震えた。

振り向くと、そこには既にISを起動し終えた、香菜の姿があった。

「ちょ、待て。俺は悪くねえ！！俺は悪くねえんだ」

「どう考えてもアンタが悪いに決まってるでしょうが！！！」

ちよつと待て、俺の話を聞け！！

そう言いたい、聞く耳を持たなさそうなので教室から逃げようとする。

だが、そこには――

「にこっ」

天使とも思えるほどの笑顔を浮かべたシャルロットさんがいた。

「あははは……」

「優哉つて他の女の子の前でキスしちゃうんだね。僕、びっくりしちゃったよ」

「いや、俺としては武器を展開させているお前にビックリなんだが……」

シャルロットはニコツと笑い、アーマーをパージさせる。
そして現れた六十九口径パイルバンカー【グレー・スケール灰色の鱗殻】。

「は、はは、ははは……」

あつ、あの噂つて本当だったんだな。

人間、限界を超えると笑うしなくなるって。

ドカアアアアアアン！！！！

その日のホームルームは、轟音と爆音、

そして絶え間ない衝撃で文字通り、学園が揺れたと言う。

26話 俺〃嫁！？（後書き）

これにて2巻の内容が完全に終わりました。
長かったですね……。

いや、これからの方が長いですかね。

そしてこれからは作者が大好きな
3巻の内容に入っていきます。

理由？

そりゃあ水着……ゴホンゴホン。

ラウラが可愛いじゃないですか？

いやあ、あの可愛さはたまりませんよね？…ね？

PV100000突破記念　く続編その1く（前書き）

過去に投稿した10万突破記念の続編です。

〃〃翌日〃〃

「……で、なんでこうなったの？」
はい。現在、絶賛後悔中の黒月優哉です。
というのも、シャルの口から出たお願いのせいでこうなりました。
そのお願いを俺なりに纏めたのが、これだ。

『買いたいものがあるんだけど、
一人じゃ買いに行けないんだよ。だから一緒に買いにいつてくれな
い？』
ここまでなら、別に来てあげてもいい。と思うよね。
でも、ここからが問題。

『でも、その商品は女の子二人一緒じゃないともらえないんだよ。
だから優哉は、女装して一緒に買い物に行こう』
……なあ、おかしくね？
だってさ、女の子二人ならウチの学校ならいくらでもいるじゃん。
なんで俺を誘うの？しかも男である俺を女装させてまで。

でも、シャルの願いだから叶えたいな、と思ってしまい。
俺は、俺なりに可愛いと思うような女物の服を「彼女へのプレゼント
です」と言って買い、

その服を持って学院に一回、戻り。自室で着替えてからもう一回街に出てきた。というわけだ。

「それにしてもシャル、遅いな」

とある街中にある噴水の前で携帯を弄りながらシャルが来るのを待つ俺。

（……あちこちから視線を感じるから、ここにじっとしてるのは嫌なんだけどな）

そう、なぜか知らないが、あちらこちらから視線を感じるのだ。なんかこの服におかしい点でもあるのか？

一応、店員さんがオススメだと言ってくれた服なんだけどな。と、自分が今、着ている服を見ながら言う。

ちなみに今の服は……、

「ー遅くなつてごめん」

自分の着ている服の説明をしていたら、シャルが来たようだった。

「別に良いけどさ、なんで遅れたの？」

前日にできる限り女の子みたいな口調で話して、とシャルに言われていたので気をつけながら話す。

「ちよつとね（つけてきていたみんなを振り払うために回り道していた、なんて言えない）」

……ワケありつてことかな。

話したくないなら話さなくてもいいか。

「ふーん。まあ、良いけど」

「ホッ……それにしても優哉、その服どうしたの？」

そして話を再び戻されたくないからか、急に話を変えるシャル。

「普通に店で買ったんだけど。どこか変？」

「別に変じゃないよ。凄く似合ってる」

「あ、ありがとう／＼（似合ってるって言われても嬉しくねえ）」
頬を赤くし、少し顔を背けながら言ってみる。

べ、べつに大した意味なんてないんだからね／＼
ただ、女の子の振りをするんだったら

可愛い仕草をしたほうが良いと思ったからなんだから、勘違いしないでよ／＼

「っ／＼……で、どこに行く？」

「はぁーっ!？」

どこに行く？と言いだしたシャルに思いつきり言う。

「お前が欲しい物があるって言ったから、女装までしたんだけど」

「あはは……ごめん」

苦笑いをしてから謝るシャル。だが、俺にはその態度だけでどういうことかわかった。

つまり、こいつは俺のが女装したらどうなるか見たかっただけで、目的はなかったと。

「……もう、ぐいぐい。好きにしてくれ。」

27話 慌ただしい朝

「ゴメンね、わざわざ手伝ってもらって」

「別に良さ。他にやることもなかったし」

赤い夕日が差し込む放課後の廊下、優哉とシャルロットは学校行事である

臨海学校の詳細について書かれているプリントを持って並んで歩いていた。

「でも、良かったの？今日は香菜達と街に行く予定があつたんじゃないの？」

「そんなのいいって。大体、シャルロットがいねえと、行っても意味ねえしな」

「えっ？」

「ま、何をするにしても好きな女の子と一緒にいいってことだよ」
そう言った優哉の頬は赤く染まっていた。
それは夕日のせいだけではなかった。

「優哉……」

「シャルロット……」

ふたりしかいない廊下で見つめ合う優哉とシャルロット。
そこに言葉はいらなかった。

そしてオレンジ色の光景の中、ふたりの影は徐々に重なって――

「――あ、れ？」

ぼーっとした頭で現状を確認する。

場所はIS学園一年生寮の自室。間違っても廊下じゃない。

そして時刻は夕日が差し込むような時間でもなく、早朝六時半だ。

「……………」

シャルロットはまだはつきりしない意識のままだったが、

二回ほどまばたきをしたところで、やっと状況を理解した。

「夢……………」

はあああーっと、深く深いため息を吐く。

その深さは深海二万マイルを遥かに超えそうだ。

（ああ、せめてもう十秒くらい見れてれば……………」

夢の残骸に思いを馳せ、その名残を惜しむ。

目が覚めると急速に失われていく夢の内容も、

その執着からなかなか消えずに手元に残っていた。

それもお気に入りのビデオを見るような感じで、
もう一度、頭の中で再生をする。

（が、学校の廊下で、なんて……）

胸に手を当てると、ドキドキと早鐘を打っているのがわかる。

（僕は何を考えてるんだろうね）

先月の学年別対抗戦が終わった後、本来の性別に変わったシャルロットは、

今はもう、一夏とは違う部屋になっている。

「あれ？」

ふと隣のベッドを見るが、ルームメイトの姿がなかった。

それも、起きてどこかに行った。というより、使った形跡すらなかった。

「……………まあ、いいや」

それよりも今は夢の続きである。

今すぐ眠れば夢の続きが見れるかも知れない。

そんな淡い想いと期待を抱いて、シャルロットはまた眠りにつこうとまぶたを閉じる。

チュンチュン……

「うん……………」

スズメの鳴き声を聞き、俺は目を覚ます。

「……………はあゝゝ、よく寝た」

背伸びをし、ベッドから起き上がろうとしたとき……

むにゅ

「ん……………」

この部屋にいるはずのない、自分以外の声が聞こえた。

そして声の高さから察するに、男の物ではない。というか、逆に男だったら怖い。

慎重に布団に手をかけーガバツ！と一気にめくる。そこには

……………

「ラウラ！？なんでこんなところに……………」

ドイツの代表候補生、ラウラ・ボーデヴィツヒその人がいた。

転校初日に一夏の頬を張ろうとし、その一撃を止めたのが始まり。

その後色々……………本当に色々とありすぎたな。

「……………で、何で裸なんだよ」

そう、なんで俺が驚いてるのかというと、ラウラが裸で寝ているからだ。

まあ、俺のベッドと一緒に寝ていたという点も驚くけどね。

唯一、身につけている物を上げるとすれば、

左目を覆う眼帯と待機状態のISである、右脚のレッグバンドのみだ。

「ん……………、何だもう朝か。……………優哉、おはよう」

慌てることなく、極めて普通にラウラは朝の挨拶をしてくる。

そんなラウラに俺は咳払いを一つし、落ち着いてから朝の挨拶をする。

「……おはよう、ラウラ。」

で、何で俺のベッドで寝てるのかな？裸で」

「夫婦とは何も包み隠さぬものだと言いたぞ」

「そりゃそうかも知れないけどな。俺とお前は第一、夫婦じゃねえだろー！」

現在、色々あって俺の頭は混乱中だった。

なので、自分自身のテンションすらわかっていなかった。

「日本ではこういう起こし方が一般的だと聞いたぞ。将来結ばれる者同士の定番だと」

「……そんな間違った知識をお前に教えたのはどこの馬鹿野郎だー！っ！！」

ほとんどやけくそ気味になりながら俺は叫んだ。

「……この時間だと、優哉はまだ部屋にいるわよね」

優哉の部屋の前、一人の少女……神崎香菜が誰にも聞かれないような小さく呟く。

そしてノックをしようとしたとき、中で繰り広げているであろう会話が聞こえる。

（あれ、誰かいるのかな？）

優哉と話している相手が気になり、扉に耳をあて中の会話を聞こうとする。

『はあ、はあ……。さすがは私の嫁だな』

『はあ……。ふう……。だから誰が嫁だ。』

俺は男だつての、今のでわかつたろ？』

この会話を聞いた瞬間、

香菜はガチャッ！とドアが吹き飛ばされるかと思うぐらい勢いよく開ける。

「な、なにやってんのよ！！アンタ達はーーーーっ！！」

中の光景を見て絶句する香菜。だが、絶句するのも無理はない。

なんせ……。汗だくになった全裸のラウラと、

汗だくになりながらラウラをベットのの上に押さえつけている優哉の姿があるからだ。

この構図的に導き出される答えは一つしかない。

それは――

「優哉あ――っ!!!!」

真後ろに阿修羅でもいるのではないかと、
思うぐらい真っ黒な気を纏ってISを部分展開する香菜。
部分展開したほうの腕には【紅】――刀身全てが真っ赤な剣を持つ
ており、

それを優哉に向かって振り下ろす。

「ちょ!?! 待て、これは事故なんだって!!」

ラウラの上から退き、ISを起動させて香菜の攻撃を受け止める優
哉。

「うるさい、うるさい、うるさ――い。」

言い訳してないで……、一回、死ね――っ!!」

「あ――っ、もう、不幸だあ――っ!!」

IS学園の学生寮全体に優哉の悲鳴と、
とてつもない量の物が破壊される破壊音が響きわたる。

27話 慌ただしい朝（後書き）

やっと3巻に入ったぜーっ！！

ブログやってますので、

こちらも見てくださいと嬉しいな……っ

加那 翔はあなたを上目遣いで見ながら言ってみたり。

<http://nyann160.blog.fc2.com/>

28話 レイン・メーカー（前書き）

良いサブタイが思いつかなかったので、
原作のサブタイトルをパク……インスパイアしましたwww

28話 レイン・メーカー

「し、死んだかと思った……」

「まったくだ、よく死ななかったな。流石は私の嫁だ」

「……いや、元はといえばお前のせいだから」

あの地獄を乗り切った俺と、ラウラと香菜は食堂で朝食をとっていた。

というか、よく俺って生きてるよな。リアルに死んだかと思ったよ。

まあ、助けてくれたのはラウラだと思うけどさ。

「……ラウラ、サンキューな」

「うん、何がだ？」

心底、何の話をしているのかわからないのか。首をかしげながら言うラウラ。

やべえ、何かカワイイんですけど。なんていうか仕草が……？

ってか、アレだよな。IS学園の女子ってカワイイ娘ばかりだよ
ね。

今度、一夏と話してみるか。どんな女子が好みかっていう話題で。

「いや、アレだよ。」

今まで俺がピンチのときに助けてくれたことにだよ」

「ああ、気にするな。」

嫁の危機は夫が助けるものだろう？」

「……………」

なんかその台詞には納得できるんだけど、納得できないんだよな。俺が何を言ってるかわからないだろうが、俺の立場から考えてみるとわかるはずだ。

「……………ありがとな」

誰にも聞かれないように呟く。

「わああっ……………！ 遅刻、遅刻しちゃう！」

不意に聞こえた声。それはとても珍しい声だった。

というか、この声がこの時間に聞こえる時点で珍しい。

その声の主は一番近くに余っていた定食を急いで手に取る。

「よっ、シャルロット。こっちだ」

「あ、優哉。お、おはよう」

シャルロットに挨拶をしてから、俺は食堂の時計に目を向ける。
今からではかなり急いで食べなければ授業に間に合わないな。
シャルロットは空いていた俺の隣の席に座る。

「随分遅かったみたいだけど、何かあったのか？」

「う、うん。ちょっと……その、寝坊を……」

へえ、真面目なシャルロットでも寝坊か。

「シャルロットでも寝坊するんだな」

「う、うん。まあ、ね……。その、二度寝しちゃって……」

「へえ」

今は食べるのに必死なのか、微妙に歯切れの悪い言葉で受け答えをする。

（……いや、でもなんか違う気がするんだよね〜）

男装のときみたいに何かボコを出さないかなと思いつながら、
じーっとシャルロットを見つめてみる。

「ゆ、優哉？ずっと僕のほうを見てる気がするんだけど、ね、寝癖
でもついてる？」

「い、いや、別にねえけど。ただつい最近まで男子の制服だったか
ら、

女子の制服を着ているシャルロットはなんか、新鮮だな〜って思
つてさ」

「し、新鮮？」

「お、おう、可愛いと思うぜ」

褒められ慣れていないのか、シャルロットは俺の言葉に顔を真っ赤
にする。

「……と、とか言っても、夢じゃ男子の制服を着せたくせに」

「んっ、夢？なんの話だ？」

とか言いつつ、一応は聞こえてたんだよね。

たしか夢じゃ男子の制服を着せたくせに……だっけ？

……っことは、シャルロットは俺の夢を見てくれたってことなのかな？

「な、なんでもない。なんでもないよっ!？」

ぶんぶん突き出した手を振って否定すると、シャルロットは再び朝食に手をつける。

（あー、シャルロットってカワイイな）

そんな仕草が可愛くて俺は無意識に微笑んでしまう。

「いてえっ!！」

いきなり足に踵落としを、頬は強く抓られた。

「へえ、優哉が本当はそんな性格だったなんてね」

「お前は私の嫁だろう。私のことも褒めるがいい」

ちなみに最初に踵落としをしてきたのは香菜だ。

そして頬を抓ってきたのはラウラだ。

「えっとな……」

いきなり褒めろって言われてもな、良い褒め言葉が……。

ーよし、これでいこう。

「二人とも大人しくしてたらカワイイよね」

ドカッ!!

二人同時に足を踏まれる。

ちよ、かなり痛い。

「一緒にするな!!」

うわぁ、超睨まれてるので超怖いんですけど。

キンコーンカーンコーン。

そんなことをしていると、ふと予鈴が鳴り響いた。

ーんっ？ 予鈴？

「うわぁっ!! やべえ。今の予鈴だぞ、さっさと向かわないと!!」
俺が急いでいる理由は一つ。

今日のSHRにはあの有名な鬼教官……織斑千冬が来るからである。
山田先生だったら、こんなに急がないんだけどな。

そんなことを考えながら、慌てて立ち上がったがテーブルには誰も
ついていなかった。

それどころか他のみんなは既に食堂を飛び出していた。

「ちよ、お前ら!!」

それは俺だけに死ねつつつてんのか!!」

全力でダッシュするが、追いこすどころか追いつくことすらできな
かった。

……お前ら、どんだけ体力あるんだよ。

「優哉、私はまだ死にたくないんだよ」

「右に同じだ」

「ごめんね、優哉」

この薄情者共がー！ーっ！！
どうせ死ぬんなら、みんなで死のうぜ。
あつ、ちなみに逆の立場だったら、答えはノーだけだな。

全力でダッシュしているうちに生徒玄関へと到着する。
そしてすぐさま、現在、履いている外履きから内履きに履き替える。
ふと他の女子達の様子を見るが、誰もいなかった。……本当に薄情者共だな。

「ほらっ、優哉。早く」

と、思ったのだが、シャルロットだけは俺を待っていてくれたみたいだ。

「シャルロット、お前ってやつは本当に……」

「そんなの後で良いから早く」

思わぬ優しさに泣きそうになっている俺を強引に引き寄せるシャルロット。

……えっ？ちよつと待って！！

なんで俺を抱き寄せてるんだ……シャルロットさん？

「お、おい。いきなり何を……」

「優哉、飛ぶよ？」

「はっ？」

何を言ってるのかわからなかったため、聞き返そうとした瞬間、シャルロットの脚と背中光の輪が広がり、収束して弾ける。

シャルロットの専用機【ラファール・リヴァイヴ・カスタム？】の部分展開。

脚のスラスターと背部推進ウィングだけを実体化させた状態だ。

「ーおわっ!？」

抱き寄せた状態だと動かしにくいとシャルロットは思ったのか、俺をいわゆる…………お、お姫様抱っこしてきた。

運んでもらってて、グチグチと文句を言える立場じゃない

のはわかっているんだけど…………うん、これは無いと思うんだよ。

だってさ、男が女にお姫様抱っこされてるんだぜ？

なんかおかしくね？反対ならわかるけど。

そんなことを考えていたら、あっという間に俺達の教室がある3階に到着する。

「到着っ!」

到着したと同時に俺はシャルロットの腕から降りる。

「おうっ、ご苦労なことだ」

そんな俺の行動と同時に聞こえた声は、史上最強ともいえる人の声だった。

「う、嘘…………」

「あ、あ…………」

現在、俺の前に立っているのは鬼教官だった。

ふと隣にいるシャルロットを見ると今まで見たことのない青ざめ方をしていた。

そして後ろからノコノコとやってきたラウラと箒はそれを尻目に教室に入っっていた。

ーお前らも一緒に怒られ…………殺されるや。

「学園内でISを許可なく使用することは禁止されている。言ってる意味がわかるな？デユノア」

「は、はい……すみません……」

ちなみに真面目なシャルロットが違反をしでかしたのでクラス一同驚いている。

「罰としてデユノアと黒月は放課後、教室を掃除しておけ」

「はい……」

そして俺らは意気消沈し着席する、それと同時に丁度チャイムが鳴りSHRとなった。

「それでは今日は通常授業の日だったな。

IS学園に通っているにしろ諸君らは世間では高校生だ。ちなみに赤点など出してる……分かっているだろう？」

千冬さんの言葉に全員で頷く。

IS学園でもちゃんと普通の時間割があり、そして皆が嫌いな期末テストなどもある。

赤点なんかをとると、普通に補習行きだ。せつかくの夏休みがなくなるっつーわけだ。

「それから来週からだが校外実習期間に入る、

分かっているだろうが忘れ物はするなよ。三日間とはいえ学園を離れるのだからな」

校外実習……確か、海に行くらしいから臨海学習かな？

……部屋に水着とかあったかな？なかったら買いにいかねえと。

先生の話聞きながら、そんなくだらないことを考えていた。

28話 レイン・メーカー（後書き）

現在、20万PV突破記念の話を制作中です。
ですが、完成するのはいつになりますかね。はははっ。

完成したときには、50万いたりしてwww

……自分の作品が50万いくとかねえな。

29話 二人きりの掃除

放課後、夕日が射す教室で俺とシャルロットは掃除をやらされていた。

他の生徒は誰一人としていない……と俺は思う。

普段IS学園は専属の清掃業者が隅々に亘ってピカピカにしている。学舎の掃除を生徒にやらせないというのは如何なものかと一時期保護者の反発があったらしい。

けど、『わずかな時間もIS教育に回した方がいい』ということで決着がついたとか。

なので、教室掃除というのは生徒への軽い処分として使われることになったらしい。

で、それを今まさに体感しているわけであるのだが――

「いやあ、ホント掃除って楽しいよな」

「そう？　なんか優哉って変わってるね」

「ん、そうか？　ってか、こういうのは楽しんだもん勝ちなんだよ。だからなんでも楽しんでやってたらいんだぜ」

シャルロットにそんなことを言ってから、口笛を吹く。

ま、きちんと床のゴミを集め、そしてゴミ箱にいれるなどの作業もしてるけど。

「そうかな。……ん、ん〜！」

「無理しなくていいぞ。机は俺が運んどくから」

「というかその机、岸里さんの『フルアーマー机』じゃね？」

全ての教科書などがなかには詰められており、完全な防御力を持っているという。

……ま、こんなことをしたらダメなんだけどな。

「へ、平気だよ。これでも専用機持ちだし、体力は人並みにー」
そこまで言った所で、シャルロットは机の重量に耐えきれずに足を滑らせた。

俺はすぐにシャルロットの後ろに回り込み、シャルロットの華奢な身体を支える。

「はあ、お前な。さっきの言葉に説得力がねえぞ。

まあ、いいや。ここは俺がやつとくから」

「う、うん……。あ、ありがとう……」

シャルロットは何故か顔を赤くさせ、視線を宙に彷徨わせる。

ーあれ、いきなり視線を泳がせてどうしたんだ？

不意にそう思うが、すぐに原因に気づく。

「あ、悪い」

「あ……」

原因に気づいた俺はすぐにシャルロットから離れる。

が、シャルロットは残念そうな声をあげた。

「どうかしたのか？」

「い、いや。何でもないよ」

両手を振りながらシャルロットは俺から視線をそらす。

「ーホント、どうしたんだ？シャルロットのやつ。」

「そついやさあ」

ついさっき聞きたかったことを思い出したから聞いておこうかな。と思い、机を運びながら声をかけたのだが。

「わひゃい！？」

シャルロットが変な声を出しながら焦っていたので、それに驚く。

「どした、いきなり変な声出して？」

「な、何でもない。ちよつと考え事してて。それよりも優哉の方こそ何か用？」

上手い具合に話題をすり替えられた気がするが、
気のせいだと思い、俺は疑問を口にする。

「聞きたかったんだけどさ、前に『二人きりの時はシャルロットって呼んで』って言うてたじゃん。」

それで、てつきり俺はまだしばらく男のフリをしてんのかと思ってたんだが……どうなんだ？」

「え、えーっと……それは、ね」

いつもはハキハキとした受け答えをしているのに、今のシャルロットは返答に困っていた。

「ー言いくいのかな？」

「その、ちゃんと女の子として……優哉に見て欲しくて……」

気恥ずかしいのか、シャルロットは顔を赤らめたまま消え入りそんな声で言ってきた。

女の子として見て欲しい、か。

「ん？俺は普通にシャルロットのこと女の子として見てるけどな」

「え、それって……」

「だって男じゃねえし」

「……………」

俺がそういうと、教室内の空気が凍りついた気がした。

（あれっ、俺、やっちゃった？）

「あ、にしてもシャルルからシャルロットか……」。

何か普通になっちまったし、別の呼び名でも考えようか」

空気が凍ったままではマズイ。話をすり替えよう。

と思い、手頃に思いついたことを言う。

「えっ、いいの？」

だが、予想以上にシャルロットは食いついてきた。

「お前が良かったらの話だけだな」

「うん、全然大丈夫。お願いしたいな！」

ぶんぶんと勢い良く頷くシャルロットに気圧されながら、俺は顎に手を当てて考える。

これから呼ぶんだから、呼びやすい呼び名がいいよな。

「そうだな……………」

シャルロットだから……………。

「シャルなんてのはどうだ？ 呼びやすいし親しみやすいと思うんだが」

「シャル。……うん、いいよ！ すごく気に入った！」

「そ、そうか。偉く気に入ってくれたみたいだけど」

「そうだね。シャル、シャルか……。ウフフフ」

ご機嫌な様子で掃除を終わらしていくシャルを見ながら、俺は机を運んでいく。

……というか、急にどうしたんだ？

さっきよりもやる気になってくれたからありがたいけど。

………っと、そうだ。

あと一つ、シャルに頼まないといけなかったんだ。

「シャル、お願いしたいことがあるんだが」

「え、何かな？」

未だに幸せに浸っているシャルの手をがしつと掴み、そして表情を

真面目モードに変える。

……本当にこれはマジでいかないとな。

「付き合ってくれ」

「え？」

30話 デート！？

「うんうん、晴れてよかったな」

週末の日曜日。天気は懸念していた雨雲一つない快晴。来週からいよいよ臨海学校が始まるので準備のために、街に繰り出しているんだが、俺の隣にもう一人いる。

「……………」

シャルと一緒に買い物に行こうとしているわけだけど、なぜか不機嫌そうな顔だった。

……なんか悪いことしたのか？俺。

「……僕はね夢が砕け散る音を聞いたよ」

まあ、さっきからシャルはこんな感じなんだよな。

ホント、なんでこんな崖から突き落とされた感じなんだろうか？

ズーンというよりかは、どよーンという効果音がつきそうなおーラをまとっていた。

あ、ちなみにシャルの格好は、半袖のホワイト・ブラウス。

そしてその中にはライトグレーのタンクトップを着ている。

ふわりとしたティアドスカー트는その短さもあって、健康的な脚線美を十二分に演出していた。

ーうん、なんというか。……普通に可愛いな。

これで女の子らしさに自信がない。なんて言っても説得力がないく

らいに。

シャルは急に止まり背後から何かどす黒いオーラを出したので、それを感じた俺は思わず変な声を出してしまった。

「ーなんか最近、どす黒いオーラを感じることがかなり多くなってきたな。」

俺、一夏の影響でも受けたか？

「乙女の純情を弄ぶ男は馬に蹴られて死ぬといいよ」

ふんつと鼻を鳴らしテクテクと俺の横を通り過ぎて歩いていく。

やっぱ今日はものすごい不機嫌なのか？

……いや、あれは確実に不機嫌だよな。

でもま、確かに女の子の純情を弄ぶ男は死ぬべきだよな。………
夏とか。

「そうだな。……女の子の純情を弄ぶやつは俺に殺されるべきだな」

「やめといたほうがいいよ。」

……自分で自分を殺すなんて、絵面的にもなんかキツイものがあるし」

「ん？何か言ったか」

「……別に」

いいや、絶対になんか言ってただろ。

一夏なら見逃すかもしれないが、俺は見逃さねえぞ。

つてか、そんな露骨に不機嫌オーラ出さないでくれよ。

「はあ……。どうせ、どうせね……。そういうことだと思ったよ。
一夏も似たようなことをやってたしね。……なんか男って、はああ
」……」

またしても深海二万マイルを超えたかのような深いため息をつかれる。

「そ、そうだ！何かご馳走してやるからさ、元気になれって。な
っ……」

笑わないと、シャルの可愛い顔が台無しだぞ……」

「か、かわいっ……。ご、ごほんっ。な、何をご馳走してくれるの？」

一瞬だけ顔が真っ赤に染まるが、
すぐに立て直したつもりなのか、不機嫌そうな顔で話の続きをして
くる。

「でもな、まだ頬が赤いぞ。」

「そうだな……。……噂の駅前のパフェとかどうだ？」

内心、ほくそ笑む俺。

だが、本当に内心だけだ。顔には一切、出さない。

「つてか、出した瞬間、俺は殺される。」

「パフェだけ？」

子犬が何かをねだるようにきらきらと目を輝かせながら俺を見てきた。

「……やめろ、何かを抑えられなくなるからそんな目はやめてくれ。」

「……とにかくシャルが食べたい物ご馳走しますよ？」

「ん。あと、はい……」

手を差し伸べられる。

ああ、なるほどな。それで良いのか。

シャルの要望がわかったのでシャルの綺麗な手を握る。

勿論、握手をして欲しい。などとは思わない。

「……ほら、行こうぜ」

満面の笑みを浮かべてシャルの手を引っ張る俺。

だが、引っ張るといっても全力ではない。

「う、うん………」

「優哉、水着売り場はこっち」

「ち、ちよつと待て！？何で女の人用の水着売り場に連れてくるん

だよー！」

駅前にあるショッピングモールに到着。週末ということもあってか賑わっている。

そして俺たちは二階の水着売り場にいるわけなんだが、なぜかシャルは俺を女の人用の水着売り場まで引つ張っていった。自分の水着を買ってから集合と思っていたのがとんだ予想外の展開だ。

「優哉は……その…僕の水着姿見たくない？」

「そ、そりゃあ…見たいか見たくないかって聞かれると見たいが…

…」

そう答えるとシャルはパアツと顔を明るくして

俺をずるずると引つ張りながらレディース水着売り場の最深部へと向かう。

「そうだよね。普通はみたいよね……」

「ああ、まあな。仮にも男だしな。」

女の子が水着をきてくれるんだ。そりゃあ見ないとな」

「あ、うん。じゃあこっち……」

未だに顔を赤くしたままシャルは俺の手を引つ張っていく。

シャルにそのまま試着室へと引きずり込まれて……。

「あゝ、シャル。試着室って女性のみ使用可能じゃ……」

「ほ、ほら。水着って実際に着替えてみないと分からないし……ね？」

いや、ね？じゃなくてだな。

「な、なら、俺は外で待って」

「だ、駄目！すぐに着替えるから待ってて！」
強い口調で言うなり、いきなり目の前で上の服を脱ぎ出すシャル。
俺はギョツとして凄い速さで方向転換してシャルに背を向ける。
狭い試着室で美少女と二人きり。しかも、後ろからは服を脱ぐ衣擦
れの音と、
女子特有の甘い香りが流れてくるのだから始末が悪い。

（な、何故こんなことになったんだ！？）

（ううっ、勢いでこんなことしちゃったけど、どうしよう……）

と言うのも、彼女がこんなことをした理由は、
自分と優哉を尾行してきている追跡チーム（香菜・ラウラ）に気付
いたからだ。

何故か、今は自分達から少し離れたところにいる。

（んゝ、二人とも、諦めて帰ってくれないかなあゝ……）

優哉がどう思っただろうが、シャルにとっては意中の相手と二人きり
で外出。

つまりはデートなので、邪魔はされなくなかった。

（で、でも、同じ個室で着替えるのってやりすぎたかな？

……へ、変な子とかわって思われてないよね！？）

やっってから不安になる複雑な乙女心。

その行動力は見事な物だが、少々暴走気味になる傾向がある。
不安を胸に抱きながら背後を窺うと、

優哉はシャルに背を向けて意味もなく視線を試着室の天井に彷徨わ
せていた。

その真っ赤になった耳と頤から、どれだけ困っているのかが分かる。

（優哉も困ってるみたいだし……）

だが、同時に嬉しくもある。

（赤くなってるって事は、僕のこと女の子として見てくれてるって
ことだよな）

そう思うと、自然と頬が緩んでしまふシャルだった。意を固め、下
着も脱いで水着を着る。

「い、いいよ」

「了解……」

優哉が振り返り、水着姿になったシャルを見た。

その視線を感じてシャルは落ち着きなさそうにもじもじしながら、
優哉の感想を今か今かと待ちわびる。

そのワンピースとセパレートの中間のような水着を見て、
照れに照れていた優哉は引きつってはいるが笑顔を浮かべた。

「い、良いんじゃないか？似合ってると思うぜ」

決してその場しのぎで言った訳ではない。

その事が伝わったのか、シャルは嬉しそうな表情を浮かべる。

「そ、そう？だったらこれにするね」

「そりゃ良かった。んじゃ、俺はそう言うことで」

シャルに呼び止められる前に優哉は試着室から出ようとドアを開い
た。

「あつ……」

「えええ？」

「何をしてるんだお前は……」

そこにはキョトンとした表情をしてる山田先生に呆れ顔の織斑千冬がいた。

31話 姉弟水入らず

「水着を買いにですか。でも駄目ですよ、二人で試着室に入るのは。教育的にも感心できません」

「す、すみませんでした……」

山田先生に返す言葉もなく、シャルはぺこぺこ頭を下げている。苦笑いを浮かべる俺の隣りには千冬さんがおり、そして何故か一夏と篤も一緒にいた。

いや、普通に考えたらこいつらも水着を買いにきたってところかな。

「そついや、千冬さんと山田先生は何の買い物に？」

別に学園でもないの、俺は普通に千冬さんに訊ねる。

無言で手にしていた水着を千冬さんは示す。

どうやら教師陣も土壇場で準備するらしい。

……普通に考えたら、準備する時間もなかった。ってところかな。

「そろそろ出てきたらどうだ？」

千冬さんは何もいない物陰に向かって話しかけた。

「そ、そろそろ出ていこうと思ってたのよ」

「た、タイミングを計ってたんですわ」

「……いや、普通に嘘でしょ。それは」

はずだったのだが、セシリア、鈴と香菜の三人が物陰から出てきた。――こいつら、もしかして一夏と篤を追ってきていたのか？

ってか、またしてもいつものメンバーが揃ったな。……いや、ラウラがいないな。

「あ、そう言えば、私ちよつと買い忘れた物があるので行って来ます。」

場所が分からないので鳳さん、オルコットさん、ついてきて下さい。あと、デュノアさんに篠ノ之さんと神崎さんも」

そう言つて、山田先生は有無を言わずに五人を連れて何処かへと行ってしまった。

まあ、香菜のやつはこの行動の意味を知つててついて行つたみたいだけど。

後に残された俺と一夏、千冬さんの間に変な沈黙が数秒流れる。

「ふう、山田先生は余計な気を遣う」

「ですね」

「え？」

「若干一名分かつてないのがいるが……まあいい。一夏、優哉」

「何すか、千冬さん？」

「な、何ですか織斑先生？」

何時も通りに返答する俺だが、

一夏は久しぶりに名前を呼ばれたと言うこともあり、

ギクシャクとした反応を返していた。

その時の一夏の表情がおかしかったので、

千冬は苦笑いし俺は必死で嘖き出すのを堪えていた。

「今は就業中ではないから名前でもいい。私達はこの場では唯の姉弟だろ？」

姉弟水入らずと言うことらしい。姉弟じゃない俺がいるんだけどな。弟みたいなやつってことで良いのかな？

「で、一夏、夜明。どっちの水着が良いと思う？」

そう言つて千冬さんは俺達にハンガーにかけられた水着を二つ見せた。

一つはセクシーな黒い水着、もう一つは機能性を重視した白い水着。どちらもビキニタイプのため、露出度はそれなりに高い。

（普通に黒だな）

俺はそう思つたのだが、一夏は――

「……白かな」といった。

いや、なんでさ、千冬さんには黒が似合つて……、
ああ、そういうことか。

「黒だろ」

真つ二つに別れる俺達の意見。

俺は千冬に言い寄ってくる能なしの男共が、

どついう風に千冬にぶつ飛ばされるのかを想像して唇を歪めた。
勿論、面白そうだな。と思つてだ。

千冬さんは苦笑いを含めながら答えを返す。

「黒の方が」

「いや、白の」

「諦めるよ一夏。

お前が最初に注視してたのは黒の方だって、普通にわかるぞ」

「お前は気に入った方を注意深く見る傾向があるからな、すぐ分かる」

俺と千冬さんに簡単に見抜かれ、少しだけ一夏は落ち込む。

「俺って…分かり易い男なのかな……」

「ま、そうだろうな。」

自分で言うのも何だけど、俺よりはわかりやすい男だと思うぜ」

一夏の落ち込み具合に笑う俺。

なのだが、二人はそんな俺を見て呆れていた。

「どうしたんだ？二人とも」

「……いや、なに。」

デュノア達が報われないな。と思ってな」

ん、シャルがどうかしたのか？つか、達ってどういうことだ？

「まったく弟が余計な心配をするな。」

私はその辺りにいる程度の男になびくと思うか？」

「まったく思いませんね。思い浮かぶのは、

千冬さんがその口説いてきた男をボコボコにしてる様子しか……」

ボコッ

「いてっ!？」

「お前は黙ってる」

つい本心を言ってしまった。

でも、仕方ないじゃないか。……口に出てしまったんだから。

「い、いや。見えないけど……。でも千冬姉、彼氏とか作らねえのか？」

そっという話、一回も聞いたことないけど」

「手のかかる弟達が自立したらな。考える

弟達って……。

俺も手のかかる弟だと思われてるのか。

「で、私にいうのはいいが、お前らはどうなんだ？」

「へっ、俺達？」

「何が？」

何が？……ってお前は自分で振っておいて、自分は答えないつもりか？

「何がも何も、お前らは彼女を作らないのか？」

幸い学園内には腐るほど女はいるし、よりどりみどりだろ」

確かに、可愛い女は沢山いるけどさ。

「そうだな……。優哉にはラウラなんてどうだ？」

色々と問題はあるが、あれで一途なやつだぞ。容姿だって悪くはあ
るまい」

「まあ、確かにそうだけど……」

なんで俺ばかりに言ってくるんだよ。

先に一夏に言ってくれよ。仮にも実の弟だろ？

「それに、キスした仲だろ？」

「……まあ、確かにキスはしたし、ラウラは可愛いけどさ」
俺がそういうと千冬さんは微かに笑っていた。

「あー、はいはい。わかりましたよ。

変な心配はしない。これでいいだろ？」

次に標的になるのは自分だ。

と一夏は直感で思ったのか、直ぐに話をやめようとする。

「ああ、それでいい」

最後にニヤリとした笑みを浮かべてから、千冬さんはレジへと向かっていく。

32話 臨海学校、開始！！

「海っ！！見えたあっ！！」

トンネルを抜けたバスの中でクラスの子が声をあげる。

臨海学校初日。海にふさわしいほどの快晴だ。太陽に光が海に反射して輝いている。

それを見て、更にテンションをあげる女子達。

そんな中、俺は……………

「……………はあ、ついにこの日が来てしまったか」

軽く憂鬱モードに入っていた。

別に海が嫌いなわけではないし、臨海学校が嫌いなわけでもない。だが、俺は気分がのらなかった。

「優哉、なんかテンションが低いけど、どうしたの？」

俺と違ってテンションが高いシャル。

何故、こいつのテンションが高いのかは何となくわかる。理由はアレだ。

左手首に着けているブレスレット……………まあ、簡単に説明すると俺がシャルに買ったものだ。

何故か知らないが、それを買って渡した瞬間、テンションがあがったんだよな。

ホント、なんで上がったのかは知らないけど。

「……………いや、別になんでもねえよ」

「？」

隣に座っているシャルから顔を逸らし、外の景色を見る。

それにしても、海か。

……何も起こらないと信じてテンションあげるか。

「優哉さんは海が嫌いなんですの？」

通路を挟んで向こう側に座っているセシリアが俺に質問してきた。
ああ、やっぱりテンションが低かったらそう思うよな。

「いや、別に嫌いとかではないぞ。

ただ単にみんなのテンションについていけなくて……って、ラウラ？」

「……………」

セシリアの隣でずっと黙り込んでいるラウラ。

そういえば今日、一言も話してないな。

顔色が悪いわけじゃないから体調不良ってわけじゃないみたいたが、さつきからなぜか周囲を警戒するようにキョロキョロと見ている。

「ラウラ？大丈夫か……？もしかしてバスに酔ったのか」

話しかけてもまったく反応がない。

「おい、ラウラ。おい」

俺は席を立ち上がり彼女の顔を覗き込む。

「！？ なっ、なんっ……………なんだっ！ち、近いぞ！ 馬鹿者！！」
「ぬあっ」

鼻を思いっきり押し返されて、変な声を上げながら退却する。
それからラウラは顔を赤くしながら、息を荒くしていた。……風邪
か？

「そろそろ着くぞ。全員ちゃんと席に座れ」
千冬さんの言葉で全員がさっとそれに従う。
その言葉通りすぐに旅館に到着し、
四台のバスからES学園の一年生がぞろぞろと出てきてそして整列
した。

「それでは、ここが今日から三日間お世話になる花月荘だ。
全員、従業員の仕事を増やさないように注意しろ」
「「「よろしくお願いしまーす」」」
「はい、こちらこそ。今年の一年生も元気があってよろしいですね」
千冬さんの言葉の後、みんなが挨拶をすると着物姿の女将さんが丁
寧なお辞儀をした。

「はい、こちらこそ。
今年の一年生も元気があってよろしいですね。あら、こちらが噂の
……」

俺と一夏を見てから千冬さんに伺っている。

ああ、噂っていうのは、IS操縦者（男）ってやつか。

「ええ、まあ。 今年は男子が二人いるせいで浴場分けが難しくな
って申し訳ありません」

「いえいえ、お客様のご要望にお答えするのも

こちらの仕事なので気になさらないでくださいな。 それよりいい男
の子ではありませんか」

「ええ、今回初めての男子となります。 お前ら挨拶をしろ」

「初めまして、織斑一夏です」

「あら、弟さんですよね？」

「……まあ出来ない弟ですがね」

「うふふ、千冬さんは弟さんには厳しいのね

すっかりしてるように見えるのに。 それでそちらのかたは？」

女将さんが俺の方へ視線を向け、聞いてきたので俺は答える。

「黒月優哉です。 短い間ですがよろしく願います」

「あらあら、これはご丁寧にありがとうございます」

それにしてもホント、千冬さんから聞いてなかったら

男だと信じられないくらい綺麗な顔と髪ね」

「ありがとうございます」

普段なら女みたいだと言われてるようで怒るのだが、

今回は悪気ないみたいだったので怒るのはやめる。

「ね、ね、ねー。おりむ〜」

この独特な一夏の呼び方は、のほほんさんだな。

「おりむーの部屋どこ〜？ 一覽に書いて無かったー。遊びに行くから教えて〜」

「いや、俺も知らない。廊下にも寝るんじゃないの？」

「わー、それはいいね〜。私もそうしようかなー。あー、床つめたーいって〜」

のほほんさんならやりかねないな。

実際にやってたら、俺は止めるけどな。

「織斑、黒月、お前らの部屋はこっちだ。ついてこい」

「あ、はい」

「ういーす」

のほほんさんが一夏に寝る場所を教える前に、
千冬さんから呼び出しを喰らう。……俺ごと。

「教員用の隣？」

教員用の隣の部屋だった。

まあ、なんでこうしないといけないのか大体の予想はつくがな。

「最初はお前らだけでの部屋を用意していたのだが、

それをすれば確実に消灯時間を過ぎた馬鹿どもが押し寄せる事を考えて、

私の部屋の隣と言っわけだ。ちなみに山田先生は上の教員用を使っている、
簡単に言えば私がこの理由は貴様らのボディガードだと思え、わかったな？」

「了解」

「ういっす」

「それでは部屋の確認が終了した、お前ら今日一日遊んで来い！」

「了解」

こうして俺らは旅館を出て海にでる。

33話 天災

俺らが旅館を出て海に出るために、着替えをするための別館に向かおうとしていると、ナニカをガン見している箒に出会った。

「おーい箒、どうしかしたか？」

と、俺が声をかけると箒はこちらを見てきた。

「なあ、これって」

そして箒の視線があつた場所を見ると、

「私は知らん」

箒はそう言つと更衣室のほうに向かつていった。

ちなみに視線の先にあつたのは、

「ウサ耳だなこれ……」

一夏が指でさしながら言っている、間違いなくこれはあの人のものだろうな。

しかもご丁寧に『引っ張ってください』とこう明記してある。

こんなの明記されると、本当に引っ張りたくなっちゃうよな。でも、これを引っ張るとめんどくさくなるし……。

「おい、一夏。そんなの無視して……………」
「えっ!?!」

時、既に遅し。

一夏はウサ耳を引っ張ってしまっていた。

「一夏、避ける!」

俺の言葉と同時に空からナニカが降ってくる。

ま、降ってくるのは、ウサ耳装備の天災だろうけどな。

…………面倒くさくなりそうだ。

「あつはつは!!引っかったね、いつくん!!」

俺の目の前では俺の言葉が聞こえなかったのか、尻餅をついている一夏がいた。

そして謎の飛行物体——巨大なにんじんから出てきたのは、

うさ耳装備の天災こと、篠ノ之 束だった。

——ホント、もっと普通に登場してくれないかな?

「やー、前はほら、ミサイルで飛んでたら危うくどこかの偵察機に撃墜されそうになったからね。

私は学習する生き物なんだよ。ぶいぶい」

そりゃあミサイルで飛んでたら撃墜するわ、普通に。

「お、お久しぶりです、束さん」

「うんうん。おひさだね。本当に久しいねー。ユークンもおひさ」

「そうですね。お久しぶりです」

「うんうん、本当に久しいねー。ところで二人とも、篝ちゃんはどう

こかな？

さっきまで一緒だったよね？トイレ？」

きよろきよろと周りを見渡す博士。その頭の上のウサミミもそれに合わせて動く。

「えつと……………」

東さんの質問に一夏は答えられないでいた。

まあ、確かにその気持ちはわかるぜ。

『あなたを避けていきました』なんて言えねえもんな。

「俺達にもわかりません。

そこにあっ たうさ耳に気を取られた隙にいらなくなつてたんですから」

「そつかーまあ、この私が開発した『箒ちゃん探知機』ですぐ見つかるよ。

じゃあね、いつくん、ユークン。またあとでね！」

それだけ言うともものすごい速さで走り去っていく。

が、俺が気にしていたのはそんなことじゃなかった。

『じゃあね、いつくん、ユークン。またあとでね』

また後で……………」

これが意味するのは、また天災と会うということ。

そしてあの人と会うということが意味するのは、

また事件が起こる可能性があるということ。

(……………あの人、また何かしでかすつもりなのか?)

「……何だっただ、一体」

「……今は気にしないほうがいいかもな。とっとと着替えに行こうぜ」

「あ、ああ。そうだな」

束さんの最後に言った言葉が気になるが、今は気にしないことにしよう。

俺たちは男子用に割り振られた更衣室に向けて再び歩を進めた。

34話 オーシャンズ・イレブン

更衣室で水着に着替え、海に向かう。

一夏は黒のトランクスタイプの水着で、

俺は一夏の水着の色違いVer.だ。ちなみに色は紺色。

「あ、織斑くんだ！」

「黒月君も一緒だー！」

「う、うそっ！わ、私の水着変じゃないよね！？大丈夫だよね！？」

「わ、わゝ。体かっこいい。鍛えてるね」

そうか？自分ではあんまりわからないんだが、
ってか、体かっこいいってどういう意味だ？

「あとでビーチバレーしようよ」

「ああ、そうだな。時間があればいいぜ」

ビーチバレーって砂浜でやるバレーボールだよな。

なんか楽しそうだし良いかな。

……ほとんど女子だから手加減はしたほうが良いかも知れないけど。

「さて、と。準備運動も終わったし、そろそろ泳ぎに行くか」

「そうだな。海で泳ぐのは久しぶりだし楽しみだな」

準備運動を終え、いざ海に向かって歩き出す。のだが――

「い、ち、かゝゝゝっ！」

いきなり鈴が一夏に飛び乗って来た。

鈴って猫みたいだな。気まぐれなところや身軽なところとかが。

「お、おい！ いきなり乗っかるなって！」

「いいじゃない、別に」

「じゃ、俺は他のところ行ってくるわ」

「ちょ、優哉！俺を見捨てていくのか！？」

「……じゃあな！」

後ろから一夏の声が聞こえるが、聞こえないフリをしてその場を立ち去る。

「あ、優哉。ここにいたんだ」

不意に呼ばれたので、声の方向を向いてみるとそこにはシャルと……。

「な、何だそいつは？ 新手のお化けか何かか？」

バスタオル数枚で頭から膝までを隠した奇妙奇天烈な存在がいた。

「ほら、出てきなつて。大丈夫だから」

「だ、大丈夫かどうかは私が決める……」

あれ？今の声はもしかしてラウラか？

それにしてもいつもより弱々しい声だな。

シャルはシャルで何か説得をしようとしてるし。

「ほーら、せつかく水着を着たんだから、優哉に見てもらわないと」

「し、しかしだな。私にも心の準備という物が……」

そういえばこいつらって同室になったんだっとな。
だからこんなに仲が良いと。

ってか、シャルって誰とでも仲良くなれるから凄いやな。

先月、ライバルとして戦ったのに、こんなに仲良くなってるし。

「ふん。二人が出てこないんなら僕、優哉と遊びに行こうかな」
「な、なに？」

「うん、そうしょ。優哉、行こっ」

そっうといきなり、手を引っ張られる。

ふとシャルの顔を見てみると、満面の笑みだった。

といつても、ただ単に笑ってるだけじゃなくて、

悪戯が成功したときみたいな感じの笑みだ。

「ま、待て！わ、私も行こっ！！」

「その格好のまんまで？」

「ええい！ 脱げばいいんだろっ脱げば！」

半ば、ではなく完全にやけくそでラウラはバスタオルをかなぐり捨ててる。

そして、ラウラの水着姿が陽光の下にさらけ出された。

「わ、笑いたければ笑えばいい」

ラウラは、ふんだんにレースがあしらわれた黒の水着を着ていた。

一見、大人の下着に見えなくもない。

そして髪は普段のように伸ばしたままではなく、鈴のように頭の両サイドで纏めている。

「……うん、普通に似合ってると思うけど」

「なっ……」

「ラウラってツインテールにすると、印象変わるんだな。」

……可愛いよ、ラウラ」

「……っ／＼／＼」

俺がそういうと顔を真っ赤にして、ラウラがぶっ倒れた。

「あーあ、また出ちゃったよ。」

優哉の天然女誑しモードが……」

ラウラがぶっ倒れたと同時に、香菜が俺の側まできて呟く。

香菜が着ている水着は、オレンジのビキニなのだが、

スカートみたいなのをつけていた。スカートの色は薄いオレンジだった。

「……勝手に変な名前をつけるな!!」

そして俺は天然でも女誑しでもねえよ!!」

「……えっ……」

あれ?なんで二人ともそんな顔をしてるんだ?

『この子、本気で言ってるの?バカなの?』的な表情を。

「あー、今はそうじゃねえ。ラウラ、大丈夫か?」

「きゆうううう……」

あ、これは大丈夫じゃないパターンだね。

どっか涼しい場所にでも連れていくか。

「……じゃ、俺はラウラを涼しい場所に寝かしに行ってくる」
ラウラをお姫様抱っこする。

「こいつ、軽いな。本当に飯食ってんのか？」

「行つてらっしゃい」

シャルと香菜に見送られ、俺は走り出す。

が、その前に言っておかないといけない言葉があつたので、走るのをやめ、一度だけ振り向く。

「二人の水着も可愛いよ。じゃあ、また後でな」

二人の水着の感想を言っていないことに気づき、それだけ言つて俺は走り出す。

「……ホント、優哉はいきなりすぎるよ」

「だよな。さすがの僕でもこれはビックリするよ」

後に残つたのは、顔を真っ赤にする二人の乙女だった。

オリヒロイン設定（前書き）

前に投稿した設定の追加Verです。

人気ヒロイン、香菜ちゃんのイラスト付きです!!！

オリヒロイン設定

かんざきかな
神崎香菜

性別 女

容姿 黒髪セミロング。七三分けにしてヘアピンで止めている。
体つきは良いとは言えない。良くいってスレンダー。
悪くいうと貧ny……………。

性格 優哉とは正反対で、家事全般がダメダメなズボラ。

補足 神様に送られた転生者。

原作情報は6巻ぐらいまで知ってる設定。

優哉に恋心を抱いている。キツカケは転生前の出来事（通り魔事件）。

専用ISは【不死鳥】

> i 3 2 4 6 3 — 3 5 3 3 <

フェニックス
【不死鳥】

神崎香奈が作った第3世代型IS。

待機状態は

外見は【不死鳥】の名の通り、ほとんど真っ赤に染まっている。
装甲の数は多くもなく少なくもなく標準的。

そして背中に翼みたいなのが、2枚ずつ対になっている。

背中の翼は少し橙だいだいがかつてる。

特徴

黒月 優哉が手をつけるまでは遠距離特化型だったのだが、
手をつけてからは近距離もいけるようになった。つまりは万能型。

使用武器

・紅くれない

血で染まっているのかと疑ってもおかしくないぐらい全てが真っ赤
な刀剣。

・緋龍ひりゅう

ロングレンジのビームライフル。

外見は、『ゴッドイーターバーストGEB』のステラスウォームを赤くした感じ。

・流星群りゅうせいぐん

実弾式のマシンガン。

色は赤で、黒のラインが入ってる。

単一使用能力

……後ほど公開。予定では原作3巻辺りかな。

オリヒロイン設定（後書き）

これが可愛いと思った方、

感想をよろしく願います！！

イラストを描いてくれた友達に見せるので……。

35話 夕食

楽しい時間というのは簡単に過ぎていき。既に時間は夜の7時。浴衣に着替えた俺達、1年生共は大宴会場で豪華な夕飯を楽しんでいた。

「うん、美味い!!」

昼も夜も刺身だなんて、豪勢だよな」

「そうだね。さすがIS学園だよな」

俺の隣でシャルが刺身を食べながら言う。

ちなみに俺もだけど、隣のシャルも浴衣姿だ。

なんでも、この旅館では『お食事中は浴衣姿で』という決まりがあるらしい。

なので俺達はソレに従って浴衣姿なのだが、普通は禁止することじゃないのか？

と思うのは俺だけだろうか？

「う、うう……。私の嫌いな山菜がこんなに」

これまた俺の隣で、呻く香菜。

ああ、そっかこいつの嫌いな食べ物って山菜だったかな。

……美味しいのにな。

「一回、食ってみろって。美味しいぜ？」

「やだ。だって美味しくないもん」

「そんなこと言ってみ。」

旅館にも迷惑だし、織斑先生の拳が待ってるぞ」
俺がそういうと香菜はまたしても呻きだした。

……仕方がない。

「香菜、あーん」

「へっ？」

山菜を箸で摘み、香菜の口元へ持つていく。

「はい、あーん」

「……あ、あーん／＼」

頬を赤くしながら口を開ける香菜。

ま、恥ずかしいかも知れないけど、

これだけは食べて欲しいからな。本当に美味しいし。

「あ、美味しい」

「だろっ？」

だからお前の嫌いって言うのも、ただの食わず嫌いなんだよ」

うん、やっぱりカワハギは美味しいな。

しかもこのカワハギ、キモ付きだし。

どんだけ高級食材を使っただよ。ってツツコミたいわ。

そんな風に色々と考えながら、食べていると、

頬をさつきよりも赤くした香菜の顔があった。

ま、いいや。

今は食うことだけに必死になろう。

「ふー、いい湯だったなー」

豪華な夕食のあとに露天風呂。

それも俺一人の貸切だったこともあり、かなり気分がいい。
そんな感じでブラブラと歩いていると、前から一夏が歩いてくるのが見えた。

「よっ、一夏。どうした？」

「いや、さっき千冬姉のマッサージをしてさ、
また汗を掻いたからさ。また風呂に入ろうかと
ふーん、また汗を掻いた、ね。」

「なら、俺ももう一回、入ろうかな？」

「この露天風呂なら、ほとんど貸切だし」

「おお、じゃあ一緒に入ろうぜ」

何故か俺が入ると言った途端、テンションがあがる一夏。

もしかして、こいつ…………

「…………これなのか？」

「ちげえよ!!」

だよな。そうだったら、俺がかなり引くし。

36話 ガールズトーク

一夏と優哉の二人が露天風呂前ではしゃいでた頃。
とある部屋で、ガールズトークが始まるうとしていた。

「ほれ、ラムネとオレンジとスポーツドリンクにコーヒー、あと紅茶とコーラだ。」

それぞれの飲み物がいいやつは、各人で交換しろ」

千冬は旅館に備え付けられている冷蔵庫から飲み物を取り出して6人に渡す。

順番に筭、シャルロット、鈴、ラウラ、セシリア、香菜だ。
皆してこの飲み物で良かったのか、交換することはなかった。

「い、いただきます」

6人がそれぞれの飲み物を飲んだのを確認してから、
千冬は冷蔵庫からビールを取り出し、ビールを飲む

「んぐっ、んぐっ……プハッ。それじゃ聞くぞお前ら、あいつらの
何処が良いいんだ？」

あいつら。誰と誰を指すかは容易に想像できた。一夏と優哉しかい

ない。

「わ、私は別に……昔よりも、その……」
ラムネを傾けながら言う篤。

「腐れ縁なだけだし、そんな深い意味は無いし……」
続いてスポーツドリンクのフチをなぞりながら言う鈴音。

「く、クラス代表として、私を下した者としてしっかりして欲しい
だけですわ」
と、セシリアが言う。

「ふむ、そうか。では、そう一夏に伝えておこう」

「「「言わなくていいです!!」」」
そんな素直になれない三人をニヤニヤ笑いながら見た後、
千冬はビールを飲みながら、未だに黙っている三人に視線を向ける。

「ぼ、僕……私は……、優しいところ……です」
ぼつりと呟くように言うシャルだが、小さな声だったが、その言葉
の中には真摯な響きがあった。

「確かに優しいが。あいつは誰にでも優しいぞ」

「そう……ですね。そこはちょっと悔しいかなあ」

あはは、と笑いながら、シャルは熱くなった頬を冷ますために手団
扇で風を送った。

「で、お前は？」

さつきから一言も発していないラウラに千冬は話を振る。
そしていきなり千冬に話を振られたからか、ラウラはビクッと身体を竦ませながらも言葉を紡ぎ出した。

「つ、強いところでしょうか……」

「いや、弱いだろ？」

一夏に比べたら強いかも知れんが、と付け加える千冬。

「つ、強いです。少なくとも私よりは」

ラウラの答えに千冬はそうかねえ……。と呟きながら、二本目の缶ビールを開ける。

「で、最後はお前だが……」

「――敢えていうとすれば、優哉の性格でしょうか」

香菜の答えにほう……。と関心すう千冬。

「優哉の自分に関わる全ての者を命懸けで助けようとする性格ですね。」

実質、優哉に助けられた人もいるでしょう？最近では、ラウラとか？」

「あ、ああ、そうだな」

「アレだって本当は助けなくても良かったはずですよ？」

あの前にはセシリアや鈴に重症レベルまで、ケガをさせたんですから。

だけど、そんな敵だったはずなのに優哉は助けた。

……私は、そんな優哉の性格が好きなんですよ」

誰もが、香菜の言葉を真剣に聞いていた。

一夏のことが好きな筈、鈴、セシリアや教師の千冬でさえも。

「まっ、優哉の一夏に負けなくらいの鈍感振りが偶に傷ですけどね」

「ははっ、と香菜は苦笑いをする。

「私が優哉のことが好きな理由は以上です」

「……まさか、お前がそこまで愛していたとはな。

まあ、そんな感じに思われているあいつらだが、家事全般は優秀、料理もうまい。

「ーというわけで、あいつらと付き合える女は幸せだということだ。どうだ？欲しいか？」

「えっ！？と全員が顔をあげる。

「く、くれるんですか？」

「やるかバカ」

「ええーつと心の中で突っ込む6人。

「女ならな、奪うつもりでいかなくてどうする。

自分を磨けよ、ガキども」

「実に楽しそうな表情で言う千冬。

37話 二日目っ！！

校外実習二日目。今日は午前から夜まで丸一日ISの各種装備試験運用とデータ取りを行う。

特に専用機持ちは大量の装備が待っているから大変だ。

といっても、俺と一夏は試験武装がないので、

他の人のサポートするぐらいしかないけどね。

「ようやく全員集まったか。——おい、遅刻者」

「は、はいっ」

千冬さんに呼ばれて身をすくませたのは意外にもラウラだった。

寝坊したらしく5分遅れてやってきたのだ。

珍しいな、ラウラが寝坊なんて。

「そうだな、ISのコア・ネットワークについて説明してみろ」

「は、はい。ISのコアはそれぞれが相互情報交換のためのデータ通信ネットワークを持っています。

これは元々広大な宇宙空間における相互位置情報交換のために設けられたもので、

現在はオープン・チャネルとプライベート・チャネルによる操縦者会話など、通信に使われています。

それ以外にも『シェアリング非限定情報共有』をコア同士が各自に行うことで、様々な情報を自己進化として吸収しているということが近年の研究でわかりました。

これらは製作者の篠ノ之博士が自己発達の一環として無制限展開を許可したため、

現在も進化の途中であり、全容は掴めていないとのことですよ」

「さすがに優秀だな。遅刻の件はこれで許してやろう」

そう言われて息を吐くラウラ。よかったといわんばかりの息を吐き

ようだ。

おそらくドイツ教官に織斑先生の恐ろしさを味わったのだろっな。

「さて、それでは各班ごとに振り分けられたISの装備試験を行うように。」

専用機持ちは専用パーツのテストだ。

織斑、黒月は他の者の補助に回れ。以上だ。全員、迅速に行え」
生徒全員が返事をする。さすがに一年生全員が並んでいるのでかなりの人数だ。

ちなみにここはIS試験用のビーチ。

四方を切り立った崖に囲まれている、ドームのようなところだ。

「ああ、篠ノ之。お前はちょっとこっちに来い」

「はい」

「お前には今日から専用——」

「ちーちゃ~~~~~ん!!!!」

砂埃を上げながら人影が走ってくる。無茶苦茶速い。その人物が——

「……束」

天災だった。まあ、来るんじゃないかとは思ってたけど、本当に来るとは……ね。

「やあやあ！ 会いたかったよ、ちーちゃん！

さあ、ハグハグしよう！ 愛を確かめ——ぶへっ」

飛びかかってきた束さんを片手で掴む。それも顔面。加減もないアイアンクローだ。

ってか、女同士でハグハグって百合ですか？

とふと思ってしまった俺は悪くない。……はず。

「うるさいぞ、束」

「ぐぬぬぬ……相変わらず容赦のないアイアンクローだねっ」

千冬さんのアイアンクローを抜け出し、そのまま束さんは箒の方を向く。

「やあ！」

「……どうも」

「えへへ、久しぶりだね。こうして会うのは何年ぶりかなあ。おつきくなつたね、箒ちゃん。特におっぱいが」

その瞬間、箒の持っていた木刀の鞘が束さんの脳天に直撃した。うわあ、あれは痛い。

「殴りますよ」

「な、殴ってから言つたあ……」

そんな姉妹のやり取りを、周りがぼかんとして見ている。

織斑姉弟はまた始まつたと言つたような表情で眺めている。

たぶん俺も同じような顔をしてるんだろうね。

「え、えつと、この合宿では関係者以外——」

「んん？ 奇妙奇天烈なことを言うね。」

ISの関係者というなら、一番はこの私をおいて他にはいないよ」

「えつ、あつ、はいっ。そ、そうですね……」

山田先生轟沈。あの人には基本的に何を言っても無駄だ。好きにさせておくしかない。

「おい束。自己紹介くらいしろ。うちの生徒たちが困っている」

「えー、面倒くさいなあ。私が天才の束さんだよ、はろー。終わり」
めっちゃ面倒そうにそれだけ言った。

「束さん。もう少しちゃんとした方が……」

「えー、いくらいつくんの頼みでもそれが駄目だよー。面倒だもん」
一夏が束さんに言うが、いくら一夏でも束さんを他人と
関わらせるようなことはできなかったようだ。しょうがないといえ
ばしょうがないか。

「——で、束さん。こんなことをするためだけに

ここまで来たわけではないでしょう？ 一体どうしたんですか？」

「今日はお届けもがあつて来たんだー」

「お届けもの？」

「うん！ やつと完成したからね」

やつと完成？ そういえばさつき箒が千冬さんに呼ばれてたな。

…… ってことは、もしかして？

「なら早速。——さあ、大空をご覧あれ！」

束さんがびしっ、と大空を指差す。

するとその空から何か物体が落ちてくるのが見えた。

…… まさか、またにんじんじゃねえだろうな？

空から落ちてきた大きな物体は巨大な金属の箱だった。

次の瞬間、正面の壁が倒れて中身が見える。

「じゃじゃーん！ これぞ箒ちゃん専用機こと『紅椿』！

全スペックが現行ISを上回る束さんお手製ISだよ！」

真紅の装甲の機体——紅椿は、

束さんの言葉に答えるように動作アームによって外に出てくる。

「さあ！箒ちゃん、今からフィッティングとパーソナライズをはじめようか！

私が補佐するからすぐ終わるよん」

「……それでは、頼みます」

「堅いよ」。実の姉妹なんだし、こうもつとキャッチーな呼び方で

——

「はやく、はじめましょう」

箒は束さんの言葉を無視して行動を促す。

少しはこの人の言葉を聞いてやろうぜ？

フィッティングの最中、

「あの専用機って篠ノ之さんがもらえるの……身内ってだけで」

「だよねえ。なんかずるいよねえ」

ふと群衆の中からそんな声が聞こえた。それに束さんが反応する。

「おやおや、歴史の勉強をしたことがないのかな？」

有史以来、世界が平等であったことなど一度もないよ」

ピンポイントに指摘を受けた女子が気まずそうに作業に戻っていく。
まったく、面倒なやつらだ。

……平等という言葉をいうなら、男女も平等にしろつつうんだよ。

「あとは自動処理に任せればパーソナライズが終わるね。

あ、いっくん、白式見せて。東さんは興味津々なのだよー」

「え、あ、はい」

一夏が展開した白式の装甲に東さんがコードを刺す。

そして現れたディスプレイを見ながら東さんが言う。

「ん……不思議なフラグメントマップを構築してるね。

なんだろう？見たことないパターン。いっくんが男の子だからかな？」

ちなみにフラグメントマップというのは、ISが独自に成長していくモノだそう。

まっ、人間でいう遺伝子みたいなもんだ。

「東さん、そのことなんだけど、

どうして男の俺や優哉がISを使えるんですか？」

「ん？ん……どうしてだろうね。私のもさっぱりだよ。

ナノ単位まで分解すればわかる気がするんだけど、していい？」

おそらくその分解対象に俺も含まれてるんだだろうな。

「いい訳ないでしょ……」

「にやはは、そういうと思ったよん。

まあ、わかんないならわかんないでいいけどねー。

そもそもISって自己進化するように作ったし、

こういうこともあるよ。あっはっはっ

そういうこともあるのか？

なんかシツクリこないっつか、説明になってないような気がするけど。

「ちなみに、後付装備ができないのはなんでですか？」

「そりゃ、私がそう設定したからだよん」

「え、ええっ!? 白式って束さんが作ったんですか!？」

一夏が束さんに尋ねる。それに束さんは表情を崩すことなく答える。
「うん、そーだよ。っていつても欠陥機としてポイされていたのを
もらって動くようにいじっただけだけどねー。」

でもそのおかげで第一形態から単一仕様能力が使えるでしょ？

超便利、やったぜブイ。でねー、なんかねー、

元々そういう機体らしいよ？日本が開発してたのは」

「馬鹿たれ。機密事項をぺらぺらバラすな」

千冬さんの打撃が束さんの頭に直撃する。もちろん手加減オフで。

「いたた。はゝ、ちーちゃんの愛情表現は今も昔も過激だねゝ」

「やかましい」

さらにもう一発叩かれる。

あーあ、余計なことを鬼教官……もとい鬼教師にいうからそんなこ
とに。

「あ、あのっ！篠ノ之博士のご高名はかねがね承っておりますっ。
もしよろしければ私のISを見ていただけないでしょうか!？」
誰かと思ったらセシリアだった。

束さんを前に興奮しているのか、目が輝いている。だが――

「はあ？ 誰だよ君は。金髪は私の知り合いにいないんだよ。
そもそも今は箒ちゃんとかーちゃんといっくんとユークんと
数年ぶりの再会なんだよ。そういうシーンなんだよ。」

どういう了見で君はしゃしゃり出て来てるのか理解不能だよ。って
いうか誰だよ君は」

突然の冷たい言葉。言葉だけではなく視線や口調もかなり冷たい。

「え、あの……」

「うるさいなあ。あっちいきなよ」

「う……」

少し涙目でセシリアが引き下がる。

束さんは、一夏と千冬、篠ノ之、俺ぐらいしか区別がつかないらしい。

あとは両親かな、と言っていたが本当にそれ以外の人間にはこんな感じである。

あ、ちなみに昔から香菜とは会わなかったらしい。
というか、香菜が会おうとしなかったただけだ。

「ふー、へんな金髪だった。外国人は図々しくて嫌いだよ。

やつぱ日本人だよな。日本人さいこー。まあ、日本人でもどうでもいいんだけどね。

第ちゃんとちーちゃんといっくんとユークン以外は」

「あと、おじさんとおばさんでしょ」

「ん？ んー……まあ、そうだね」

なんか妙に引つかかる言い方だけど、気にしないほうがいいだろう。

「まあまあ、そんなことはどうでもいいじゃない。

ところでいっくんさあー、白式改造してあげようか？」

「え。えーっと、どんな改造ですか？」

「うむ。執事の格好になるってどうかな？」

いっくんには前々から燕尾服が似合うと思ってるんだけど、もしくはメイド服」

うん、良いんじゃないか？

一夏のメイド服姿………ぷぷつ、やべえ超似合ってる。

想像してしまい、笑ってしまう俺。

そしてそんな俺を見ながら一夏は――

「いいです。それをするならば、優哉のISのほうが」

俺を生贄にしやがった。てめえ、あとで覚えとけよ。

「おおつ、それもいいね。」

ユークンのメイド服姿……うんうん、絶対似合ってるよ」

「結構です!!」

「あー……ごほんごほん」

と、箒が咳払いをしながら話に入ってくる。

そんなことせずに普通に入ってきたら良いのに。

束さんなら絶対にお前に反応するっつーの。

「こっちはまだ終わらないのですか？」

「んー、もう終わるよー。じゃ、試運転もかねて飛んでみてよ。」

箒ちゃんのイメージ通りに動くはずだよ」

「ええ。それでは試してみます」

箒が意識を集中させた瞬間、紅椿は凄まじい速度で飛翔した。

「おおつ」

大量の砂煙が舞い上がる中、紅椿の飛翔を視認できたのは俺だけだった。

上空二百メートルほどの所で箒が滑空していると、オープン・チャネルで束さんが語りかけた。

「どうどう？ 箒ちゃんが思った以上に動くでしょ？」

「え、ええ……、まあ」

「じゃあ刀使ってみてよー。右のが『雨月』、左のが『空裂』ね」

束さんの台詞に応えるように、箒は流れるような動作で腰から二本の刀を抜き取る。

「雨月は対単一を想定した武装でね、
打突に合わせて刃部分からエネルギー刃を連射して敵を蜂の巣に！
する武器だよ」

束さんの説明を受け、箒は雨月を突きの構えにした。
仮装の相手を目の前に創り上げ、その敵を一撃で貫き通す。
すると、雨月が突きを放った周囲に幾つもの赤い球体が出現し、
空をゆつくりと流れていく雲にたくさんの穴を穿った。

「続いて空裂ねえ。こっちは対集団の武装だよ。
斬撃に合わせて攻性エネルギーをぶつけるんだよ。
そいじゃこいつを打ち落としてみてね」
ポチツとな、と束さんは十六連装ミサイルポットをコール。
形を成した瞬間に全てのミサイルを吐き出させる。

「箒！」

一夏が叫ぶが、それは要らぬ心配だった。

「……やれる！ この紅椿なら！」

右脇下に構えた空裂を一回転するように振り抜き、
赤い帯状のレーザーを展開させる。

箒の周囲に帯状に広がったエネルギーは全てのミサイルを撃墜した。

「すげえ……」

全員がその圧倒的なスペックに驚き、そして魅了され言葉を失ってしまう。

……俺と香菜と千冬さん以外は、ね。

「全員、注目！」

不意に千冬さんの声が聞こえてくる。何かと思い、先生の方を向く。

「現時刻よりIS学園教員は特殊任務行動へと移る。

今日のテスト稼働は中止。各班、ISを片付けて旅館に戻れ。連絡があるまで各自室内待機すること。

以後、許可なく室内から出た者は我々で拘束する！以上だ！」

「……はっ、はいっ！」

全員が慌てて動きはじめる。なんだ？

特殊任務行動って非常事態と考えるのが自然か。

「専用機持ちは全員集合しろ！」

織斑、黒月、神崎、オルコット、デュノア、ボーデヴィツヒ、鳳！
——それと、篠ノ之も来い」

「はい！」

篤が気合の入った返事をする。

専用機持ち全員を集めるなんて一体何なんだ。

37話 二日目っ!! (後書き)

イラストを描いてくださった人が
歌ってみたそうです。

詳しくはこちらで



[http://www.nicovideo.jp/watch/
sm15850613](http://www.nicovideo.jp/watch/sm15850613)

38話 作戦会議（前書き）

香菜ちゃんのbotを作ってみました

←

http://twitter.com/#!/kannzka_kana_bot

まだ、作ったばかりなので、

未完成ですが、ある程度のコミュニケーションは
取ることができますので、是非、フォローしてくださいな。

ツイッターをやっていない人は、

これを機にツイッターをやるのもいいかもww

38話 作戦会議

「全員、揃ったな。では現状を説明する」

突然、千冬さんの指示によって訓練は中止になる。

それと同時にほとんどの生徒が部屋での待機を命じられているが、俺達専用機持ちは、本来は宴会に使う大座敷に集合させられている。教師陣と俺達の中心に空中投影のディスプレイが浮かび上がった。た。

「二時間前、ハワイ沖で試験稼働にあったアメリカ、イスラエルの共同開発の

第三世代型軍用IS、『シルバリオ・ゴスベル銀の福音』が

軍の制御下を離れて暴走、監視空域より離脱したとの連絡があった」
軍用ISか……。

「それは、今回の戦いはかなりヤバいことになりそうだな。

壁にもたれながらそんなことを思う、ふと一夏の方を見てみると。

一夏は面食らってポカンとしてしまっていた。

それ以外のメンツは厳しい表情を浮かべていた。……箒以外、ただけどな。

特にラウラと香菜の二人は真剣な表情を浮かべていた。

「その後、衛星による追跡の結果、

福音はここから二キロ先の空域を通過することが分かった。

予想接触時間は五十分後、

学園上層部の通達により、我々がこの事態に対処することとなった」
冷静にそして、淡々と続く千冬さんの言葉。

「教員は学園の訓練機を使用して空域及び海域の封鎖を行う。

よって、今作戦の要は専用機持ちに担当して貰う」

つまりは俺達、専用機持ちを使って福音を倒してもらおうと考えてるんだろうな。

学園上層部は……。

確かに学園の教師と言えど、訓練機では軍用ISに対抗できない。
まあ、そう考えると、俺達に回ってくるのは当然の事だが……、
なんか上層部の犬みたいな扱いが何か嫌だな。

「それでは作戦会議を始める。意見があるものは挙手するように」
「はい」

最初に手を上げたのはセシリアだった。

「目標ISの詳細なスペックデータを要求します」

「わかった。ただし、これらは二ヶ国の最重要軍事機密だ。

決して口外するな。情報が漏洩した場合、

諸君には査問委員会による裁判と最低でも二年の監視がつけられる」
「了解しました」

開示されたデータを見ながら代表候補生の面々が相談をはじめめる。

「広域殲滅を目的とした特殊射撃型

……わたくしのISと同じく、オールレンジ攻撃を行えるようですね」

「攻撃と機動の両方に特化した機体ね。厄介だわ。

しかも、スペック上ではあたしの甲龍を上回ってるから、向こうの方が有利……」

「この特殊武装が曲者って感じがするね。

ちょうど本国からリヴァイヴ用の防御パッケージが来てるけど、連続しての防御は難しい気がするよ」

「しかも、このデータでは格闘性能が未知数だ。

持っているスキルもわからん。偵察は行えないのですか？」

セシリア、鈴、シャル、ラウラの順にそれぞれの意見を口にする。

さすがは代表候補生、緊急事態には強いな。

一夏と箒は何がなんだかわかってないようなのに。

「……できるかも知れないけど、成功確立からすると無理ですね」

ラウラの質問に答える香菜。

「神崎の言つとおり無理だ。

福音は現在も超音速飛行を続けている。アプローチは一回が限界だろっ」

「……で、コレを見る限り」

詳細データを見ながら呟く俺をじっと見つめる全員。

「こいつは攻撃力と機動力がメインだな。

だからこつちとしては、長期戦になると不利だ。

……短期決戦に持ち込みたい。つまり決めるならば一撃必殺だ」

一撃必殺、そう呟いた瞬間、全員の視線が俺から一夏に移る。
ま、そりやそうだろうな。

「え、なんだよ、皆して……？」

「一夏、あんたの零落白夜で落とすのよ」

「それしかありませんわね。ただ、問題は――」

「どうやって一夏をそこまで運ぶか、だね。エネルギーは全部攻撃に使わないと難しいだろうから、移動をどうするか」

「しかも、目標に追いつける速度が出せるISでなければいけないな。超高度ハイパーセンサーも必要だろう」

「そうなると高機動パッケージか。だれか送られてきてないか？」

「ちょ、ちよつと待ってくれ！俺が行くのか！？」

「……当然」……」

当たり前のこと今更聞いてくるなよ。

短期決戦となれば一撃必殺の攻撃力をもった機体が必要だ。

一撃必殺といえば白式だろう。

「織斑、これは訓練ではない。実践だ。

もし覚悟がないなら、無理強いはいしない。

一夏がしなかったときのことを一応、決めておくが……黒月」

千冬さんが一夏に言った後、俺に話を振ってくる。

「はい」

「お前の疾風迅雷だと、どれくらいできる？」

「……頑張ってもコレのエネルギー、半分までしか減らせませんよ。

一夏の零落白夜に比べると、圧倒的に火力不足です」

それに俺の方がエネルギー不足になります。

俺がそういうと、一夏は少し黙って葛藤する。

そして葛藤したのち、口を開いて放った言葉は……

「……やります。俺が、やってみせます」

俺達にとつては良い返事だった。

「よし。それでは作戦の具体的な内容に入る。

現在、この専用機持ちの中で最高速度を出せる機体はどれだ？」

「それなら、わたくしのブルー・ティアーズが。

ちょうどイギリスから強襲用パッケージ『ストライク・ガンナー』
が送られてきていますし、

超高度度ハイパーセンサーもついています」

『パッケージ』——ISの換装装備だ。

武器はもちろんのこと、追加アーマーや増設スラスターなどのこと
も指す。

まあ、俺と一夏にはその言葉すら不要なものだ。

「オルコット、超音速下での戦闘訓練時間は？」

「二十時間です」

「ふむ……。それなら適任——」

「待った待った。その作戦はちよつと待ったなんだよ！」

一夏の運搬役がセシリアに決定するかと思つた瞬間、
聞き覚えのある底抜けに明るい声がそれを遮った。

「……………束さん」

声の発生源は天井。全員が見上げると、

部屋のだ真ん中の天井から束さんの首が逆さに生えていた。

「山田先生。室外への強制退去を」

「え！？ は、はいっ。篠ノ之博士、とりあえず降りてきてください……」

「とうっ」

空中で一回転してからの着地。

おおっ、それに関してだけはお見事。

だけど、個人的にアンタには関わって欲しくないな。

「ちーちゃん、ちーちゃん。もっというい作戦が私の中にナウ。プリンティング！」

「出て行け」

頭を押さえる千冬さん。

確かにこの人の相手は疲れますよね。

ホント、千冬さんがずっとこの人の相手をしていたんだよな。御愁傷様です。

「聞いて聞いて！ ここは断・然！ 紅椿の出番なんだよっ！」

「何？」

「紅椿のスペックデータを見てみて！」

パッケージなんかなくても超高速機動ができるんだよ！

紅椿の展開装甲を調整して。ほら！ これでスピードはばっちり！」

展開装甲。聞きなれない単語を耳にして全員が首をひねる。無理もないな。

ってか、なんでソレを使ってる一夏と原作を知ってるはずの香菜が知らないんだよ。

「展開装甲って言うのは、束さんが製作した第四世代型ISの装備だ」

俺がそういうと、皆驚いたような顔をした。

「まず第一世代が『ISの完成』、第二世代が『後付武装による多様化』、

第三世代が『操縦者のイメージ・インターフェイスを利用した特殊兵器の実装』を

目標にしているのはわかるな？」

「あ、ああ、なんとなくは……」

ギリギリ話についてこれてそうなので、話を続ける。

「第四世代って言うのは『パッケージ換装を必要としない万能機』を目標とした机上の空論のものだ。

その第四世代の装備が展開装甲。具体的にいえば白式の《雪片式型》に使用されている」

「ちょ、ちよつと待て。

雪片式型に使われてるってことは……」

「そう、簡単に説明すると紅椿は最強のISということだ」

まあ、俺の黒影や香菜の不死鳥。

あとはラウラのシュヴァルツェア・レーゲンの方が強いだろうけどね。

……テクニク的に。

「——束。やりすぎるなといったらう」

「そうだったけ？えへへ、ついつい熱中しちゃったんだよ」

最強のISを作ってしまった理由がくだらないものだったので、全員して呆れる。主に俺と香菜と千冬さんが。

「話を戻すぞ。……束、紅椿の調整にはどれくらいかかる？」

「織斑先生！　わたくしとブルー・ティアーズなら必ず成功して見せますわ！」

「そのパツケージは量子変換してあるのか？」

「そ、それは……まだですが……」

痛いところを突かれ、勢いを失うセシリア。確かにやりたいところだよね。

任務に参加する名誉もあるし、愛しの一夏を運べるチャンスだし。

まあ、任務に私情を持ち込むのは厳禁だけだね。

「ちなみに紅椿の調整時間は七分あれば十分だね」

「よし。では本作戦では織斑、

篠ノ之の両名による目標の追跡及び撃墜を目的とする。何かあるものは拳手しろ」

「はい」

全員が静まる中、俺と香菜の声が響く。

「何だ、黒月、それに神崎」

「おりいっつてお願いがあります——」

全員の視線が先に話しかけた香菜に集中する。

「——私も……いえ、私達も作戦に参加させてはもらえませんか？」

39話 約束

時刻は十一時半。天気は快晴。絶好の戦闘日和だ。

俺と一夏、箒と香菜の4人は距離をおいて並び、各々の専用機を呼び出す。

「来い、白式」

「行くぞ、紅椿」

「飛ぶよ、不死鳥」

「翔るぞ、黒影」

その瞬間光に包まれ、俺たちは専用機を身にまとう。

この作戦の性質上、

攻撃の決めての一夏は箒に移動の全てを任せるため箒の背中に乗るように形になる。

俺と香菜は二人の援護、出来るのであれば攻撃にも参加しろ。という、一夏と箒より難しい依頼がきた。

ただ箒は今日、専用機を手に入れたばかりだしな。

……浮かれてミスをしなければ良いけど。

したときのことと考えて、俺達がフォローしないとな。

『四人とも、聞こえるな？』

（ワンアプローチ・ワンダウン）

今回の作戦の要は一撃必殺だ。短時間での決着を心がける『了解』

「織斑先生、私は状況に応じて一夏のサポートをします」

『そうだな、しかし無理はするな。これは実戦だ。
そのためにお前らより実践慣れしている黒月と神崎だ、わかってい
るな』

「はい」

そういう筈だが、その言葉にはかすかな喜色とそして浮いている感
じがあった。

『——では、始め!』

——————作戦開始!!

筈が目にも留まらぬ速さで一気に飛翔する。

それを追い越さない程度の速さで俺達も追いかける。

「暫時衛星リンク確立——情報照合完了。

目標の現在位置を確認。一気にいくぜ。お前ら、準備はいいか?」

「お、おう!」

「まかせろ!」

「了解!!」

一気に速度を上げて福音のもとへと向かう。

福音との距離が二キロを切ったところで、ハイパーセンサー越しに
福音の姿を視認した。

シルバリオスベル

【銀の福音】——その名にふさわしい銀色のIS。

頭部から生えた一对の巨大な翼。

それは大型スラスターと広域射撃武器を融合させた特殊装備らしい。

「……一夏、十秒後に接触する。集中しろ」

俺が言った時には、既に一夏は意識を握った雪片と、目の前を飛翔している福音に集中させていた。

（……心配する必要もなかったか。戦闘慣れしてきてるな、一夏のやつ）

一夏の集中に応えるように、雪片は輝きを増していく。福音と二人の距離はみる間に縮まる。

「香菜、念のため直ぐに援護出来るように戦闘待機しろ」

「了解。わかってるわ」

一夏達とは違う更に上空に飛翔し、福音に狙いを定める香菜。手にはスナイパーライフル……ひりゅう 緋龍を持っていた。

「うおおおおっ！！」

福音が攻撃範囲内に入った瞬間、

一夏は瞬間加速を発動させ、福音に向けて突っ込んだ。イグニッション・ブースト

【所属不明のISを確認——ロックされています】

その瞬間、黒影が何者かのISを確認する。

……おいおい、何でこんなときに限ってくるんだよ。

一夏は福音を落とす切り札。

箒は一夏のフォロー……今の箒では出来るかわからないけど。

香菜はそんな二人の援護。

はあ、動けるの俺しかいねえじゃん。

【――警告！所属不明IS射撃体勢に移行。トリガー確認、初弾
エネルギー装填】

「なっ!？」

「こんなときに……!!」

「このままじゃ、全員墮とされる。」

一旦、引こう!」

ここまで来て、皆異変に気づいたみたいだ。

そしてその危険をいち早く察知した香菜が撤退をしようと意見を出す、

「無理だ。さつき俺が福音を攻撃しちまったからか、
攻撃対象が完璧にこっちになってやがる」

情報にないやつを相手にするのは、

戦略をたてられないから戦いたくないんだけど。

そんなこと言ってる場合じゃねえな。

「……一夏、箒、香菜。」

お前らはそのまま作戦通り、福音を墮とせ」

「優哉、どうするつもり？」

香菜が俺に作戦を聞こうとした時。

無情にも所属不明機から、高エネルギーレーザーが発射される。

「はあああーっ!!」

月光を構え、すぐに俺達目がけて来たレーザーを切り裂く。
切り裂いたレーザーは、軌道を変え海面に落ちる。

そして爆発を起こす。

「俺があいつの相手をしておく。だからその間にアレをやれ」
爆発の影響で飛び散る水を浴びながら命令を出す。

「……でも、あんなやつお前一人じゃ」

福音の攻撃を避けながら言う一夏。

「お前らは自分の心配だけしてる。

それに俺は相手をするって言ったただけだぜ。時間稼ぎしかできねえよ。

だから、その間にやれって言ってるんだ。……いいな」

「ああ、わかった。

絶対にこいつを墮として、お前を助けに行くからな」

「ーそいつは助かるな。

笑顔を浮かべながら、俺は所属不明機と戦いに向かう。
アンノウン

「優哉っ!!」

だが、飛び立とうとした瞬間、香菜に呼び止められる。

「必ず戻ってくる。って約束して」

俺の近くまで来て、いつもより真剣な表情で言うてくる。

「……ああ、必ずここに戻ってくる。約束だ」

頭を撫で、満面の笑顔を浮かべながら宣言する。

「絶対っ、絶対だからね!!」

「ああ、絶対だ」

それだけ言って、俺は大空に飛び立つ。

仲間を……香菜を助け、約束を果たすために。

「絶対、全員で帰るんだ。IS学園に……」

39話 約束（後書き）

はあ、やっと福音との対決か……。

長かった、ホントに長かったよ。

40話 新たな決心

「……………いた」

一夏達の元を離れ、5分ぐらい飛んでいると
目の前に真っ黒なフルスキンのISを確認した。
手にはさっき撃ったであろうレーザーの発射元……レーザーライフ
ルが握られていた。

「喰らいなっ!!」

先手必勝、とばかりに俺は、【疾風迅雷】を使いアンノウンに攻撃
を入れる。

「……………」

アンノウンはそれを黙って受け止める。

（……………どうということだ？

なんでこいつは何も反撃してこないんだ）

頭の中では、そんなことを考えながらも攻撃の手はやめない。

かなりの攻撃を出しても、

アンノウンは受け止めるか、避けるかのどちらかで反撃してこない。

「……………お前は一体、何なんだよ」

気味が悪くなつた俺は、

返事がないとわかっていながらもアンノウンに向かって話しかける。

「……………今回は、ただの顔合わせに来たのよ。兄さん」

だが、予想とは裏腹にアンノウンから返事があった。
ただそれには、意味のわからない言葉だらけだった。

「……誰だ、おまえ？」

俺に妹はいない。

つまりこいつのことは知らないというわけだ。

「覚えてないの？私のこと」

「覚えてねえ。ってか、俺に妹はいねえよ」

「そう……？ホントにそう言い切れる？」

「当たり前だろ。言い切れるに決まって……」

あれ、ホントに言い切れるか……？

いや、違う。言い切れる！！

美夏はもう、死んでいるんだ。俺の妹はいない。

「どうしたの、兄さん？」

目の前にいるやつがそういつたと同時に、

やつは頭に被っているものを取り外す。

「……お前は」

そして見えたやつの顔は、忘れることが出来ない顔だった。

「美夏？」

「お久しぶりですね。兄さん」

「お久しぶりですね。兄さん」

「……なんで、なんでお前が生きてるんだよ。美夏!!」
父さん達と一緒に事故で死んだはずじゃ。

「はあ……、バカですね。兄さんは」

「……………」

「まあ、良いです。」

それぐらいが兄さんには、ちょうど良いですし」

それはどういう意味だよ。

そう聞きたかったが、聞けなかった。

何故なら、

『優哉!! 一夏が墮とされた』

一夏が墮ちたという知らせが届いたからだ。

「くそっ……………」

心底、悪態つきながら俺はその場を飛び立つ。

俺が悪態ついた理由は二つ。

美夏に会えたのだが、再開を喜べる状況じゃない。ということと、
美夏と話をしていて一夏を助けられなかった自分に対してだ。

「……俺は、何も護れないのか？」
みんなを護る。

そう決心した直後に起きた一夏が墮ち、
俺の決心は無駄なのではないか？俺に人を護ることはできないんじゃないか？

俺の思考は、最悪な方向へ落ちていく。

「……弱気になってちゃダメだ。
俺は今度こそ、全員を護るんだ」

……命をかけてでも。

そう密かにそして新たに決心する。

41話 衝突

「香菜、無事か？」

「ええ、なんとかね。だけど、二人が……」

目線の先には一夏と、一夏を大事に抱えている箒の姿があった。

……くそつ、俺は何をしてたんだよ！！

すぐに一夏達のところにサポートに行くべきだったんだ。

「……香菜。」

今すぐ一夏と箒を連れて、旅館に戻れ」

「良いけど。私達、完全に福音にロックオンされてるよ。」

「福音は俺がやる」

一夏を墮としたやつを黙って見過ごせるか。

絶対にこいつは俺が墮とす！！

『作戦は中止！！』

神崎、黒月、織斑と篠ノ之を回収して戻ってこい！』

オープン・チャネルで千冬さんからの指示がある。

だけど、俺はそれには従えません。

「すいません。その指示には従えられません。」

俺達は完全に福音にロックオンされていますので、撤退は無理そうです」

一息つき、続きの言葉を言う。

「だから、俺が残って福音の相手をします」

『……………わかった。だが無理だけは絶対にするな。』

神崎、急いで二人をこっちに渡せ。それから黒月と合流して、福音と交戦しろ。

動けるお前ら、二人なら撤退もできるだろ』

これから先の指示までだす千冬さん。

ホント、この人の頭ん中どうなってるんだろっな？

瞬時にさきのことまで考えられるなんて。

俺は、今しか考えられねえや。

「了解」

千冬さんに返事を返した後、

香菜は放心状態の筈と、重症の一夏を抱え撤退していく。

それを見届けた後、俺は月光を構え福音の前に立つ。

「……………覚悟しろよ。銀の福音」

シルバリオスベル

すみません、千冬さん。

無理をしないと、勝てなさそうなのでかなり無理をします。

――疾風迅雷、発動。

刹那、黒と白がぶつかり合う。

42話 結末

「作戦はどうなってるんだ。香菜!？」

戦闘を続行できない状態の一夏と箒を抱えて

戻ってきた香菜を迎える四人と救護班と思われる教師達。

「作戦は失敗! 一夏は重傷、箒はとてもじゃないが闘える状態じゃない。」

だから今、優哉一人で福音の相手をしてる」

慌てるような口調のラウラに、冷静に香菜は話しかける。

だが、落ち着いているのは、表情と口調だけで
心は落ち着いていなかった。

「優哉一人で!？」

3人同時でも無理だったんだから、無茶だよ。早く連れ戻さない」と

珍しく慌てるシャルロット。だが、それも仕方ないだろう。

思い人が危険な目に合っているのだから。

(……優哉、無事でいて)

そんなシャル達を見ながら香菜は思う。

「はあああつー!」

月光を構え、福音に突っ込むが、

「La」

福音お得意の全方位射撃のせいで思ったように近づけなかった。

「くそつ、隙がなさすぎる」

俺には一夏の雪片みたいなエネルギーを殺す剣なんてないから、
できる限り福音の弾をよけながら、接近しないといけないのだが、
さっきの攻撃のせいで思ったように動けない。

ーどうにかして、突破口を作らねえと。

そう思っていた時、微かに本当に微かにだが、
弾が来ていない死角らしき場所があった。

よし、ここならいける。

「……黒影、一発で決めるぞ」

さっきと同じように俺は、福音に真正面から突っ込む。

すると、福音はさっきと同じように全方位への射撃を始める。

「今だつー!」

一瞬で福音の後ろに回り込み、全エネルギーを使い一撃入れる。

俺の全身全霊の力を受けた福音は、海面へと落ちていく。

「……はあ、はあ。や、やったか？」

息を整えながらそういつた時、

俺の手から月光が光の粒子となって消えていく。

（……エネルギー切れ、か）

頼む、頼むから堕ちてくれよ。これ以上は俺でも限界だ。

残ってるエネルギーはかなり少量で、

旅館までの道のり分ぐらいしかないんだからさ。

バシャンッ！！！！

「……マジかよ」

だが、現実は無常である。

かなり消耗しているが、福音はまだ生きていた。

一気に俺よりも遥かに高い上空まで行き、【銀の鐘^{シルバール}】のモーションに入る。

……くそつ、俺もここまでなのかよ。

遥か上空の福音を見て、思う。

「……香菜、悪いな。」

お前との約束、守れそうにないや」

目の前まで来ている、銀色のかかなり大きいレーザーを見ながら呟く。

そして目の前が真っ白になり、

体に大きな衝撃を受け、俺の意識はなくなった。

43話 作戦失敗

「……………」

旅館の一室。壁の時計は四時前を指している。

ベッドで横たわる一夏は、もう三時間以上も目覚めないままだった。その傍らに控えている箒は、もつずとこつしてうだなれている。リボンを失って垂れた髪が、まるで今の気持ちまで表わしているようだった。

「今から3時間前」

「作戦は失敗。以降、状況に変化があれば招集する。それまで各自現状待機しろ」

「待つてください！優哉がつ！！ 優哉をまだ助けに……」

作戦の終わりを告げ、待機命令された香菜は千冬にそう言う。

「黒月は…… 墜ちた」

千冬は若干、顔を歪めながら全員にとって残酷であろう言葉を言った。

「……………え？」

「お前達を逃がした後……………福音の攻撃で海に墜ちた。」

現在教師部隊を向かわせて搜索している

辛そうな顔をしながら千冬さんはさらに告げる。

力強く握られた拳は爪が食い込んで血が出ていた。

「…………優哉あ」

箒と同じように部屋で塞ぎ込んでる少女がもう一人いた。

それは言わずと知れたであろう。神崎香菜だ。

彼女は、一番彼の近くにいた。

それなのに彼を止められなかった、

それが一番悔しくて、彼女は泣きながら愛しい彼の名前を呟く。

そんな彼女の部屋に、ある少女が入ってきた。

「…………うわあ、聞いてた通り酷いね。今の君は」

入ってきたのは、シャルだった。

彼女は鈴から話を聞いて香菜のところに来たのだ。

（ホント、なんでこんな仕事を僕に任せるんだろ。鈴は……）

心の中でシャルは愚痴る。

だが、仕方ないだろう。

シャルと同じように鈴も塞ぎ込んでいる人のところに向かっていったのだから。

「……………」

「一体、今の君を見たら、優哉は何て言うだろうね？」

「……もう、優哉はいないんだよ。」

「だったらもう、気にする必要はないよ」

優哉は死んだ。

自分の目の前でそう宣言する彼女の頬をシャルは全力で叩く。

香菜はシャルに叩かれた頬を抑えながらシャルを見る。

「君は優哉の何を見てきたのさ!？」

「……全部、見てたよ!!」

「だけど、人間、死ぬときは死ぬんだよ」

目から涙を垂らし、叫びながら香菜は言う。

「……優哉は生きてる」

「えっ!？」

そう宣言するシャルに香菜は驚く。

「そう信じて僕たちは今夜、福音をリベンジに行く。」

戦う気があるのなら、今夜旅館前の砂浜に来て。

君がこなかったも僕たちは行くけど……それじゃ」

言いたいことを全部、言うことが出来たのかシャルは香菜の部屋を出ていく。

ざあ……。ざああん……。

「（ここは……どこだ？）」

遠くから聞こえる波の音に誘われるまま、

俺はどこともつかぬ砂浜の上を一人歩いていた。

足を進めるたび、さく、さく、と足下の白砂が澄んだ音を立てる。

足の裏に直接感じる砂の感触と熱気。海から届く潮の匂いと波の音。

それに心地よい涼風と、じりじりと照りつける太陽。

「――。――。――。」

真っ直ぐに歩いていると、ふと歌が聞こえた。

とても綺麗で、とても元気な、そんな歌が。

俺はなぜだか、その歌声が無性に気になって、

歌声の響いてくる方へと足を進める。

「ラ、ラ、ラ、ラララ」

少女は、そこにいた。

波打ち際、わずかにつま先を濡らしながら、その子は踊るように歌い、謡うように踊る。

そのたびに揺れる漆黒ともいえるような真っ黒な髪。輝き、色鮮やかな黒。

それと同じワンピースが、風に撫でられて時折ふわわりと膨らんでは舞った。

44話 少女達の戦い

海上二〇。メートル。そこで静止していた『銀の福音』は、まるで胎児のような格好でうずくまっている。

膝を抱くように丸めた体を、頭部から生えている羽が覆う。それを見つけた篤達はすかさず先制攻撃。

ラウラの大型レールカノン『ブリッツ』が火を吹いた。超音速で飛ぶ砲弾は福音の頭部に直撃、大爆発を起こす。

遠距離からの砲撃・狙撃に対する備えとして、四枚の物理シールドが左右と正面を守っていた。砲戦パッケージ『パンツァー・カノニア』を装備したシュヴァルツェア・レーゲンによる砲撃だった。

（敵機接近まで……………四〇〇〇

……………三〇〇〇——くっ！ 予想よりも速い！）

ラウラの放つ超音速の砲弾をかわしながらこちらに向かって来る福音。

五〇〇〇あった距離はアツと言う間に一〇〇〇まで縮まり、ラウラへと迫った。

ラウラも福音を近づけさせないために福音に向けて砲撃を放つが、エネルギー弾によって半数以上が撃ち落とされた。

「ちいっ！」

砲戦仕様はその反動相殺のために機動との両立が難しい。
対して、機動力に特化した福音は三〇〇メートル地点から
さらに急加速を行い、ラウラへと右手を伸ばした。

——避けられない！

しかし、ラウラはニヤリと口元を歪めた。

「——セシリア、香菜——」

突然上空から垂直に振り降りて来た二つの機体によって弾かれた。

それは青一色の機体——ブルー・ティアーズによるステルスモードからの強襲。

六機のビットは通常とは異なり、その全てがスカート状に腰部に接続されている。

しかも、砲口は塞がれており、スラスターとして用いられている。
さらに手にしている大型BTLレーザーライフル『スターダスト・シユーター』は

その全長が二メートル以上もあり、ビットを機動力に回している分の火力を補っていた。

強襲用高機動パッケージ『ストライク・ガンナー』を装備している。

「速い！？ でも——」

セシリアは、時速五〇〇キロを超える速度下での反応を補うため、
バイザー状の超高感度ハイパーセンサー『ブリリアント・クリアラ

ンス』を頭部に装着している。
そこから送られてくる情報を元に最高速からいきなり反転、福音を捉えて――。

「優哉さんの方がもつと速かったですわ!!」

引き金を引いた。スターダストから放たれるレーザーが福音に直撃する。

「……アンタを倒して、優哉を助ける!!
私はそう、決めたんだ!!」

そのよろけた隙を狙い香菜は
流星群りゅうせいぐんと緋龍ひりゅうをコールし、福音目がけて一気に撃つ。

『敵機Bを確認。排除行動へと移る』

「遅いよ」

セシリアを脅威と感じた福音はそれを排除しようとセシリアに向かつて飛ぶ。

だが、今度は背後からシャルロットのショットガン二丁による接近射撃を背中に浴び、姿勢を崩した。

だが、それも一瞬のことで、
すぐさまシャルロットの事を三機目の敵機と認識し、シルバー・ベルを放つ。

「おっと。悪いけど、この『ガーデン・カーテン』は、そのくらいじゃ落ちないよ」

リヴァイヴ専用防御パッケージは、

実体とエネルギーシールドの両方によって福音の弾雨を防ぐ。

防御の間もシャルロットは得意の『ラビットスイッチ高速切替』

によってアサルトカノンを呼び出し、タイミングを計って反撃を開始する。

『…………優先順位を変更。現空域から離脱を最優先に』
ラウラ、セシリア、香菜、シャルロットらの四方向からの射撃に、福音はじわじわと消耗されていく。

そして、全方位にエネルギー弾を放った福音は、
次を瞬間に全スラスターを開いて強行突破を試みようとしていた。

「させるかあっ！！」

海面が膨れあがり、爆ぜる。

飛び出したのは真紅の機体『紅椿』と、その背中に乗った『甲龍』であった。

「離脱する前にたたき落とす！」

箒が叫び福音に斬りかかる。

その背中から飛び降りた鈴は、機能増幅パッケージ『崩山』。

両肩の衝撃砲が開くのに合わせて、

増設された二つの砲口がその姿を現し、計四門の衝撃砲が一斉に火を噴いた。

『！！！』

肉薄していた紅椿が瞬時に離脱し、その後ろから衝撃砲による弾丸が一斉に降り注ぐ。

しかしそれはいつもの不可視の弾丸ではなく、赤い炎を纏っていた。
しかも、福音に勝るとも劣らない弾雨。

そのいくつかが福音に直撃する。

「やりましたの！？」

「——まだよ！ くっ！ なんだってあんなに堅いのよ！？」

拡散衝撃砲を直撃してもんなお、福音は止まらない。

『《銀の鐘》^{シルバー・ベル} 最大稼働——開始』

両腕を最優いっぱいに広げ、

それと一緒に広がった翼から眩い光が爆ぜ、エネルギー弾の一斉射撃が始まった。

「くっ!!」

「箒！ 僕の後ろに！」

前回の失敗をふまえて、箒の紅椿は機能限定状態にある。

展開装甲を多様したことから起きたエネルギー切れをふせぐため、現在は防御時にも自発作動しないように設定されている。

もちろん、そう設定し直したのは、

防御をシャルロットに任せられるからだ。集団戦闘の利点を生かした役割分担。

「それにしても……これはちょっと、きついね」

防御専用のパッケージであっても、

福音の異常な連射を立て続けに受ける事はやはり危うかった。

「ラウラ！セシリア！香菜！お願い！」

「言わずとも！」

「お任せになつて！」

「了解！」

後退したシャルロットの代わりに

左右からラウラとセシリア、上空からは香菜が射撃を開始する。

「足が止まればこっちのもんよ！」

そして直下から鈴の突撃。

双天牙月による斬撃のあと、至近距離からの拡散衝撃砲を浴びせた。

——狙いは、頭部に接続されたマルチスラスター《銀の鐘》シルバー・ベル。

「もらったあああつ!!」

福音のエネルギー弾を浴びながら、しかし鈴の斬撃は止まらない。

同じく衝撃砲の弾雨を降らせ、

互いに深いダメージを受けながら、ついにその斬撃が福音の片翼を奪った。

「はっ、はっ………！ どうよ——ぐっ!？」

片翼になりながらも、それでも福音は崩した体制をすぐに立て直し、鈴の腕へと回し蹴りを叩き込む。

蹴りを受けた鈴は一撃で腕部アーマーを破壊され、海に墜ちる。

「鈴！ おのれっ——!!」

箒は両手に持った刀で福音に斬り掛った。

（獲った——!!）

そう思った刹那、福音は信じられないことに左右両方の刃を手の平で握りしめる。

刀身から放出されるエネルギーに装甲が焼き切れるが

お構いなしに福音は両腕を最大にまで広げる。

刀に引っ張られ、箒が両手を広げた無防備な状態を晒す。

そしてそこに、残ったもう一つの翼が砲口を開放して待っていた。

「箒！武器を捨てて緊急回避をしろ！」

しかし、箒は武器を手放さない。

（……………ここで引いて、何のための……………）

エネルギー弾がチャージされ、光が溢れる。

そして、それは一斉に放たれた。

（何のための力かつ！！）

エネルギー弾が触れる寸前に、ぐるんと紅椿は一回転した。

その瞬間、爪先の展開装甲が箒の意志に答えるように開き、エネルギー刃を発生させる。

「たあああああつ！！！」

かかと落としのような格好でエネルギー刃の斬撃が決まる。

ついに両方の翼を失った福音は、崩れるように海面へと墜ちていった。

「はっ、はあっ、はあっ……………！」

「無事か！？」

珍しくラウラの慌てた声を聞きながら、箒は乱れた呼吸をゆっくりと落ち着けていく。

「私は　　大丈夫だ。それより福音は——」

「私たちの勝ちだ」と誰かが言おうとしたその瞬間、海面が強烈な光の珠によって吹き飛んだ。

「！？」

球状に蒸発した海はまるでそこだけ時間が止まっているかのように

へこんだままだった
その中心、青い雷を纏った『銀の福音』が自らを抱くかのようにうずくまっている。

「これは……！？一体、何が起こっているんだ……？」

「！？ まずい！ これは——」
セカンド・シフト『第二形態移行』だ！」

ラウラが叫んだ瞬間、まるでその声に反応したかのように福音が顔を向けた。

『キアアアア………！！』

まるで獣の咆哮のような声を発し、福音は箒たちに襲いかかった。

「なにっ！？」

あまりに速いその動きに反応できず、ラウラは足を掴まれてしまう。そして切断された頭部から、

ゆっくり、ゆっくりと、まれで蝶がサナギからかえるかのように

——エネルギーの翼が生えた。

「ラウラを離せえっ！」

シャルロットはすぐさま武装を切り替えて接近ブレードへと持ち替え、突撃する。

けれどその刃は空いた方の手によって受け止められてしまう。

「よせ！ 逃げる！ こいつは——」

ラウラのその言葉は最後まで続かず、福音のエネルギーの翼に抱かれる。

刹那、あのエネルギー弾雨を零距离で食らい、全身をズタズタにされてラウラは海に墜ちた。

「ラウラ！ よくもっ……………！」

ブレードを捨てて、シャルロットはショットガンをコールする。福音の顔面へと銃口を向けて、引き金を引いた。

ドンッ！！

しかし、その爆音はショットガンによる物では無かった。

福音の胸部、腹部、背部、装甲がまるで卵の殻のようにひび割れ、小型のエネルギーの翼が生えてくる。

シャルロットはその迎撃によりショットガンを吹き飛ばされて、一緒に体も吹き飛ばされてしまった。

「な、何ですの！？ この性能……………軍用とはいえ、あまりに異常な——」

再び高機動による射撃を行おうとしていたセシリア。

だが、その眼前に福音が迫る。イグニッション・ブーストに寄る加速。

それも、両手両足の計四か所同時着火による爆発加速だった。

「くっ！？」

長大な銃は接近されると弱い。

すかさず距離を置いて銃口を上げようとするが、その砲身を真横に蹴られてしまう。

そして、次の瞬間には両翼からの一斉射撃。

反撃らしい反撃もできず、まともに攻撃を受けたセシリアは蒼海へと沈められた。

「私の仲間を——よくも！」

急加速によって接近した箒は、続けざまに斬撃を放ち続ける。展開装甲を局所的に用いたアクロバットで敵機の攻撃を回避、それと同時に不安定な格好からの斬撃をブーストで加速させる。

「うおおおおっ!!」

互いに回避と攻撃を繰り返しながらの格闘戦。

だが、そんな格闘戦も紅椿がわずかに福音を押し始める。

（いける！ これならっ——）

キュウウウン……………。

「なっ！ また、エネルギー切れだと!? ——ぐあっ！」

その隙を見逃さず、福音の右腕が箒の首をしめる。

そして、ゆっくりとその翼が箒を包みこんでいった。

「箒っ!!」

香菜の慌てたような声が響きわたるが、箒の耳には届いていなかった。

（すまない、一夏……………!）

45話 希望

ざあ、ざあん…………。

さざ波の音を聞きながら、俺は飽きもせず女の子を眺めていた。その歌は、その踊りは、なぜだか俺をひどく懐かしい気持ちにさせる。

(…………あれ?)

ところが、ふと気がつくとき少女の歌は終わっていた。踊りもやめて、少女はじいっと空を見つめている。

俺は不思議と思って、少女の隣へと向かった。

ざあ、ざあ、と

波打ち際までやってきた俺を、涼しい水の調べが濡らす。

「どうかしたのか?」

声をかけるが、少女はまだじいっと空を見つめたまま動かない。俺もなんとなく空を眺めると、ふと少女の声が耳に届いた。

「呼んでる……………行かなきゃ」

「え?」

隣に視線を戻すと、もうそこに少女の姿はなかった。

——あれ?

きよろきよろと左右を見るが、もう人影は見あたらない。歌も聞こえない。

「うーん……………」

俺は仕方なく戻ろうと体を反転させる。

すると——背中に声を投げかけられた。

「力が欲しいですか……………」?

「え……………」

急いで振り向くと、波の中——膝下までを海に沈めた女性が立っていた。

その姿は黒く色鮮やかな甲冑を身に纏った騎士さながらの格好だった。

「力が欲しいですか……………何のために……………」

「……………難しいことを訊くなあ。」

まあ、俺が力を欲する理由は一つしかないけどな。理由としてはアレだ……………。仲間を護りたいんだ」

「仲間を……………」

「ああ、この世の中、色々戦わないといけないだろ？だからさ、色々と力が必要になってくるわけ。……………だから、そのために力が欲しいかな」

話しながら、「ああ、俺ってそう思っていたのか」と自分に驚く。
「そう……………」

「だったら行かなきゃね」

「えっ？」

振り向くと、黒いワンピースの女の子が立っていた。

人懐っこい笑み。無邪気そうな顔でじいっと俺を見つめている。

「な、なんだ？」

——空が、世界が、眩いほどに輝きを放ちはじめる。

その真っ白な光に抱かれて、目の前の光景が徐々に遠くばやけていく。

夢の終わり、なんて言葉がふいに浮かんだ。

（ああ、もしかして今の女の子は……………）

「ぐっ、うっ」

ぎりぎりと締め上げられ、圧迫された喉から苦しげな声が漏れる筈。

第二形態移行した福音によってセシリア、鈴、シャル、ラウラのメンバーは撃墜。

箒はエネルギー切れによって捕まってしまったのだ。
そして香菜も箒を助けようとしたが、福音の攻撃を喰らい撃墜。海
へと堕ちていった。

福音の手は硬く箒の首を掴んで離さず、
さらにはエネルギー状へと進化した『銀の鐘』が紅椿の全身を包ん
でいた。

（これまでか 情けない ）

ぽうつと光の翼が輝きを増していく。
一斉射撃への秒読みがはじまる中、箒の頭の中には昔の笑い合う一
夏の姿。

—— 会いたい。

—— 一夏に、会いたい。

—— すぐに会いたい。今会いたい。

—— ああ、ああ、会いたい。

「いち、か……………」

知らず知らず、その口からは一夏の名前を呼ぶ声が出ていた。

「一夏……………」

さらに輝きを増す翼に、箒は覚悟を決めてまぶたを閉じる。
『!?!』

突然、福音は箒を掴んでいた手を離す。

いきなりの出来事に混乱している箒が、
瞳を開けた時に見たのは強力な荷電粒子砲による狙撃。
それを受けて福音の体は吹き飛んでいた。

（な、何が起きて——）

戸惑う箒の耳に届いたのは、さっきからずっと願って止まない声
だった。

「俺の仲間は、誰一人としてやらせねえ！」

箒の視線には、白く、輝きを放つその機体がある。

「あ……あ、あつ……」

じわりと目尻に涙が浮かぶ。

わずかに潤んだ視界に見えるのは、

白式第二形態・『雪羅^{せつろ}』を纏った一夏だった。

46話 漆黒の守護者

「……香菜、こっちこっち」

「あ、待ってよ。優哉君」

……これは夢？

私の目の前では、小さいころの私と優哉が遊んでいた。

「見いつけた！！」

「あーあ、見つかったちゃった。

じゃあ次、優哉君が逃げる番ね」

子供のときの私達は無邪気にずっと遊び呆けていた。

一夏や筈もずっと私達と一緒に遊んでいた。

……いつからだろう。

私達が遊ばなくなったのは。

……いつからだろう。

優哉が心からの笑顔を見せなくなったのは。

「優哉、これから遊びにいかない？」

「ああ、わりい。」

これから用事なんだ。ごめんな」

「ううん、いいよいいよ。急に誘った私が悪いんだし」

申し訳ないみたいな感じで謝ってくる優哉に、

慌てて私は手を振る。

……いつからだろう。

私が優哉のこと好きになっていたのは。

――会いたいな。

優哉に会えるというなら、会いたいな。

会ってちゃんとした告白がしたい。

それにあの優しい腕に抱かれたい。

――優哉の優しい声が聞きたいよ。

「……何、泣いてんだ？」

「へっ？」

優哉の声が聞こえたので、目を開けてみる。
するとそこにいたのは……

「ホント、お前には涙は似合わないな。笑ってるほうがいいぜ」

「……… バカ、泣かせたのは誰だと思ってるのよ」

涙を垂らしながら、優哉を叩く。

思った以上に力が入らないため、優哉にお仕置きと題して叩くことも出来ない。

だけど、優哉に触れた。

このことが嬉しくて、ふと私の顔が笑顔になる。

「そうそう、お前には笑顔が似合うぜ」

そついつて優哉は、私の頭に何かをつけた。

「…… お前には心配かけたし、それに約束を守れなかった罰だ。

今度、一緒に買い物に行こうぜ。

そんでお前に似合いそうなアクセサリーを買ってやる。その前売り券みたいなものだ。

絶対に無くすんじゃねえぞ。無くしたら買わねえからな」

私の額を指で強く押す優哉。

それはまるで子供に注意する母親みたいで笑ってしまう。

「……… 何、笑ってんだよ？」

「ふふふっ、いえ別に………」

「まあ、いいや。香菜、これを受け取れ」

優哉が私に渡してきたのは、

ケーブルのようなものがついているボックスみたいなものだった。

「……お前の不死鳥用に用意しておいたコンパクトエネルギー凝縮器だ。」

まあ、簡単に説明すると、エネルギーを回復する装置だ。今は、そういう認識で良い」

ザックリとした説明を聞いた私は、

説明の仕方に文句を言いながらケーブルの先を不死鳥につなげる。

「……優哉、その機体どうしたの？」

今までツツコム余裕もなかったからか、

気付かなかったけど優哉のESが変わっていた。

今までよりも装甲が多くなり、騎士の鎧のようになっていた。

——【白騎士】みたい。

あ、でも、黒いから【黒騎士】かな？

「ん？ ああ、セカンド・シフトしたみたいだ」

「セカンド・シフトしたの？」

「おう……っと、一夏のやつが復活したみたいだな」

少し遠くの場所から白い機体が上空へ飛んでいくのが見えた。

「……なら、俺も行かないとダメかな」

「待ってっ——！」

飛び立とうとする優哉にストップをかける。

「どうした？」

「……もう、絶対にいなくなるじゃないよね？」

「……ああ、いなくなるはないさ」

「絶対？」

「ああ、もう、しつこいぞ。」

「なんでこうなったんだよ！！」

「何回も聞く私に、とうとう優哉がキレた。」

「だって、さっきは約束したのにいなくなったし」

「うぐっ……確かにアレは俺が悪いけど。ああ、もう、わかった！
！」

「そういうと優哉は一度、ISを解除して、ポケットからカッターナイフを取り出す。」

そして………

「……ふう、スッキリした」

「あろうことか、長かった後ろの髪を全て切ったのだ。」

「え、なんで？」

「なんでって、お前が約束を信じてないから。」

「どっかのゲームであつたような展開を試してみた」

「そうじゃなくて。その髪、大事にしてたんじゃ」

「……ああ、別にもう用がなくなった」

「そう言う優哉の顔は、吹っ切ったような顔つきだった。」

「……そう」

「ああ、じゃあ俺は先に行ってくる。お前も後でこいよ」
私に背中を向け、優哉はISを起動させる。

「うん、わかつてる」

「それじゃ、また後で」

そういつて遙か上空に飛んでいく優哉の姿はまるで

【漆黒の守護者】のようだった。

47話 決着

香菜と別れ、一夏が向かった上空に俺は向かった。そこには、いつものメンバーが全員集合していた。

『すまん、回復に手間取った』

『さあ、反撃のお時間ですわよ』

ラウラとセシリアが一夏の元へ行って言う。

『ラウラ、セシリア』

『一夏、さつさと片付けちゃおうよ』

『エネルギーは充分、僕達の心配はいらないよ』

遅れてシャルと鈴の二人もむかつて言う。

『鈴、シャル』

「……悪い、待たせたな」

「……優哉さんっ！！」「……」

全員してオバケを見たような反応されると、いくら俺でも落ち込むんですけど。

ま、髪型を変えても俺だってわかるってことは、忘れられてないということだから良いけどね。

「……あいつを堕とすために、復活したぜ。
つきかけ
月影も協力してくれるみたいだな」

「月影？」

「ああ、こいつの新しい名前かな？」

自分のISを指差しながら言う。

「あ、あと、あの子を救ってやらないといけないし」
福音を見ながら呟く。

あいつを見てると、何か救ってやらないといけない気がするんだ。

俺達を一通り、見て決心したのか、
息を深く吸い込み、そして吐き出す。

「よーし、はっ!!」

次の瞬間、一気に上空まで飛び上がる。
それに俺達も続く。

そろそろ香菜の回復は終わったかな？
そんなことを思いながら。

(一夏が駆け付けてくれた……)

筈は心の中で喜んだ。それはもう、嬉しさを飛び越えてしまう程に。
心が躍動する。熱を持って、跳ねる。

そして戦う一夏の姿を見て、何よりも強く願った。

(私は、ともに戦いたい。あの背中を守りたい！)
強く、強く願った。

その願いに答えるかのように紅椿の展開装甲から赤い光が混じって黄金の粒子が溢れだす。

「これは……………!？」

ハイパーセンサーからの情報で、機体のエネルギーが急激に回復していく。

——『絢爛舞踏』、発動。展開装甲とのエネルギーバイパス構築……………完了。

項目に書かれているのは単一仕様能力の文字。

（まだ、戦えるのだな？　ならば——）

一夏から渡されたりボンで髪を縛り、気を引き締めて福音を見る。

「ならば、行くぞ！　紅椿！」

赤い光に黄金の輝きを得た真紅の機体は、空へ舞った。

「ぜらあああつ……!!」

零落白夜の光刃で斬りかかる一夏。

白式・雪羅のダブルイグニッション・ブリストで突撃した一夏はヤツの光翼の片方を切り裂く。

だが、もう片方の光翼を切り裂くのは至難の業であり、うまく行かない。

一夏を危険と判断したヤツは一気に一夏から距離を取り、エネルギー弾を放つ。

「ぐっ！？ クソ！！」

シールドを展開させてヤツの攻撃を防ぐが、何故か苦しそうな表情をする。

どうやら、活動限界が近づいているようだ。

「一夏！」

「箒！？ お前、ダメージは——」

「大丈夫だ！ それよりも、これを受け取れ！！」

一夏の元へやってきた箒が一夏の手に触れる。

「な、なんだ……？ エネルギーが回復！？ 箒、これは——」

「今は考えるな！ それよりも、今は——」

「福音を落とすことだけ考えるぞ」

俺達を狙って福音が撃ってきていたので、それを払いのけながら言う。

「箒、優哉……。おうつー！」

一夏と箒が福音に向かっていったところで、俺は全員に命令を出す。

「セシリア、ラウラ、お前らはとにかく撃って、一夏に攻撃のチャンスを作れ」

『了解だ（ですわ）』

俺の命令に従ってラウラは地上へ、セシリアは一夏達を追っていく。

「鈴は龍砲で福音の注意を引きつけてくれ。」

シャルは鈴の防御、出来るのなら攻撃にも参加してくれ」

『了解』』

命令を聞いた直後、二人も福音を追い始める。

「そして箒、お前は出来るだけ一夏のサポートをしろ。

一夏のエネルギーを持たせるために、一夏に降りかかる火の粉を払え」

『了解だ』

「一夏！！」

『おう！！』

「俺達を信じて、お前は福音に突っ込め！！

俺がお前に言えるのは、それだけだ！！」

『優哉……、おうわかったぜ』

一通り、命令を出し終えた後、俺も全速力で福音を追う。

「……はあああつ！！」

福音の後ろに回り込み、月光で切りかかる。
が、軽くよけられてしまう。

「チツ、アレでも、よけられるのか」

しかもよけるだけでなく、反撃までくれやがった。

「月影、ディフェンスモードだ」

画面にディフェンスモードという文字が出現する。

そして月光の刀身に青白いオーラみたいなのが、具現される。

そしてそれを俺は……………

「はあああつ!!」

福音が撃ち出した弾に向かってひと振りする。

すると、剣を降った方向にある弾がひとりでに爆発していく。

「月影、アタックモード」

月光が普通に戻り、それを見届けてから俺は福音に突撃する。

「ラウラ、頼む!!」

「任せろ!!」

俺の突撃と同時にラウラに砲撃を頼む。

「喰らいやがれっ!!」

ラウラの砲撃、俺の剣筋。

同時に行なった攻撃だが、両方ともよけられてしまう。

「…………一夏、今だ!!」

「うおおおおーっ!!」

零落白夜を発動させ、福音に突っ込むが躲されてしまう。

それだけではなく、福音は一夏とラウラに狙いを絞る。

…………なるほど、スピードが早い俺よりも遅い奴を先にやるうって魂胆か。

「ラウラっ!!」

一夏はよけるだろうな。

そう一夏を信じ、俺はラウラの方へ向かうが間に合わない。

「くっ……」

「ラウラ、お待たせ」

運良くというか、タイミングよく出現した香菜によって守られる。

「香菜！？お前、無事だったのか？」

「そんなこと言ったら、全員でしょ。」

さて、優哉。

ラウラの護りは私に任せて、アンタはさっさと決めてちゃって」

「ああ、そっちは任せた」

ラウラを香菜に任せ、俺は福音に突っ込む。

俺の突撃を察知した福音はこちらを向き、

シルバー・ベルを発動させようとしたのだが、

真上から銃撃を受け、福音は一旦、後ろに引き下がる。

「私がここにおりましてよ」

セシリアの銃撃をよけ、

「一夏っ、優哉、もう一回よ！！」

鈴の龍砲をよけた福音は、全方位にエネルギー弾を発射する。

「鈴っ！！」

位置的に鈴は直撃する。

直感でそう感じたのか、シャルは鈴に向かって瞬時加速する。

「一夏、急いで！！このままじゃもたない」

そしてシールドを貼る。が、集中砲撃を受ける。

その間に俺達は一緒に福音の真上まで行く。

「一夏、仕留めろっ!!」

雪羅を一気に福音まで投げ飛ばす。

その勢いを殺すことなく、一夏は福音に突っ込む。

「今度は逃がさねえ!!」

だが、福音は逃げようとする。

「もう、逃がさない!」

福音が逃げようとした場所へ先周りしてきた筈。

空裂と穿月をうまく使い、福音にダメージを少しずつ与えていく。

「一夏っ、今だ!!」

「うおおおおおおおーっ!!」

最後の一突きだ。と言わんばかりに一夏は一直線に福音まで突進していく。

福音は翼からでる全ての弾を一夏にぶつけていく。

……あいつ、一か八かで突っ込みやがったな。

かなり限界に近いだろ。アレは。

だが、その一夏の行動が良かったのか。

福音は動きを止める。

「はぁ、やっと終わった」

一夏がそういつて気を抜いた直後。

アーマーを失い、スーツだけになった操縦者が海へ落ちていく。

「しまっー」

「ーったく、ツメが甘いよ。ツメが」

なんとか、海面ギリギリのところまで鈴がキャッチしてくれたみたいだ。
ホッ、と一息つく俺達。

「……終わった」

「ああ、終わったな」

俺と香菜は肩を並べて、そういう。
空は既に夜空ではなく、朱がさしていた。

こうして【銀の福音事件】は無事、解決した。

47話 決着（後書き）

小説版だとあつという間に福音戦が
終わった記憶があつたので、
アニメ版の方を入れてみました。

どうでしたでしょうか？

こっちのほうが発展的には
おいしいと思うのですが…… w w

感想などありましたら、是非言ってください。

48話 作戦終了

「作戦完了——と言いたところだが、

お前たちは独自行動により重大な違反を犯した。

黒月以外、帰ったらすぐ反省文と懲罰用の

特別トレーニングを用意してやるから、そのつもりでいろ」

「……はい」

福音の暴走を止めた俺たちを待っていたのは、千冬さんの説教だった。

「というか、命令違反って何？」

「ああ、それで俺だけ罰がないのか。」

「あ、あの、織斑先生。もうそろそろそのへんで……。怪我人もいますし」

「ふん……」

「じゃ、じゃあ、一度休憩してから診察しましょうか。」

ちゃんと服を脱いで全身見せてくださいね。——あ！

男女別ですよ！ わかってますが、織斑くん、黒月くん！」

わかってますって。誰が好き好んで女子の前で脱がないといけないんだよ。

山田先生からジュースを貰って飲む。

とりあえず、今は部屋に戻ろうつと。

なんか怪我のせいであちこち痛いし、シンドイし。

福音に墮とされた時のダメージも残ってるしな。そう思い俺が部屋を出たときのことだった。

「……………」とつとと出てけ！」「……………」

部屋の中からそんな声が聞こえてくる。

それと同時に一夏がこちらの部屋に飛び出てきた。

あーあ、一夏のやつ、やっちまったんだな。

「……………」一夏、お前何やってんだ？

普通は直ぐにでないとダメだろうが」

「ははは、悪い。

ちよつと考え事をしててさ」

考え事？一夏にしては珍しいな。

そんなことを考え、思っていると一夏は……………」

「……………」俺、仲間を護れたんだな。って」

「ああ、お前は立派に護ってたぞ。

……………」いや、お前と白式がーって、言った方が良いかな」

「そうだな……………」

こいつがいなかったら俺は、戦うことすら出来ないからな」
腕につけているガントレットを撫でながら一夏は言う。

……………」そうだな。

一夏の言うとおり、俺達はESに救われてるよな。

今回だって、仲間を護るために新しい力をくれたし。

（ありがとな。黒影）

PV20万突破記念だったはず（前書き）

いつの間にかPV40万、いつちゃってました。

はぁ、どうしよう？

喜びたいのに、喜べない。

何この、ジレンマ。

と、まあ、無駄話はさておき、

50万突破記念のとき、何をしたら良いのかわからないので、後書きに候補を上げておきます。

その中で一つ、上げてくれるとありがたいです。

いつになるかわからないけどww

PV20万突破記念だったはず

とある休日、俺は香菜と一緒に街へ買い物に出ていた。

勿論、俺の場合はシャルやラウラに見つからないように黙ってた。

そして街へ買い物に出た理由としては、

この前の福音事件の最中に渡した予約権の効果って言ったらわかるかな？

「……で、香菜は何が欲しいんだ？」

俺の手をきゅっと握り締め、隣にくっついてる香菜に聞く。

さながらカップルのように歩いている俺達だが、“まだ”俺達は力ツプルではない。

街の人達に誤解されてなかったら良いけど。

「んー？ そうだね……、まだ決まってるじゃないかな」

白いワンピースの上から茶色のカーディガンを羽織るという、

いつもよりもオシャレをしている香菜がいう。

「ーいつもはこいつ、オシャレという言葉からはかなり程遠い存在なのにな。」

「おいおい、決まってるのに俺を街に連れてきたのかよ……」

「……だって仕方ないじゃない」

頬を膨らませながら文句をいう。

そんなことをしてるから、お前は前から子供っぽいって言われるんだよ。

「はいはい、それじゃあ色々と見て回ろうか」

「うんっ！ー！」

「ーホント、これじゃあ“前”と変わらねえじゃん。

いや、前はこんなに素直ではなかったか。

元気に俺の横を歩く香菜を見ながら思う。

「……これは、どうだ？」

「どれどれ……」

手にとって見せたのは、ダイヤモンドで作られた小さな星がついてあるネックレス。

「うわぁ、カワイイ。これ、いいなあ」

それを見て香菜はうつとりしていた。

「ーやっぱり香菜も女の子なんだな。

あんまりオシャレには興味がないようでも、宝石とかには興味津津なんだな。

「うわっ、高い！？」

ネックレスについていた値段表を見てしまったのか、値段に驚く。まあ、数十万とかするから普通に高いだろうな。

「……マジかよ」

「ーうん、残念。

これは置いておいて、他のにしよっ」

ネックレスを俺に渡して、他の物を見に行く香菜。

「ーだけど、俺は見ってしまった。」

ネックレスを俺に渡したとき、心底、残念そうな表情をしていたのを。

（……ったく、そんな顔見てしまったら、やるしかないじゃねえかよ）

「すいません、ちょっと良いですか？」

「あ、はい。……なんでしょうか？」

近くにいた店員を呼び、耳元であることを頼む。

「ー……出来ますか？」

「ええ、出来ますよ」

「それじゃあ、お願いします。」

また後で受け取りにきますので」

「ええ、お待ちしてます」

頑張ってください。そう店員から聞こえた気がするが、気のせいだろう。

「……はあ、良いものなかったな」

夕暮れ、俺達は人があまり通らないような場所にいた。人があまり通らないーーだけど、その場所は治安が悪い。とかいう意味ではなく、なんというか静かな場所だ。

「まあ、そんなに気を落とすな。」

俺はいつでも付き合ってやるからさ」

「うん、……だけど、やっぱりあのネックレスは良いものだったんだよね。」

あんなに綺麗な物は初めて見たよ」

「やっぱりあのネックレス、そんなに気にいってたんだな」

「ーーあれ、バレてた？」

「ああ、バレバレだぞ」

そう宣言してやると、香菜は苦笑いをした。

本人はバレてないと思ってたんだろうな。

「まあ、あの値段だったらかかしくはないと思うけどね。だって、あんなに綺麗だったんだもん」

夕日をバックにして呟く香菜の姿は、とても綺麗だった。

「香菜……」

「ん、なに？」

あまりに綺麗で見とれていたせいか、

香菜の名前を呟いてしまっていたようだ。

ーーもう、言ってしまうか。

「なあ、香菜。俺達って、案外酷い目にあってきたよな……」

「そうだね……。前の世界でも、優哉の扱いは酷かったしね」

それにこの世界でも、何回も傷ついてるしね。と香菜は言った。

「まあ、そうだな。」

この世界で傷ついてるのは俺自身の意思だけだね」

「優哉ってさ、DMなの？」

笑いながら香菜は雰囲気壊すようなことを言う。

「そういう意味じゃねえよ。わかってて言ってるんだろ？」

「まあね。……どうせ、護りたいと思ったから」

自分の身を犠牲にしてまで護った。そう言いたいんでしょ？」

やっぱ、わかってんじゃないかよ。

「まあ、そんなところだ。」

でさ、話を戻すけどーそろそろ幸せになってもいいよな？」

「ーうん、良いんじゃないかな」

「あのさ、俺、好きな人がいるんだ」

「えっ？ あつ、えつと……」

いきなりの発言に驚いたのか、香菜はたじろぐ。

「でもさ、どうやって想いを告げたら良いのかわからないんだ」

「……………」

結果、黙って俺の話を聞いて置こう。

そう思ったのか、香菜はずっと俺の話を聞いてくれていた。

「でさ、思いついたんだ。

やっぱり俺の思った通り、言葉にしよう」と

「……うん、それがいいと思うよ。」

あーあ、こんなに優哉に想われてる娘は幸せだな」

俺の話を聞いて、何故か香菜は残念そうな顔をする。
それを隠すためか、背を向ける。

「だから、思った通り言葉にするよ」

「香菜、俺はお前が好きだ」

「……えっ？」

突然の告白に驚いたからか、勢い良く振り向く。
だが、香菜の綺麗なその瞳には涙が溢れていた。

「ずっとずっと、我慢してたんだ。だけど、もう我慢できなかった」

「でも、私は……仮にも妹なんだよ？」

「前世が妹とか関係ねえ！！俺はお前が好きなんだよ。」

前世とかそんなの関係なしに、俺はお前……神崎香菜が好きなんだ」
目の前で泣きじゃくる香菜に抱きつきながら、俺は思いのままに言う。

事前に考えていた言葉や、咄嗟に思いついた言葉ではなく。

――心から思っていた言葉を。

「……嬉しい」

「嬉しいなら、なんで泣いてんだよ」

「ばか……、嬉しくても泣くときはあるでしょ」

ははは、と俺は笑う。

――あ、そうだ。そろそろ渡すか。

「香菜、ちょっと後ろむいてくれるか？」

「うん……？別に良いけど」

顔に疑問符を浮かべながら、香菜は後ろを向く。

そんな香菜に後ろから抱きつく。

「なあ、香菜。返事を聞かせてくれないか？」

さつきからずっと、待ってるんだけど」

「あっ」

「まったく、忘れてたのかよ」

「ごめん。……で、返事だけど」
そこまで言って、深呼吸をする。

「私もずっと、好きです。私と付き合ってくださいか？」
「勿論っ!!」

返事はOKだった。

その言葉が本当に嬉しくて、
俺はその場で香菜のために買ってきたモノをつける。

「あ、コレ!? あのときの……」

俺が香菜につけたのはネックレスだ。勿論、香菜がずっと見ていた。

小さいダイヤモンドの星がついているネックレス。

「ああ、店員さんに無理いつて買ってきた」

まあ、無理といっても、あの人がい出したことなんだけどな。

『今度、必ずお金を払うので……今、受け取ること出来ますか?』

『ええ、出来ますよ。』

まあ、あなただから、許せることですけどね』

『それじゃあ、お願いします。』

また後で受け取りにきますので』

『ええ、お待ちしております』

そういつて一旦、店を出たあと。

店に戻って言われたのは、サインを15枚ぐらい書いてくれて話

だった。

なんでもこのネックレスを作った人と店の店長が、俺のファンらしい。

……俺、ファンを作るような行動、してないんだけどな。

まあ、そんなわけでサインを書いたらもらえたってわけだ。

――15枚も書いて、どうするのは知らないけど。

「でも、高かったんじゃない……」

「大丈夫だから、気にすんな」

焦ったようすの香菜を見ながら、俺は気楽に言う。

「……まっ、これで香菜を縛る鎖になるなら、それはそれで良いんだけどな」

あ、でもそれなら首輪を買ったほうが良かったかも。

ふざけてそう言った俺に香菜は怒った。

「もう……！ ふざけないでよ。」

雰囲気ぶち壊しじゃない……」

「お返したよ。俺だってさっき、

告白しようとしたとき雰囲気壊されたし」

「バカ……」

と言って、拗ねたように頬を膨らませる。

「……だけど、私は優哉が好きなのよね」
「これは冗談なしで、俺の本心だ。……愛してるよ、香菜」
「私も、よ。……優哉」
そういつて俺達はキスをした。
もうすでに、俺達に会話はいらなかった。

それから二人は幸せに日常を過ごしていましたとさ。

I F S T O R Y

（ E N D ）

PV20万突破記念だっ はず(後書き)

?ーもしも1巻でセシリアフラグをたてていたら?

?ーもしも鈴の好きな人が優哉だったら?

?ーもしもラウラと優哉の性別が替わったら?(オススメww)

?ーもしも香菜と優哉の性別が替わったら?

?ーもしも一夏の性別が変わったら?

?ーもしも全員の性別が変わったら?

(これは他の作品であったような気がしたかも……)

途中から展開がおかしくなりましたねww

最後の方は作者の悪乗りです。

ちなみにシャルの話は書いてる途中なので、パスしました。
第は……書けないです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6111u/>

IS ~ 漆黒の守護者 ~

2011年10月30日09時06分発行